

2025Jリーグ アカデミー活動助成金制度 活動報告書

2026年2月
公益社団法人 日本プロサッカーリーグ

ご挨拶

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ 執行役員 フットボール本部長 窪田 慎二

Jリーグは、次の10年で目指す姿を実現するために、成長戦略として、「トップ層が、ナショナル(グローバル)コンテンツとして輝く」「60クラブが、それぞれの地域で輝く」という、2つのテーマを掲げています。

Jリーグ全体の国際競争力を高めて価値を上げていくために、フットボールの強化、何より育成年代の強化は不可欠です。それには、リーグ全体で様々な施策に取り組むとともに、全国の育成拠点であるJクラブの育成組織、アカデミーの底上げが必要となります。育成年代の強化には、日常の競技環境では体験できないことを体験することが重要です。特に国際経験は大きな効果をもたらし、経験した選手のその後の競技人生を大きく左右するだけでなく、クラブの育成環境の成長にもつながります。

これを実現するために、2024年から「Jリーグアカデミー活動助成金制度」を設定。「①チーム単位で行う『海外遠征』」、「②少人数で海外クラブのアカデミーチームで経験を積む『海外研修』」、「③日本国内での『国際大会主催』」、「④年間を通じてリーグ戦を行う『国内大会主催』」、「⑤その他」の5つの活動を支援しています。

初年度はJクラブ全60クラブのうち、44クラブが80件の活動を実施し、2年目となる2025年度は60クラブのうち、昨年より10クラブ多い54クラブが86件の活動を行いました。そのうち海外での活動は8割を超え、73件の活動が行われました。

新型コロナウイルスの影響で海外での活動が制限されていた中、助成金の後押しもあって海外での活動が再開・拡大し、海外での活動以外にも、国内では海外や全国から参加チームを誘致する大会の開催も増えています。そして、本助成金制度ではアカデミーダイレクターが集まる会議での事例共有や、報告書の作成を通じて、クラブ間の共有にも力を入れています。

- ・哲学をもって育成年代における海外経験を、成長カーブのマイルストーンに据えているクラブ。
- ・助成金によって初めて海外遠征を経験して、クラブとして国際経験機会の創出の基盤を作りつつあるクラブ。
- ・他のクラブ実績も参考にしながら、国際活動をブラッシュアップしているクラブ。

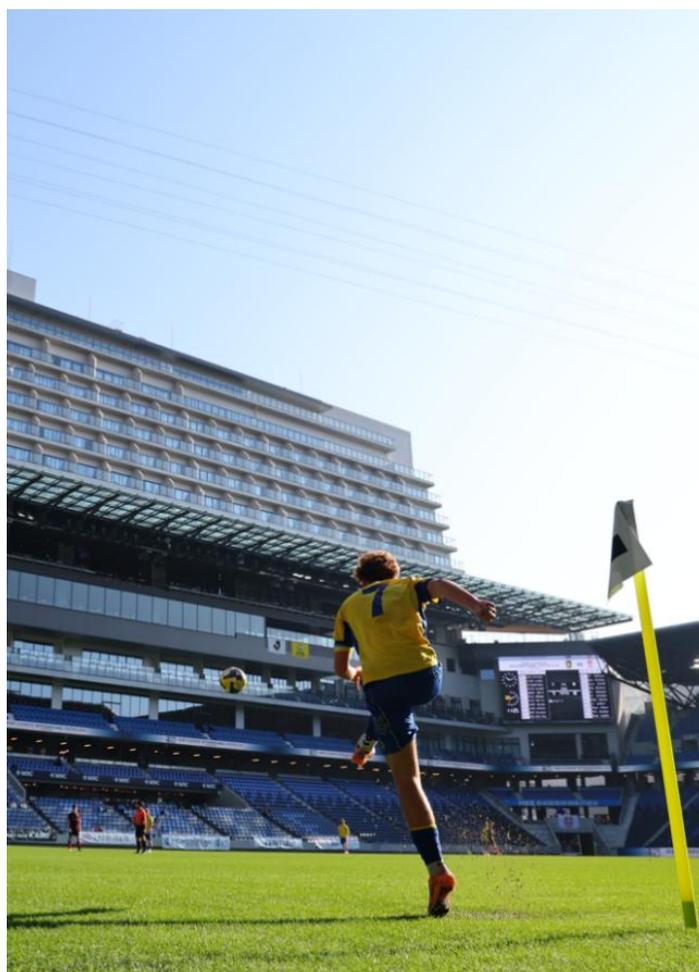
2年目は、1年目の実績を経て、活動がさらに充実し、一過性ではなくクラブの育成組織の成長にもつながっています。助成金活動での海外経験をきっかけに欧州5大リーグのひとつに移籍が決定した選手や、アカデミーに所属しながら、トップカテゴリーで力を発揮してチームの勝利に貢献している選手も現れ、具体的な成果が表れているのも喜ばしいことです。

助成金制度が始まって3年目の2026年は、より多くの選手、指導者、クラブが、制度を活用してさらに成長を促す活動ができることを願っています。

最後に、海外への渡航や滞在に協力してくださった皆様や、現地で受け入れてくださった各クラブや大会主催者の皆様。文化交流や社会学習にご協力くださった皆様。そして、ホームタウンでの大会開催にご協力いただいた皆様をはじめ、活動にご協力くださった多くの皆様に心より感謝申し上げます。

目次 ※クラブ名をクリックすると各クラブの報告書にジャンプします

ご挨拶	2	京都サンガ F.C.	123
目次	3	ガンバ大阪	129
実施概要	5	セレッソ大阪	133
実施概要	6	ヴィッセル神戸	135
活動サマリー	7	奈良クラブ	139
活動一覧	8	ガイナレ鳥取	141
スペシャル座談会	13	ファジアーノ岡山	143
各クラブ報告書	19	サンフレッチェ広島	147
北海道コンサドーレ札幌	21	徳島ヴォルティス	155
ヴァンラーレ八戸	23	愛媛FC	159
ベガルタ仙台	25	FC今治	163
ブラウブリッツ秋田	27	アビスパ福岡	165
モンテディオ山形	29	ギラヴァンツ北九州	167
福島ユナイテッドFC	35	サガン鳥栖	169
いわきFC	37	V・ファーレン長崎	173
鹿島アントラーズ	41	ロアッソ熊本	183
水戸ホーリーホック	43	大分トリニータ	185
栃木シティ	45	テゲバジャーロ宮崎	191
ザスパ群馬	47	鹿児島ユナイテッドFC	195
浦和レッズ	49		
RB 大宮アルディージャ	53		
ジェフユナイテッド千葉	57		
柏レイソル	61		
FC東京	65		
東京ヴェルディ	69		
FC町田ゼルビア	71		
川崎フロンターレ	77		
横浜F・マリノス	79		
横浜FC	81		
湘南ベルマーレ	83		
ヴァンフォーレ甲府	85		
松本山雅FC	89		
AC長野パルセイロ	91		
アルビレックス新潟	93		
カターレ富山	99		
ツエーゲン金沢	105		
清水エスパルス	109		
ジュビロ磐田	111		
藤枝MYFC	113		
アスルクラロ沼津	117		
名古屋グランパス	119		
FC岐阜	121		





2025Jリーグアカデミー活動助成金制度 実施概要

2025Jリーグアカデミー活動助成金制度 実施概要

- 目的 Jリーグアカデミー活動助成金(以下、「本助成金」)は、Jリーグアカデミーの3つの方針、「**自クラブで活躍する選手の育成**」、「**移籍金収益を獲得するための選手育成**」、「**自クラブを応援する人の育成**」を推進するため、クラブが取り組む施策のうち、「世界基準をクラブ内に構築するための選手や指導者の国際経験の機会創出」、「選手が定期的な試合経験を積むための国内における試合環境の構築」の事業を支援することで、「各クラブの育成戦略に基づいた追加的施策の企画、立案、実行を促進し、選手、指導者個々が成長すること」。
- また、「再現性のあるアカデミーの仕組みを構築し、持続的に発展すること」、そして、この活動を通して、Jリーグ・Jクラブでナレッジを共有することにより、Jリーグアカデミー全体の底上げを目的とする。
- 概要 本助成金は、2025年中に行われる選手、指導者の育成に紐づくクラブの活動のうち、特に、「国際経験の機会創出」と「定期的な試合環境の構築」を対象とする。
- 助成金額は1クラブ400万円かつ総額の50%を上限とする。
- ただし、7/30以降、選手個人等の海外活動は追加で100万円活用可能とし、その場合は1クラブ500万円かつ総額の50%が上限となる。
- 実施期間 2025年1月～2025年12月末
- 参加クラブ数 54クラブ（前年比+10クラブ）
- 実施件数 86件（前年比+6件）
- 参加人数 約4,000名の選手、スタッフが助成金を活用した取り組みに参加
- 活動種別
- ①**海外遠征(チーム単位)**
 - チーム単位での海外遠征。現地での大会参加等。
 - ②**海外活動(個人)**
 - 選手若干名の海外クラブへの練習参加、指導者の海外クラブ始動研修等。
 - ③**国際大会主催**
 - ホームタウンにて海外クラブを招聘した国際大会を開催
 - ④**国内大会主催(年間を通じたリーグ戦)**
 - 国内で年間を通じたリーグ戦の開催
 - ⑤**その他(上記①～④を原則とするが、目的に沿っていると特別に認めた活動)**

2025Jリーグアカデミー活動助成金制度 活動一覧

クラブ名	対象活動の名称 ※活動名をクリックすると、当該ページに移動します	期間	渡航先 (海外)	対象年代	対象活動					
					活動分類	①	②	③	⑥	⑦
札幌	U-17 タイ遠征「JSE INTERNATIONAL FOOTBALL FESTIVAL 2025 U-17」	12月9日～17日	タイ	U-17, U-16	①海外遠征					
八戸	ヴァンラーレ八戸 FC U-13 ベトナム遠征	12月17日～22日	ベトナム	U-13	①海外遠征					
仙台	ベガルタ仙台 U-17 イタリア遠征	8月17日～26日	イタリア	U-17	①海外遠征					
秋田	ブラウブリッツ秋田 U-15B ドイツ遠征	3月24日～4月2日	ドイツ	U-14	①海外遠征					
山形	個人留学・スタッフ研修	11月30日～12月11日	スペイン	U-16,指導者	②海外活動(個人)					
山形	モンテディオ山形 U-14 選抜 海外遠征	12月3日～10日	タイ	U-14	①海外遠征					
福島	福島ユナイテッド FC U-13 フランス遠征	8月22日～29日	フランス	U-13	①海外遠征					
いわき	TEIJIN U-17 New Generation Cup 2025 in Thailand	10月29日～11月3日	タイ	U-17	①海外遠征					
いわき	いわき FC U-15 タイ遠征	12月5日～9日	タイ	U-15	①海外遠征					
鹿島	第25回日伯友好カップ参加	8月26日～9月7日	ブラジル	U-15	①海外遠征					
水戸	水戸ホーリーホックジュニアユース(U-14)ドイツ遠征	3月22日～4月1日	ドイツ	U-14	①海外遠征					
栃木 C	CITY WORLD FESTIVAL	12月20日～21日	—	U-11	③国際大会主催					
群馬	ガスパ群馬 U-11 INTERNATIONAL CUP 2025	12月19日～22日	—	U-11	③国際大会主催					
浦和	U-16 アルアイン国際ユーストーナメント	4月9日～22日	UAE	U-16	①海外遠征					
浦和	U-15 ブラジル遠征	7月18日～8月4日	ブラジル	U-15	①海外遠征					
大宮	RB ライプチヒ個人留学	8月8日～18日	ドイツ	U-18,U-17,指導者	②海外活動(個人)					
大宮	アカデミーダイレクター研修(RB ザルツブルク)	8月8日～18日	オーストリア	指導者	②海外活動(個人)					
千葉	2025 ジェフユナイテッド千葉 アカデミー選手・スタッフジローナ FC 短期留学	1月11日～21日	スペイン	U-16,指導者	②海外活動(個人)					
千葉	ジェフユナイテッド千葉 U-14 スペイン・マドリッド遠征	8月24日～9月2日	スペイン	U-14	①海外遠征					
柏	U-12 スペイン/ポルトガル遠征(Arousa Futbol 7 参加)	5月26日～6月3日	ポルトガル、スペイン	U-12	①海外遠征					
柏	アカデミースタッフ 海外研修(ビジャレアル)	11月19日～25日	スペイン	指導者	②海外活動(個人)					
FC 東京	U-15 むさしスペイン遠征	6月15日～24日	スペイン	U-14	①海外遠征					
FC 東京	FC 東京 U-17 フランス遠征	6月2日～11日	フランス	U-17	①海外遠征					
東京 V	東京ヴェルディ U-14 スペイン遠征	4月13日～22日	スペイン	U-14	①海外遠征					
町田	オリンピック・リヨン個人留学	3月4日～15日	フランス	U-18, U-17	②海外活動(個人)					

クラブ名	対象活動の名称 ※活動名をクリックすると、当該ページに移動します	期間	渡航先 (海外)	対象年代	対象活動					
					活動分類	①	②	③	⑥	⑦
町田	U-12 韓国遠征	7月23日～ 8月1日	大韓民国	U-12, U-11	①海外遠征					
町田	ユース韓国遠征	8月18日～ 23日	大韓民国	U-18, U-17, U-16	①海外遠征					
川崎 F	「第7回ベトナム日本国際ユースカップU-13」 へのU-13生田・U-13等々力の大会参加	12月18日 ～21日	ベトナム	U-13,指導者	①海外遠征					
横浜 FM	2025 マンチェスター遠征	3月12日～ 22日	イングランド	U-16, U-15	①海外遠征					
横浜 FC	U-14 スペイン・ポルトガル遠征	3月28日～ 4月5日	スペイン, ポルトガル	U-14	①海外遠征					
湘南	2025 COPA BELLMARE U-11 PILOT INTERNATIONAL TOURNAMENT	6月21日～ 22日	—	U-11,U-12 女子	③国際大会主催					
甲府	ヴァンフォーレ甲府 U-18 シンガポールキャンプ	1月16日～ 24日	シンガポ ール	U-17,U-16, 指導者	①海外遠征					
甲府	ヴァンフォーレ甲府 U-14 インドネシア遠征	4月14日～ 21日	インドネシア	U-14	①海外遠征					
松本	U-14 アメリカ遠征 New Year's Futures Cup 参加	1月1日～8 日	アメリカ合 衆国	U-14	①海外遠征					
長野	IIZUNA International Junior CUP2025	7月29日～ 31日	—	U-12	③国際大会主催					
新潟	JINTAN U14 ASEAN Dream Football Tournament 2025	7月20日～ 27日	タイ	U-14	①海外遠征					
新潟	SC プラガへ選手と指導者の短期留学	8月16日～ 9月1日	ポルトガル	U-17,U-16, 指導者	②海外活動(個人)					
新潟	選手個人と指導者の短期留学	10月17日 ～11月6日	ブラジル	U-16,指導者	②海外活動(個人)					
富山	カタール富山ユース選手スペイン留学	10月17日 ～11月2日	スペイン	U-18,U-17	②海外活動(個人)					
富山	カタール富山 U-13 ベトナム遠征	12月3日～ 9日	ベトナム	U-13	①海外遠征					
金沢	U-12 韓国遠征	7月27日～ 8月4日	大韓民国	U-12	①海外遠征					
金沢	第3回ツエーゲン金沢 J-league・U-11	8月22日～ 24日	—	U-11	③国際大会主催					
清水	Glico Challenge Tour in Spain 2025	8月26日～ 9月3日	スペイン	U-14	①海外遠征					
磐田	U-18 ドイツ遠征	3月10日～ 18日	ドイツ	U-18	①海外遠征					
藤枝	スペインよりゲストコーチを招いたクリニック	7月22日	—	U-14,指導者	⑤その他					<input type="checkbox"/>
藤枝	U-13 韓国遠征	8月3日～7 日	大韓民国	U-13	①海外遠征					
沼津	XIV NARDINO PREVIDI MEMORIAL 第14回 ナルディーノ・プレヴィディ記念大会 参加	9月1日～8 日	イタリア	U-15	①海外遠征					
名古屋	名古屋グランパス U-16 イタリア・ローマ遠征	3月22日～ 4月2日	イタリア	U-16, U-15	①海外遠征					
岐阜	FC 岐阜 U-17 U-14 海外遠征(大韓民国) 2025	8月4日～8 日	大韓民国	U-17, U-16, U-14	①海外遠征					
京都	京都サンガ F.C.U-15 韓国遠征	3月25日～ 29日	大韓民国	U-15	①海外遠征					
京都	U-13 タイ遠征	7月31日～ 8月6日	タイ	U-13	①海外遠征					

2025Jリーグアカデミー活動助成金制度 活動報告書

クラブ名	対象活動の名称 ※活動名をクリックすると、当該ページに移動します	期間	渡航先 (海外)	対象年代	対象活動					
					活動分類	①	②	③	⑥	⑦
京都	京都サンガ F.C.U-18 韓国遠征	8月9日～13日	大韓民国	U-18, U-17	①海外遠征					
G 大阪	AJAX FUTURE CUP 2025 参加	4月14日～22日	オランダ	U-17, U-16	①海外遠征					
G 大阪	JINTAN U14 ASEAN Dream Football Tournament 2025 参加	7月20日～27日	タイ	U-14	①海外遠征					
C 大阪	セレッソ大阪 U-13 選抜 スペイン遠征	9月8日～16日	スペイン	U-13	①海外遠征					
神戸	ヴィッセル神戸 U-15 ZED INTERNATIONAL LEAGUE への参加	2月17日～24日	エジプト	U-15	①海外遠征					
神戸	ヴィッセル神戸 U-18 アメリカ遠征	2月28日～3月10日	アメリカ合衆国	U-18	①海外遠征					
奈良	奈良クラブ U-13 スペイン遠征	12月3日～10日	スペイン	U-13	①海外遠征					
鳥取	アジア国際ユースサッカーIN 鳥取 2025	7月11日～13日	—	U-16	③国際大会主催					
岡山	フアジアーノ岡山 U-18 韓国遠征	8月12日～17日	大韓民国	U-18, U-17, U-16	①海外遠征					
岡山	第1回 Coppa FAGIANO U-13	10月25日～26日	—	U-13	④国内大会主催					
広島	2025年指導者留学 FCケルン	2月7日～19日	ドイツ	指導者	②海外活動(個人)					
広島	2025年選手・指導者留学 FCケルン	3月12日～21日	ドイツ	U-16, 指導者	②海外活動(個人)					
広島	2025年サンフレッチェ広島ジュニアユース U-13 ケルン遠征	8月18日～27日	ドイツ	U-13	①海外遠征					
広島	2025年ジュニアユース U14 タイ遠征(10月・JSE インターナショナルカップ)	10月16日～20日	タイ	U-14	①海外遠征					
徳島	徳島ヴォルティス U-14 カンボジア遠征	7月22日～28日	カンボジア	U-14	①海外遠征					
徳島	徳島ヴォルティスユース タイ遠征 (「U-17 TOKUSHIMA VORTIS BANGKOK CAMP2025」参加)	8月20日～25日	タイ	U-17, U-16	①海外遠征					
愛媛	韓国遠征 ソウル市近郊チームとの交流試合	3月25日～28日	大韓民国	U-14	①海外遠征					
愛媛	U-14 ASEAN Dream Football Tournament 2025	7月20日～28日	タイ	U-14	①海外遠征					
今治	FC今治 U-13 タイ遠征	12月10～16日	タイ	U-13	①海外遠征					
福岡	アビスパ福岡 U-14 イングランド・ロンドン遠征	2月16日～25日	イングランド	U-14	①海外遠征					
北九州	ギラヴァンツ北九州 U-12 韓国遠征	7月24日～28日	大韓民国	U-12, U-11	①海外遠征					
鳥栖	JSE INTERNATIONAL FOOTBALL FESTIVAL 2025 U15/16	8月21日～26日	タイ	U-15	①海外遠征					
鳥栖	サガン鳥栖 U-14 合同 スペイン遠征	11月26日～12月2日	スペイン	U-14	①海外遠征					
長崎	2025 V・VAREN Nagasaki Fes U-15	2月7日～9日	—	U-14	④国内大会主催					
長崎	U-12 韓国遠征	3月28日～4月2日	大韓民国	U-12	①海外遠征					
長崎	U-18 日韓親善交流大会	8月10日～15日	大韓民国	U-18	①海外遠征					

クラブ名	対象活動の名称 ※活動名をクリックすると、当該ページに移動します	期間	渡航先 (海外)	対象年代	対象活動					
					活動分類	①	②	③	⑥	⑦
長崎	V・ファーレン長崎 欧州視察	10月30日 ～11月9日	ベルギー、 ドイツ	指導者	⑤その他					
長崎	K League Asian Youth Championship	11月18日 ～22日	大韓民国	U-17	①海外遠征					
熊本	ロアッソ熊本ユース タイ遠征	10月15日 ～21日	タイ	U-17,指導者	①海外遠征					
大分	大分トリニータU-17 韓国強化遠征	8月2日～7日	大韓民国	U-17,U-16, 指導者	①海外遠征					
大分	ベルギーシントロイデン研修	8月26日～ 9月4日	ベルギー	U-15,指導者	②海外活動(個人)					
大分	大分トリニータU-17 ブラジル(ヴィラ・ノヴァ)研修	10月12日 ～25日	ブラジル	U-17,U-16, 指導者	②海外活動(個人)					
宮崎	IDP 導入・推進プロジェクト	3月26日～ 4月1日	—	指導者	⑤その他					
宮崎	宮崎国際サッカーフェスティバル 2025	7月28日～ 8月1日	—	U-18, U-17	③国際大会主催					
鹿児島	第1回 鹿児島国際ユース(U-20)サッカーフェスティバル	3月28日～ 30日	—	U-18	④国内大会主催					



2025Jリーグアカデミー活動助成金制度 スペシャル座談会

日本サッカーを支える選手と指導者のこれからのために
Jリーグアカデミー活動助成金制度の在り方を考える

Jリーグ	育成部	増本 伸弘
東京ヴェルディ	アカデミーダイレクター	寺谷 真弓
ロアッソ熊本	アカデミーダイレクター	藤原 英晃

実施日 2025年11月27日

日本サッカーを支える選手と 指導者のこれからのために

Jリーグアカデミー活動助成金制度のあり方を考える

Jリーグアカデミー活動助成金制度が発足し2シーズン。各クラブで様々な活動が行われてきました。手応えや課題が見えつつある中で、実際の活動の様子や現場の生のリアルな声とは――。育成現場を担う東京ヴェルディ 寺谷真弓アカデミーダイレクターとロアッソ熊本 藤原英晃アカデミーダイレクター、そして、Jリーグ育成部 増本伸弘に存分に語っていただきました。

インタビューは2025年11月27日に実施／選手の年齢はインタビュー当時（構成・執筆／青柳 舞子）



■活動助成金制度活用のきっかけ

寺谷 クラブでは、これまでも海外遠征などに行っていました。その中で「中学2年生に必ず海外経験をさせる」ことをスタンダードにしていけたらと考えていたんです。そのさなかにコロナ禍に突入。なかなか活動ができない時期に活動助成金制度が始まることを知り、定期的な活動ができる可能性を感じました。本来、中学年代で1回、高校年代で1回の海外経験をさせたいという思いは抱いていますが、まずは「中学2年生全員を海外遠征に行

かせる」ことをクラブの方針として打ち出すきっかけになったのが、活動助成金制度です。



寺谷真弓(てらたに まゆみ)
東京ヴェルディ アカデミーダイレクター
読売西友ペレーザ、鈴与清水ラブリレディースでプレー。引退後、日テレ・メニーナで指導を開始。日テレ・ペレーザ監督を経て2018年より現職。

増本 以前、JFA・Jリーグ協働プログラムで海外遠征を支援していたのですが、コロナ禍によって足踏みをしていた状態になりました。経験は大事ですが、世界情勢的にも、資金的にも「行きたいけれど、行けない」状況。そこで、その背中を少しでも押せるような支援を、リーグができればいいなと思って始めたのがJリーグアカデミー活動助成金制度です。リーグは、クラブがその一歩を踏み出すための「きっかけ」をサポートする立場で、その先はクラブの皆さんが、それぞれの歩き方をしていく。それを行っている途中ではありませんね。

藤原 熊本の場合、予算的な面で見ると、チーム単位での海外遠征は難しくても「個人留学ではどうだろうか」という考えがありました。個人単位なら費用も捻出できるかもしれない。クラブ全体を説得・調整していたときに、「リーグで活動助成金制度が始まりそうだ」と。うまく連携ができれば「やっていきたい」と、踏み切った形です。（相談していた）テリー・ウェストリー氏との話の中で、個をしっかり伸ばし、トップで活躍するタレントを発掘して育成する。そういう選手育成のためにも「すごくいいこと」ではないかと進めた結果が、この形になってきているかなと感じます。活動をしたからといって、すぐに結果

には表れないかもしれない。でも続けることで、これからの選手たちが「こういう経験をしたい」と思うようになれば「クラブとしての価値も上がっていく」と、思います。



藤原 英児(ふじわら ひであき)
Urawa Red Diamonds アカデミーダイレクター

東海大学を卒業後、北海道で中学校、高校で教員を 33 年間務め、育成、指導者養成等に携わる。2016 年熊本地震を機に Urawa Red Diamonds へ、普及スタッフを経て、2018 年より現職。日本サッカー協会 Pro ライセンス保有。

■活動(海外遠征・個人留学)の影響

藤原 個人がしっかりと自分に向き合って取り組む姿勢が、さらに芽生えて実践できるようになったと感じます。その選手の取り組みが、周囲にも影響をしていく。例えば、世代別の代表で招集される選手たちは、海外遠征や大会などを経て、目の色を変えて帰ってきます。そのように世界を経験すると、日常でも「これをやらない」という気づきが出て取り組んでいきますから、他の選手にもいい影響を与えていく。ですから外に出ていくことは非常にいい機会であり、クラブにとっても有益ではないかと感じます。

寺谷 東京 V では中学 2 年生にしぼって海外遠征を決めましたが、この年代は本当に難しい。A チームに絡む選手たちは厳しい公式戦もずっと戦っていけるのですが、それ以外の選手がまったりしてしまうと言いますか……例年、そういう時期ではあったのですが、海外遠征を経てからは全員ではないにしても、「自分もひとつ上のカテゴリーに絡みたい」、「目の色を変えてやらないといけない」といったように、大きく変化が見えた選手が出てきました。

た。チームとして活動した意義があったなと感じています。また、関東のチームは特にだと思いますが、中学 1 年生の選手獲得がとても大変です。その際に、クラブ紹介で「経費はかかるけれど、海外での経験を 1 回してもらおう」という謳い文句を提示できることも、クラブにとってプラスに働いていると思います。

増本 活動助成金制度の狙いのひとつは、個の育成です。「個を育てていくことは大事」だと言われてきましたが、徹底できていたのかは課題として抱く中で、海外遠征に特化した支援だけではなく、個人での国際経験もリーグとして大事にしたいと考えての実施でした。最近では、チームで海外遠征を実施する中でも、個にもしっかり目を向けている様子がクラブの報告からもわかります。個の育成においては、すべてが大事な 1 年。各年代をどのように充実させていくのかは、大事なことですよね。



増本 伸弘(ますもと のぶひろ)

Jリーグ フットボール本部 育成部 部長(当時)

大学卒業後、1998 年に湘南ベルマーレアカデミーでコーチとしてのキャリアをスタート。2005 年に柏レイソルへ移籍し、アカデミーコーチを続ける。2011 年～2015 年まではアカデミーのマネジメントを担当。2016 年から Jリーグスタッフとして JFA・Jリーグ協働プログラム、2019 年から Jリーグ育成施策 Project DNA に関わり、現在は Jリーグ育成部に所属。

寺谷 海外遠征では普段見られない場面に触れることで発見もありました。ひとつが、食事です。宿泊施設にキッチンがあったので(※)、選手に朝食を作ってもらいました。最初はパンにスープだけだったのが、日を追うごとに成長していった。毎朝、用意してくれるご家族への感謝の気持ちが報告書に綴られていたのも印象的でした。(※大学の寮に宿泊)

藤原 そのプレゼンを聞いて、すごくいいなと思ったのです。「かわいい子には旅をさせろ」の気持ちを感じましたし。今、日本の教育現場。特に中学生年代は、学校生活の中でも失敗をさせない風潮になってきています。でも、本来はそうではないのではないかと。東京 V さんの取り組みは、失敗はするけれど、次にどうしていけばいいのというネクストチャレンジにつながっていますよね。それを 14 歳年代で経験させるのはすごいこと。他クラブがやっていることも共有してもらえることによって、自分たちのクラブで、噛み砕いて咀嚼して何かできることはないかと考えられるのも大きいですね。いろいろなアイデアが生まれてくると思います。

増本 日本サッカー界全体やJリーグ全体を考えたときに、皆さんが行っている経験・知見を全体で共有することで、全体の経験・知見になっていく。我々が支援することで全体にシェアされ、そこから気づき・学びがあって、また違うアイデアが出る。それも活動助成金制度の狙いなので、そのお話を聞けてうれしいですね。



遠征中の朝食は選手が自分たちで用意。決められた予算の範囲で材料を購入し、日に日に充実したメニューに。

■指導者の影響について

寺谷 影響という観点では、海外遠征に帯同していくスタッフもいい勉強の場になっています。日本でしか経験がなかったスタッフは、海外の同年代の選手がどのぐらいだというのを目の当たりにして帰ってくる。「世界を見据えながら」という視点が加わるので、より選手育成のイメージがしやすくなっていると思います。

藤原 我々も同様ですね。海外に行くことによってスタッフもしっかり知見を得る。今度は、それを選手に共有する。一緒に育っていく形が必要だなと感じて、熊本では、同じスタッフにしないようにしたり、若いスタッフが担当するようにしたりしています。

増本 良い指導者の資質のひとつに成長意欲があります。指導者の成長意欲は選手の成長意欲にも影響を及ぼすと思っています。選手は指導者の様子をよく見ているので。選手も指導者も、現地で学ぶことはたくさんあると思います。また、今後は、指導者も海外で活躍する時代が、きっと来るはず。指導者も、選手と同じく国際経験を積むことで成長につながると信じています。

■学校教育や周囲との連携について

藤原 学校の理解が本当に得られているなど思っています。今回の個人留学の際には、公欠扱いとなりました。学校は「普段できないことを経験できることは素晴らしいことで、それが他の生徒に与える影響があるのでは」と、有意義に捉えてくれています。そうした面でも、サッカーは本当に先進的。もちろん、その理解を得るためにも、我々が思っていること、考えていることをしっかりと学校には伝えるに行くことは大事にしています。閉鎖的に、クラブ内で収めるのではなく、広めていくことも選手育成においては重要。それが、クラブのブランディングや地域の教育にもつながっていけばいいと思います。

寺谷 学校もそうですが、選手を送り出してくれている4種のチームの方も、活動のことは見えています。クラブがどんな活動をしているのか。それをすぐ見ていると感ずるので、その点でも広げていくこと、広がっていくことは大切なポイントですよね。

■世界に羽ばたきJリーグで活躍する選手の輩出を

増本 熊本では、神代(慶人／くましろけいと／18歳)選手の活躍があります。活動助成金制度を最初に使っていただいたクラブの選手がJリーグのピッチに立つ。台本を書いていたようなストーリーですけど、選手本人が経験を生かして、新たなステージに行っていることに対しては、どのように感じていますか？

藤原 神代はひとつ上の代に道脇(豊／SK ベフェレン／19歳)がいました。近くにライバルがいたこともあり、個人でしっかりと物事を捉えて、今、何に取り組むのがしっかりと芽生えています。そのきっかけになったのは、活動助成金制度を利用した個人留学が影響しているのかなど。我々にとっても多面的にいろいろな形で取り組めた育成となったのですが、神代の場合はジュニアから所属しているので、みんなが関わって育てていく。それがクラブの中で

も醸成されてきたのは大きいですね。ベストプラクティスのモデルになりそうな選手が出てきたことによって、我々の基準値も明確にすることができました。もちろん、まだまだ成功しているとは思っていませんし、改善の余地はある。でも、いい経験をさせてもらっているという感覚も強いですね。

増本 いろいろと考えながら、ベストプラクティスを見つけていく道程だと思います。東京Vもゼイナー(大耀／15歳)選手がJリーグインターナショナルシリーズ2025アカデミーマッチに出場しました。それぞれのクラブは歴史も違いますし、サンプル数も違う。その中でどのように選手を輩出していくかは楽しみでもあります。



右から遠征に参加したロアッソ熊本の岡本 賢明ユース監督、神代 慶人選手、元松 蒼太選手、一人おいて八木 大ユースコーチ。留学に尽力されたテリー・ウェストリー氏と。



チェルシーの練習に参加する、神代 慶人選手(左)、元松 蒼太選手(右)。

寺谷 ゼイナーに遠征を振り返ってもらったのですが、実際にヨーロッパのクラブに行くと、何面もグラウンドがあって、立派なクラブハウスがあることを目にした。「こういう環境でサッカーをやりたい」という思いが、「より具体的に、とても強くなった」という話をしてくれました。

藤原 選手の声は、大きいですね。神代や道脇は、アカデミーの選手の前で話をしてもらうことがあります。彼ら自身も伸び悩んでいることや何に取り組んでいるか。生の声をちゃんと話してくれるのですが、それを見ている選手たちのキラキラした目は印象的です。彼らがいることで、アカデミーにいる選手のモチベーションアップにつながり、スタッフも育てた自信がつく。クラブとしての経験を得ながらも、新たに学び続けて育成を続けていきたいですね。

増本 神代選手、ゼイナー選手のような選手たちがもっともっと、この活動助成金制度での活動を通して出てきてくれたら、うれしいです。



2024年のスコットランド遠征に参加したゼイナー大耀選手(東京V)
※写真はJユースカップのもの

藤原 チーム単位と個の育成、それがハイブリットしていくのが、今後のいろいろな取り組みになるのではと思います。チーム単位のボトムアップは非常に大切なことで、その知見を広げながら、その中で突出した個を伸ばすことがハイブリッドされると、良い選手が育っていくのではないかと。活動助成金が出て、ビッグクラブだけでなく地方の経営的に厳しいクラブにも経験の機会が得られることで、それぞれのクラブが模索しながらできるのではないかと思います。今後もぜひ制度を続けていただいて、今Jクラブが60クラブある中で、それぞれ違った形で選手を育成していくことにつながっていければよいのではないのでしょうか。



トップチームで活躍する神代選手(写真左)とJリーグ選抜としてリパブルFCとのアカデミーマッチに出場するゼイナー選手(写真右)。

■活動助成金制度の新たな活用法とは

増本 もし、この活動助成金制度に用途、上限などの制約が何もなかった場合、お二人は、どういう使い方をしたいですか？また、どういうサポートがあると、選手育成がもっと加速するのか。アイデアがあれば聞かせていただきたいです。

藤原 基本的にホームグロウンに関わる場所。選手育成に関わることに、名目をつけてもらえるとうれしいですね。

寺谷 同感です。はっきりした目的がなく、予算のひとつとして計上されてしまうと、必ずしも育成のために具体的に取り組みたい活動に使えないこともあります。海外に関わることは選手育成には絶対に必要。でも、やらなくても選手育成はできる。その意味ではオプションという面もありますが、そのオプションに対してリーグから支援がいただけることが、本当にありがたい。継続してもらえるとうれしいですね。それからJリーグインターナショナルユースのような、海外のクラブをJリーグが呼んでくれるような大会が開催できるとよいですね。選手、スタッフがいろいろな経験をできるので、ぜひ実施していただきたいです。

【備考】

ロアッソ熊本 神代慶人選手は、2025シーズンにJ2優秀選手賞を受賞。2025シーズン終了後、2026年1月1日付でアイントラハト・フランクフルト(ドイツ)への完全移籍が決定した。



**2025Jリーグアカデミー活動助成金制度
各クラブ報告書**



北海道コンサドーレ札幌

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	北海道コンサドーレ札幌
■活動タイトル	U-17 タイ遠征「JSE INTERNATIONAL FOOTBALL FESTIVAL 2025 U-17」への参加
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	タイ/チェンマイ
■協力先	ブリーラム・ユナイテッドFC
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-17、U-16
■活動期間	12月9日～17日

【活動報告詳細】

■活動目的

フットボールで国内選手との対戦だけではなく、国外選手との試合経験を目的とし遠征を計画。ピッチ上での経験だけではなく、海外での生活(文化・言語・食事・生活)を経験することにより1人の社会人として、自立した選手育成も目的としております。

■活動概要

- フェスティバルに参加し、試合経験を積む
- 試合数が足りない場合は、ブリーラム・ユナイテッドFCと練習試合を組む
- タイという国の文化・歴史を知る

■実施報告・成果

【成果】

大会の結果としては優勝できたことが何よりの成果。オフシーズンの大会にはなるが、チームとして共通認識を深める良い機会となったことは間違いない。それだけではなく、全1・2年生が参加した遠征であったため、チームビルディング要素も入っており、ピッチ外でもチームとしては充実して過ごすことができた。ホテルの対応もよく、食事・生活面で困ることはほとんどなかった。

【課題】

課題は金銭面。今後も残していけるかどうかは、U-18活動費のみならず、予算全体を考慮して実施検討が必要かと思う。試合面では、ピッチの環境は悪かった(天然芝)ことが残念。

●アカデミーダイレクターの総評

新チームとしての始動を、雪のない海外という厳しい環境下で迎えられたことは、クラブにとって非常に有意義な時間となった。担当コーチからは、サッカー面にとどまらず、チームビルディングの観点においても多くの成

果があったとの報告を受けている。競技レベルという点では必ずしも高い環境とは言えない部分もあったが、新チームとして「優勝」という目標に向かい、異国の地で全員が力を合わせて戦い抜いた経験は、必ずや2026年シーズンの活動に活かされるものと考えている。

■活動写真





ヴァンラーレ八戸

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	ヴァンラーレ八戸
■活動タイトル	ヴァンラーレ八戸 FC U-13 ベトナム遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	ベトナム/ビンズン新都市
■協力先	川崎フロンターレ、ベカメックス・グループ、 ベカメックス・ホーチミンシティFC、ベカメックス東急、ブレイングループ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-13
■活動期間	12月17日～22日

【活動報告詳細】

■活動目的

U-13年代の早い段階から、海外経験をさせ、国際的な人材の育成につながる活動を行う

■活動概要

第7回「ベトナム日本国際ユースカップU-13」に参加

■実施報告・成果

【成果】

- あまり接することができない海外の文化に触れるなど、海外の選手とのコミュニケーションを通じて価値観を広げる機会となった。また、海外への渡航自体が初めての選手も多く、渡航までの手続きや現地での買い物等、今後海外への遠征が行われる際の貴重な経験となった。
- この時期の八戸は冬期間に入り、天候によっては練習場所の制限もある。ベトナムの30℃近い気温差がある環境下でフルピッチの試合を実施できたことで、冬期間のチーム強化につなげることができた。
- 日本のチームだけでなくベトナムやシンガポールのチームも攻守において非常にレベルが高く、強度の高い試合を経験することができた。また、その中でボールを握られる展開が多かったが、グループとして連動することの重要性や個々のレベルアップが不可欠であることを選手たち自身が身をもって痛感し、意識の変化が見られた。

【課題】

- 食事の面では、現地の食事を全く食べるできなかった選手もいた。海外遠征ならではの経験ではあるが、家庭での食事や国内遠征時の食事等から意識し、少しずつ克服していく必要がある。
- 事前準備の段階で、気温差があるため暑熱対策を講じて遠征に臨んだ。しかし、大会側で用意していただいたドリンク等を十分に活用できていなかった選手もいたため、指導が必要であった。この点に関しては、国内の夏期の活動も同様であるため、今後改善指導していくことが可能である。

- ボールを握られる展開が多い中で、1 試合トータル 50 分間、全体をコンパクトにし、プレスをかけ続けるフィジカルの部分の向上と、ボール状況を予測してポジショニングを取るための準備の意識は改善の余地がある。
- 相手ゴール前でフィニッシュまで行く場面もいくつか作りだせた。その 1 点が決まっていれば予選の順位も入れ替わっていた可能性もあるというようなシーンもあったが、そういった場面で決め切る技術やメンタルは必要である。

●アカデミーダイレクターの総評

海外への渡航が初めての選手が多数だったため、渡航の手続き等で大変貴重な経験となった。八戸とベトナムでは最高気温差が 30℃ 近くあったが、体調不良者も少数で済んだ。試合については、すべての面で他のチームとの差を大きく感じた。特に状況判断、自分で考える、仲間と協力して答えに辿り着くこと等、オフ・ザ・ピッチからのアプローチが不足していると感じた。選手だけでなく指導者も大変良い経験をさせていただいた。

■活動写真





ベガルタ仙台

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	ベガルタ仙台
■活動タイトル	ベガルタ仙台 U-17 イタリア遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	イタリア/リエーティ、ローマ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-17
■活動期間	8月17日～26日

【活動報告詳細】

■活動目的

●海外の強豪クラブとの試合経験と人間性の成長

海外経験を通じたサッカーの現状の自分の課題の理解と人間力の成長

■活動概要

●Scopigno CUP Rieti World Football Tournament への大会参加およびセリエ A の試合観戦

■実施報告・成果

【成果】

下記ポイントを置いて実施をしたが、選手が非常に意欲的に取り組んでくれた。ピッチサイズやボールの違いにも順応しようとし、大柄な選手に対しても敏捷性や組織力、プレーの連続性で相手を上回ることが多かった。ピッチ外についてもローマ教皇にお会いする機会にも恵まれ、良い機会となった。

●個人・チームで強くなる

- 海外強豪クラブと真剣勝負をして、自分のレベルや武器を知る
- 優勝を目指す中で、チームとしての立ち位置を知り、全員で優勝を目指す

●世界を知る

- ピッチ内外でまずやってみる。自分からアクションを起こす
- 自分の普通は普通じゃないことを知る。人としての幅を広げる。殻を破る
- 異文化を知り、受け入れる。その中で日本の良い所にも気づく

【課題】

イタリアのチームは中盤をダイヤモンド型にする 1-4-4-2 のシステムを採用するチームが多く、GK、CB、FW は 180cm 越えの選手ばかりでスケールの大きい選手が多く見られました。そして何よりも勝負に対してのこだわりが強かったのが印象的。ピッチ外では、日本語が通じない環境の中、積極的にコミュニケーションを取ろうとしている姿が多く見られた。慣れない英語や簡単なイタリア語でコミュニケーション取ることを楽しむと同時に

海外に出て活躍するためには言語の習得が必要であると感じたと思う。その他、長距離の移動、時差ぼけ、水の違いなど慣れないことが多くあったが、選手たちにとって、すべて良い経験になった。個人としてもチームとしても成長していくために、本遠征の経験を活かして日々精進していきたい。

●アカデミーダイレクターの総評

コロナによって海外経験が乏しかったメンバーも多くおり、サッカー面、社会性ともに貴重な経験となった。今後の成長に期待したい。

■活動写真





ブラウブリッツ秋田

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	ブラウブリッツ秋田
■活動タイトル	ブラウブリッツ秋田 U-15B ドイツ遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	ドイツ/フランクフルト
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-15
■活動期間	3月24日~4月1日

【活動報告詳細】

■活動目的

クラブとして初めての海外遠征となるが、Jリーグのシーズン移行も見据え、プロサッカー選手を目指す秋田の子どもたちの視野を広げることも目的としてドイツ遠征を計画している。

■活動概要

- トレーニングマッチ 3 試合
- トレーニング 3 回以上
- ブンデスリーガ観戦

■実施報告・成果

【成果】

自分たちより大きく、強い相手に対して試合の中で対応できるようになっていく様子やしっかりと上回ることができ、課題が明確になったことは貴重な経験となった。

また、ピッチ外では小さな問題はあったが、普段のような甘えはなく緊張感をもって活動できた。

【課題】

クラブとしては遠征の決定が遅れたことにより、ブンデスリーガの希望の試合が観られなかったり、フライトを含めた移動時間が長くなってしまったりしたことが課題として残った。

マッチメイクも不満はないが、もっと早ければより良いチームとも組めたとのことだったので来年以降の課題となった。

サッカー以外では、ピッチ外のところで観光気分が強かったと思うので、観光は観光で、試合に向けたピッチ外の準備のところもコントロールできれば良かったと感じる。

●アカデミーダイレクターの総評

クラブとして初めての海外遠征となったが保護者とのコミュニケーションを密に取り、大きなトラブルなく無事に遠征を終えられた。保護者の負担を減らすべく秋田から羽田空港の移動をバスにし、安全面を考慮しながら進めた。

遠征後の選手たちとコミュニケーションをとった際に最高の笑顔で「楽しかった」という言葉をもらった。あらためて実施して良かったと感じたので、来年以降も継続して取り組んでいきたい。

ぜひ助成金の継続をお願いしたい。

■活動写真





モンテディオ山形

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	モンテディオ山形
■活動タイトル	個人留学・スタッフ研修
■活動種別	海外活動(個人)
■実施場所(国/都市)	スペイン/バルセロナ/UE サンアンドレウ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-16、指導者
●対象者詳細	選手: U-16 本間海翔 指導者: 黒沼遼、庄司湧人
■活動期間	11月30日～12月11日

【活動報告詳細】

■活動目的

ターゲット選手の現地での評価、分析を通じて、個別育成およびIDPのブラッシュアップを図る。参加スタッフのスペインの育成(指導方法、プランニング法など)の視察およびレクチャーから指導者自身のスキルアップおよび将来的にモンテディオ山形のアカデミーをリードする人材を育成する。また、最先端のサッカー事情をアカデミーおよび地域の指導者に展開、浸透させ、山形からトップで活躍するタレントを輩出する仕組みをつくる。

■活動概要

●実施内容

- UE サンアンドレウ U-19 チームへの練習参加および個別トレーニングの実施
- 参加カテゴリーの選手のご家庭でのホームステイを依頼中
- 異文化交流/観光
- 指導者研修: ①プランニング法(ピリオダイゼーション、負荷管理、週間計画など)、②コーディネーションの取り組みを予定

■実施報告・成果

【成果】

●在原フットボールコーディネーター

留学選手が、事前ワーク含めて通常のチーム活動内では感じることのできない、また関わることのない人々から刺激を受け、成長のための現状、将来像などを感じる機会となったこと。また帯同コーチにとってクラブで取り組むプランニングレベルの基礎知識を補強し、異なる複数のレベルでの実践レベルのベストプラクティスに触れることができた。

●庄司コーチ

普段と違った環境下で活動できたことで選手・スタッフが様々なことにチャレンジできたことが一番の成果になった。通訳がいる環境ではあったが、ピッチ内で選手同士のやり取りをする際は言葉が通じない環境の中、身振り手振りで表現するなど苦戦することはあったが、経過していくうちにコミュニケーションがとれていくことを実感していくことができた。スタッフは現地でのサッカーのトレンドを吸収すると同時に、自チームでの取り組みと海外での取り組みに関してディスカッションができたことも大きい収穫になった。

●黒沼コーチ

- 選手がパーソナルトレーニングを行う中で自分から質問を出せるようになってきたこと
- 午前中のパーソナルと夕方のチームトレーニングがつながっているのを本人も含めて実感できたこと
- 週末にリーグ戦がないタイミングだったので練習試合が組まれて試合を行えたこと
- 安全な街だったため僅かではあるが自分 1 人で行動する機会を選手に提供できたこと
- 研修先がビッグクラブではないため、自クラブに活かせるようなリアルな話を聞いたこと

【課題】

●在原フットボールコーディネーター

渡航時期によって現地で選手の参加できる内容について長短所があるため、今回体験できた内容と成果と今回の日程では得られなかった部分のバランスを評価することで、今後クラブと選手のニーズに対してより適切な時期に実施できるよう検討を続ける。コーチ研修では、プランニング法(ピリオダイゼーション、負荷管理、週間計画など)の比重が大きく、コーディネーションの取り組みについて十分な時間と内容を確保できなかった。

●庄司コーチ

参加チームの日程が通常と違い不規則なことで、選手がトレーニングマッチに出場できたのは良かったが、スタッフとしては普段のマイクロサイクルを見てみたかった。また、バルセロナの講義はありましたが、上位クラブのトレーニング環境や取り組みも見学したかった。

●黒沼コーチ

- 通訳と選手の距離感。序盤は緊張もあって支えになっていたと思うが、徐々に慣れた中で通訳の関わる量を減らすことで自分から変わろうとする積極性を育めたのではないか。
- 実施するタイミング。週末にリーグ戦がない時だった為、練習があっさり終わる時もあった。
- 世界レベルの育成年代のトレーニングや試合を観ることができれば、その基準をクラブに還元できたのではないか(スタッフ側)
- RCD エスパニョールなどの中規模以下のクラブのテクニカルスタッフとディスカッションできれば、自クラブに活かせるようなレベルのことを聞いたのではないか。

●アカデミーダイレクターの総評

指導者研修は、昨年に引き続き2回目の実施。個人留学は、初の試みでした。トップ昇格の可能性のあるエリート選手 2 名(U-16、U-15)を予定していたが、U-15 選手が怪我のため、U-16 選手 1 人の留学となった。通訳はいたものの、指導者と向き合う時は、日本語は使えず、何とか自分の意思を伝えるという作業は 1 人ならでの経験となった。午前中は、DF に特化した個別練習が主で、試合のあり得る状況を想定してのトレーニングで、シンプルではあったが、正確な技術が求められ、且つ 1 つ 1 つのプレーの原則を教わりながらのものである。午後は、U-19A、U-19B への練習参加で 2 つ以上年上の選手の中に入り、練習の取り組み、技術、判断、強度を体感することができた。また、週中に練習試合が生まれ、後半から出場させてもらった中でトライ&エラーがあり、自分の成果と課題を振り返ることができた。

オフ・ザ・ピッチでは、ホームステイを 1 泊させてもらったこと、U-9 の大会のベンチにサポートコーチとして入らせてもらったことなど、言葉が通じない中で何とかコミュニケーションをとりながら交流が図れた。普段できない貴重な経験を積むと同時に、本人は語学の大切さを痛感した。今後、クラブとしては、本気でトップに昇格する意気込みで今後の活動に取り組むこと。また、他のユース選手にこの経験を伝え、自ら先頭に立ってトレーニングに励むことを期待する。

指導者研修は、プランニング法(ピリオダイゼーション、負荷管理、週間計画など)、コーディネーションの取り組みを中心とした研修を依頼し、ユースコーチとアスレチックコーチの 2 名を派遣した。

バルセロナとサンアンドレウの指導者から研修をしてもらい、それぞれクラブでの違った取り組みがあり、2クラブのことを比較、学べたことは成果だった。

今後、研修内容は、アカデミーで共有し、アカデミーの活動に反映させていきたい。最後に、この研修、個人留学をするにあたり、ご理解とご協力をいただきましたJリーグの皆様、本当にありがとうございました。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	モンテディオ山形
■活動タイトル	モンテディオ山形 U-14 選抜 海外遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	タイ/バンコク
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
●対象者詳細	選手 18 名 (FP16 名 GK2 名)、スタッフ 4 名 (アカデミースタッフ 3 名、強化育成部 1 名)
■活動期間	12 月 3 日～10 日

【活動報告詳細】

■活動目的

- U-14 のアジアレベルを体感し、世界を目指す同世代を知る。
- ジュニアユース村山/ジュニアユース庄内 U-14 の選抜チームを結成し、チーム内での競争を促し、本気でユースおよびトップに昇格することへの意識を持たせる。
- 日本とは違う環境に対応すること。また、異文化交流を通してグローバルな経験を積ませ、選手として自覚と、社会性を高める。

■活動概要

●遠征概要

- 渡航先:タイ
- 日程:2025 年 12 月 3 日(水)～10 日(水)
- 内容:親善試合、大会参加、企業訪問、観光など
- 人数:選手18名(FP16名GK2名)、スタッフ 4 名(アカデミースタッフ 3 名、強化育成部 1 名)

●遠征での実施内容

- 大会開催:ABeam ASIA CHALLENGE CUP in THAILAND
- 企業訪問:ABeam Consulting THAILAND 他
- 異文化体験・交流
- 企業とのビジネスマッチング (モンテディオ山形 営業部他)

■実施報告・成果

【成果】

●高山強化育成部長

今回のタイ遠征では、選手たちは厳しい環境下での適応力を示しました。滑りやすい天然芝や、山形との約 30℃ の温度差という条件下でのプレーは大きな課題でしたが、スタッフの働きかけやトレーニング量の増やし方を考慮したスケジュールにより、スムーズな暑熱順化ができました。また、ルーズボールやコンタクト時に相手が深く踏み込むプレースタイルや、ファウルにならない審判基準に最初は戸惑いがありましたが、選手たちは基準を受け入れ、ジャッジへの過剰反応を減らすなど、おかれた状況に適応していく姿が見られました。

オフ・ザ・ピッチでは、市内飲食店での自由食事を通じて、言語が通じない中で意思を伝える経験を積み、主体的なコミュニケーション力を養いました。さらに、アビーム タイ支社訪問でのコンサルティング業務を、グループワークを通じて学び、JICA 訪問での講話、ムエタイ現役チャンピオンによる基礎練習など、普段接することのない立場や文化に触れる機会を得ました。これらの体験は即時的な影響は少ないものの、長期的には選手の人としての視野を広げ、成長のきっかけとなる有益な経験となりました。

●清水監督

この数日で成功体験をたくさん積むところまでは行かなかったが、村山、庄内それぞれで取り組んできたことを尊重しつつも、ユース昇格など含め、今後に向けて共通認識を作っていく良い機会になった。日常から成長マインドを育み、サッカーの探求心を掻き立てておくことが、このような場をより効果的なものにすると感じました。今回のタイ遠征では、大きな体調不良などなく無事に遠征ができたことをうれしく思います。選手、スタッフともにピッチ内外でとても貴重な経験がたくさんできました。これをこの期間だけのものにするのではなく、これから活かしてこそ本当の価値になっていくと思います。最後に、たくさんの方々にご協力をいただき海外遠征ができたことに、心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

【課題】

●高山強化育成部長

サッカーだけでなく、観光を通じてタイの歴史や文化に触れる機会を設けたり、アビーム タイ支社や JAICA の訪問などを通じた研修の機会を設けたりしましたが、より密度の濃いものにするためには事前学習を通じて、タイの歴史的、文化的な背景や訪問する企業、JAICA という組織はどのような取り組みをしている組織(会社)なのか、などの予備知識を学ぶしておくことによって、当日の研修の理解度が深められたようにも思います。

●清水監督

サッカーの面では、対戦相手の質をもう少し、上げたい。オフ・ザ・ピッチでは、観光面で寺院の見学は回数や時間など考慮の余地があった。もっと現地の人(同世代)ともっと触れ合えるような活動があるとさらに良かった。

●アカデミーダイレクターの総評

●宮武太

自クラブで活躍する選手の育成という観点で3つの目的を達成するためにタイ遠征を行った。

- ① 「U-14のアジアレベルを体感し、世界を目指す同世代を知る」
- ② 「JY 村山/JY 庄内 U-14 の選抜チームを結成し、チーム内での競争を促し、本気でユースおよびトップに昇格することへの意識を持たせる」
- ③ 「日本とは違う環境に対応すること。また、異文化交流を通してグローバルな経験を積ませ、選手として自覚と、社会性を高める」

① 衝撃的にすごく強くて、カルチャーショックを受けるとかのレベル差はなく、対戦結果(1勝1分1敗)通りぐらい試合内容であり、決定機、守備の精度の違いで、ちょっとエラーがあれば負けというような感じのレベルで拮抗した試合ができた。タイの選手は、本当に中学二年生かと思うような大きい選手がいてフィジカル面で強かったが1つ1つのプレーの精度が高ければ勝利できたと感じる試合でもあった。タイの同世代の選手を知れたことは良かったが、自分たちのスピード、判断・技術の質を更に向上していかなければならないと改めて感じる事ができたことが成果である。

② 短期間の村山・庄内 U-14 選抜での活動ではあったが、1つのチームとして協力しながら戦うことができた。また、お互いを知ることで、現時点での自分の立ち位置を把握できたこと。ユース昇格を目標とした時に、今後の取り組むべきことが明確になった選手がいることが成果である。来年の7月頃にはユース昇格選手が決定してくることを考えれば、この遠征メンバーが、どんな取り組みをして、変わっていくかに関わりながら期待したい。

③ グローバルな経験を積ませ、社会性を高めることとして、観光、企業訪問、異文化体験を行った。これまでのタイ遠征との相違は、歴史の中で大事にされてきたタイで特別な存在である象にふれることができたこと。JICA 訪問である。JICA のアジア、タイにおける取り組みは、日本の貢献度を知ることができたことである。メインスポンサーであるアビームコンサルティング タイ支社訪問では、グループディスカッションの講義をしていただき学びの機会でもあった。日本人があらゆる分野において海外で活躍されていることを身近に感じられたと機会でもある。

将来、このタイ遠征のメンバーの中からモンテディオ山形で活躍する選手を輩出したい。また、色々な職業に興味を持ち、自分の将来を豊かなものにできるようにサッカー以外の多方面にも目を向けられるような人材にもなってほしいと考える。

最後に、この遠征をするにあたり、ご理解とご協力をいただきましたJリーグの皆様、本当にありがとうございました。

活動写真





福島ユナイテッドFC

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	福島ユナイテッドFC
■活動タイトル	福島ユナイテッドFC U-13 フランス遠征
■活動種別	①海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	フランス/トゥールーズ
■協力先	トゥールーズFC
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-13
■活動期間	8月22日～8月29日

【活動報告詳細】

■活動目的

●世界基準のサッカーを体感

欧州の強豪クラブのアカデミー組織との交流戦やトレーニングを通じて、本場のスピード、フィジカル、戦術を肌で感じてもらうことで、世界で通用する選手になるための「基準」を学び、今後の練習へのモチベーションが飛躍的に向上することを目的とする。

●国際感覚と自立心を育む

親元を離れ、慣れない環境で生活することは、子どもたちの生きる力を大きく成長させる。異文化に触れ、コミュニケーションを図る中で、グローバルな視野が生まれ、自主性や協調性、困難を乗り越える力を養う。そしてスポーツを通じて現地で海外の友だちを作ることは将来の大きな資産にもなる。

●一生涯の記憶と仲間との絆

憧れの地でプロの練習を観戦したり、世界遺産を訪れたりする経験は、子どもたちにとって忘れられない感動、刺激となる。この特別な経験を仲間と共有することで、友情はより一層深まり、将来にわたる強い絆が生まれることを期待する。

■活動概要

●現地プロクラブ育成組織との交流戦

世界トップレベルのサッカーを肌で感じ、自身の現在地を知る貴重な機会とする。

●現地アカデミーでの合同トレーニング参加

欧州式のトレーニングメソッドを体験し、専門的な指導を受けることで指導者も含めて成長を図る。

●プロサッカー練習観戦

本場の熱気を体感し、プロ選手のプレーから多くの刺激を受ける。

●文化交流・観光

異国の建造物や、本場の文化体験を通じて、国際的な視野を広げる。

■実施報告・成果

【成果】

●世界レベルのサッカー体験

初の海外チームとの試合で、フランス一部リーグのアカデミーと対戦。

日本では体験できない寄せの速さや身体能力を経験して子どもたちからも「日本では取られない場面でボールを失った。もっとボールを受ける前の判断を早くしないといけないと気付いた」等の声が聞かれた。

●異文化交流

フランスの子どもたちと混成チームを作って試合を実施。

●トップチームの環境見学

トップチームのトレーニングと公式戦を観戦。スタジアムやアカデミー視察の見学。世界トップクラスのサッカークラブが持つ環境を学んだ。

【課題】

●期間

一週間の期間設定だったが、移動に3日が必要で、実質の滞在は4日程。2試合+2トレーニングだったが、せっかく欧州まで行くのだから、もう少し滞在期間を延ばして3試合は実施したかった。

●サッカー以外の文化体験

期間が短かったため、丸々一日観光に割く日などを設けられなかった。

●アカデミーダイレクターの総評

「百利あって一害なし」

当初、クラブに海外遠征のノウハウがない中、不安も多かったが、思い切って申請→実施して良かった。事後保護者ミーティングにて「ありがとうと感謝の言葉をよく言うようになった」「自分でサッカー道具を整理したり物事を完結させたりするようになった」「また海外に行きたいと言っている」など良い意味で帰国後に変わったという発言や感想が数々あった。次年度も海外遠征を実施したい。

■活動写真





いわきFC

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	いわきFC
■活動タイトル	TEIJIN U-17 New Generation Cup 2025 in Thailand
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	タイ/バンコク
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-17
■活動期間	10月29日~11月3日

【活動報告詳細】

■活動目的

活動の目的は、日本とは異なる環境の中で、タイおよびアジア各国のチームとの試合や交流を行い、選手がサッカー面・人間面の双方で成長することにあります。異文化に触れる経験を通じて視野を広げ、将来的に世界で活躍できる人材へとつながってほしいと考えております。

■活動概要

2025年10月29日から11月3日までの6日間、タイのバンコクで行われます「TEIJIN U-17 New Generation Cup 2025」に参加。この大会はU-17世代を対象に、タイ、日本、アセアン全8チームが参加した国際大会です。リーグ戦方式と順位決定戦により執り行われます。また、サッカー以外の部分ではタイの歴史や文化を学ぶため、寺院などを訪れ、異文化を実際に五感で感じてほしいと考えております。

■実施報告・成果

【成果】

いわきFCは育成において【THE SMART ATHLETE】というフィロソフィを掲げ、世界で活躍できる人材の育成を目指しております。今回のタイ遠征では、日本とは異なるタフな環境での試合や、現地特有の文化に触れる機会が多くありました。初日は慣れない環境に戸惑う選手もいましたが、次第にその状況を前向きに捉え、積極的に楽しむ姿が見られました。異国の地でも明るくタフに過ごす選手たちの姿から、精神的な成長やたくましさを感じました。オン・ザ・ピッチだけでなくオフ・ザ・ピッチの面でも、私たちが掲げるフィロソフィを体現しながら成長できた、非常に有意義な遠征となりました。

【課題】

課題としましては、今回の遠征に参加した選手総人数が14人と、少数精鋭の人数でタイ遠征に臨んでいたため、試合数などを考えると、次回海外遠征に行く際は、もう少し人数を増やして海外遠征に臨みたいと考えました。

●アカデミーダイレクターの総評

今回、ユース U-17 は TEIJIN U-17 New Generation Cup 2025 に参加し、タイ遠征を実施しました。いわき FC アカデミーが育成の中心に据える【THE SMART ATHLETE】世界で通用する人材の育成という観点からも、非常に意義のある遠征となりました。タイやベトナムの強豪チームなど、日本とは異なるスタイルを持つ相手と真剣勝負を行い、フィジカル・技術ともに高いアジアのレベルを肌で感じる貴重な経験ができました。また、選手たちは異文化にも積極的に触れ、タイの三大寺院であるワットポーやワットアルンで巨大な涅槃像を目にし、歴史と文化に大きな刺激を受けていました。異国の地で多くの事に挑戦する中で、日本では見られなかった選手の一面や成長を見ることができ、本遠征の大きな意義を改めて実感することができました。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	いわきFC
■活動タイトル	いわきFC U-15 タイ遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	タイ/バンコク
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-15
■活動期間	12月5日～12月9日

【活動報告詳細】

■活動目的

異国の地(タイ)で大会に参加し、様々なアジア圏内でのチームと対戦し普段と異なる環境や相手との試合を通して成長する。また現地で様々な文化や物に触れ人としても成長できるようにしたい。

■活動概要

2025年12月5日から12月9日までの5日間、タイで行われる Asia challenge Cup に参加。この大会にはタイ国内のブリーラム・ユナイテッド、STB アカデミー、ネパール代表などのチームが参加し、試合を行う。

■実施報告・成果

【成果】

今回の海外遠征では、競技面や生活面の両面において多くの成果を得ることができた。競技面では、タイや韓国など異なる国のチームと対戦することで、フィジカルの強さ、球際の激しさ、プレースピードといった日本国内では日常的に経験しにくい要素を体感することができた。その中で粘り強く守備を行い、試合終盤まで集中力を切らさずに戦う姿勢が随所に見られ、勝利や引き分けといった結果につながった。また、試合を重ねるごとに選手同士のコミュニケーションが活発になり、声かけや、カバーリングなどチームとしての連携面が向上したことも大きな成果である。生活面では、海外での移動や食事、言語の違いなど、日本とは異なる環境で行動することで、自立心や適応力が養われた。トラブルも含めて一つ一つを経験として受け止め、選手たちの成長を強く感じさせる遠征となった。

【課題】

今回の遠征ではいくつかの課題も明確になった。競技面では、相手の強度が高まった際にボールを簡単に失ってしまう場面や、プレッシャー下での判断スピードに差が出る場面が見受けられた。特にフィジカルコンタクトが激しい試合では、局面を打開する個人技や判断力の向上が今後の課題として挙げられる。試合全体を通して安定したパフォーマンスを発揮するためには、メンタル面の強化や試合運びの理解を深める必要がある。生活面では、体調管理や睡眠、食事への意識に個人差があり、コンディションに影響が出る場面もあった。海外という環境を踏まえた自己管理能力をさらに高めることが、今後の遠征や大会に向けた重要な課題である。

●アカデミーダイレクターの総評

本アカデミー海外遠征は、国際基準を肌で感じる貴重な機会となりました。異なる文化や環境の中で、フィジカルやスピードに優れた海外チームと対戦し、選手たちは高い強度の中でも粘り強く戦う姿勢を示しました。試合を重ねるごとに対応力や判断力が向上し、チームとしての成長が感じられる内容でした。また、ピッチ外においても、集団行動や自己管理の重要性を学び、アカデミーとして大切にしている「自立」「協調」の姿勢が随所に見られました。海外という非日常の環境の中で、仲間と支え合いながら行動する経験は、今後の競技人生において大きな財産となります。一方で、世界基準と比較した際のフィジカル、プレースピード、判断の質には明確な課題も確認できました。今回の遠征で得た気づきを日常のトレーニングへ落とし込み、継続的な成長につなげていくことが重要です。本遠征を通じて得た経験を糧に、選手たちがさらなる高みを目指して挑戦を続けることを期待しています。

■活動写真





鹿島アントラーズ

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	鹿島アントラーズ
■活動タイトル	第 25 回日伯友好カップ参加
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	ブラジル/リオデジャネイロ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-15
■活動期間	8月31日～9月5日

【活動報告詳細】

■活動目的

毎年ジュニアユースは参加しており、このレベルの高い国際大会を通じて厳しい試合を経験させ常に世界に向けた考えと感性を選手に身に付けさせたい。

■活動概要

●第 25 回日伯友好カップ

U-15 選手を 3 チームに分け、日伯友好カップに参加。

4 チームずつのグループステージ(リーグ戦)を行い、各グループ上位 2 チームが準々決勝に進出。合計 8 チームによるノックアウトステージ(トーナメント戦)を実施。

●参加チーム

(グループ A)CR フラメンゴ、クルゼイロ EC、クイアバ EC、鹿島アントラーズノルテジュニアユース

(グループ B)CR ヴァスコ・ダ・ガマ、グレミオ FBPA、EC ヴィトーリア、鹿島アントラーズつくばジュニアユース

(グループ C)フルミネンセ FC、アトレティコ・ミネイロ、バンゲー、鹿島アントラーズジュニアユース

(グループ D)ボタフォゴ FR、サントス FC、コリチーバ FC、U-15Jリーグ選抜

■実施報告・成果

【成果】

●ブラジルサッカーの質と特徴を感じられたこと

一日一日が勝負という認識で「サッカーに対する本気度」と「技術・精神面の高さ」に強い印象を受けた。ブラジルの選手たちは、ゴール前での駆け引きや一瞬の判断が極めて鋭く、守備でもシュートブロックや身体を張った対応が多く気迫を感じた。

●異文化に触れる体験ができたこと

食事と生活環境も日本とは違い、ホテルでの食事では肉料理やポテト、現地の果物などが多く、日常的に食べる味や調理法も大きく異なっていた。トイレの使用方法にも文化的な違いがあり、水回りの設備や使い方が日本と違った。

●ブラジルサッカー観戦(2 試合)できたこと

1 試合目はマラカナンスタジアムでセリエ A(ブラジル国内リーグ)フラメンゴ vs グレミオを観戦。国内屈指の人気クラブ同士による熱戦であり、サポーターの熱気と選手たちの気迫を感じることができた。2 試合目もマラカナンスタジアムで FIFA ワールドカップ 南米予選ブラジル代表 vs チリ代表を観戦。世界最高峰の舞台である W 杯予選。代表戦ならではの緊張感とスタジアム全体の一体感が圧巻だった。世界的なサッカーの聖地として知られるマラカナンスタジアムで、実際に試合を観戦できたことは、非常に幸せで貴重な経験となった。

【課題】

●メンタリティと実行力

グラウンドコンディション不良は、プレーに大きな影響を与えた。良いコンディションでは高い技術と連係で優位に立ったものの、ピッチコンディション次第では足を取られて転倒したり、浮いたボールの処理やドリブルでミスをしたりすることが多発するなど、本来のパフォーマンスを発揮できなかった。対照的に、ブラジル人選手はどのようなピッチ状況でも高い適応力を見せ、特にゴール前での迫力と集中力は圧倒的で、一瞬の隙やルーズボールを即座に得点につなげる決定力は、大きな差だった。グラウンドコンディションを言い訳にせず、「それでもやりきる」「決めきる」という強いメンタリティと実行力は、今後の重要な課題である。

●フィジカルとアスリート能力

フィジカル面でも明らかな差があり、ブラジル人選手は、体格・筋肉量・そしてアスリートとしての基礎能力(走力、ジャンプ力、スプリントの質など)において優れていた。この差は、1対1の競り合いで当たり負けしたり、ボールをキープできなかったりするシーンに顕著に現れた。

●競争環境から生まれるハングリー精神

彼らが常に厳しい競争環境に身を置いていることも大きな違いだった。家族を背負い、プロとして生き抜くという強い意志は、日本とは異なる生活環境から生まれており、このハングリー精神も我々が学ぶべき点である。

●アカデミーダイレクターの総評

●環境への適応

移動、時差、食事、ピッチ、ボール、レフェリング等、どんな環境にも適応してパフォーマンスを発揮するという部分では個人差が大きいと感じた。

●勝負を分けるポイント

良いプレー、良い試合をすることができて『ゴールを決める』、『ゴールを守る』、『ボールを奪う』、『ボールを奪われない』という部分の個人の質が勝負を分けた。

●サッカーに懸ける思い

ブラジルの選手たちは『自分や家族の人生を懸けて』プレーをしている。日本の選手たちはサッカーを楽しむこと

や技術レベルを高めることはできている。一方で環境的にも恵まれ、プレー環境が保証されていることでサッカーに対する思いがまだまだ薄いように感じた。

＜今後に向けての提言＞

遠征などを活用し、様々な経験を下の年代から積み重ねて適応力を高めたい。ゴールを決める、ゴールを守る、ボールを奪う、ボールを奪われないなど細かい部分にこだわっていくことが重要。サッカーは楽しむだけのものではなく、人生を懸けて戦う場所でもある。その覚悟を持って日々のトレーニングに取り組んでいけば、世界とも戦える選手になれるはずである

■活動写真 ©KASHIMA ANTLERS





水戸ホーリーホック

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	水戸ホーリーホック
■活動タイトル	水戸ホーリーホックジュニアユース(U-14)ドイツ遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	ドイツ/ハノーファー
■協力先	ハノーファー96
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	3月22日~4月1日

【活動報告詳細】

■活動目的

- 国際経験を通じ、選手・チームの強化を図る。
- 不慣れな環境に対応する適応力を高め、強い精神力を養う。
- 言葉の違い、文化の違いを超えて友情を交換し、幅広い人間性を育む。

■活動概要

●基本情報

- 遠征期間:2025年3月22日~4月1日(11日間)
- 遠征先:ドイツ(ハノーファー)
- 参加メンバー:U-14選手:19名、スタッフ:3名

●活動内容

- トレーニング、ハノーファー96 合同トレーニング、トレーニングマッチ
- 1dayトーナメント
- スタジアムツアー (ハインツ・フォン・ハイデン・アリーナ)
- ブンデスリーガ観戦 (ハノーファー96 対 1.FC マクデブルク)
- 松田隼風選手交流会(ハノーファー96 U-23 所属)
- 練習見学(TOP チーム・U-23 チーム)
- 観光・交流会

■実施報告・成果

【成果】

今回のドイツ・ハノーファー遠征は、選手・指導者の双方にとって大きな学びの機会となりました。異なる文化や環境の中でサッカーに取り組むことで、適応力や主体性が自然と育まれました。特に、ハノーファー96との継続的な交流を通して、ドイツに根付く「サッカーが人生の一部である」という価値観に触れ、競技を超えた人

間的な成長を実感することができました。また、現地のトレーニングや指導法から、日本との違いを知り、それぞれの良さや課題にも気づけたことは、今後の育成に活かせる貴重な経験となりました。

【課題】

遠征を通じて得た大きな学びの一つが、「個の育成」に対する考え方の違いでした。ドイツでは、選手一人ひとりが自分の役割と責任を理解し、主体的に取り組む姿勢が育まれており、日本との育成観の差を強く感じました。ただ、こうした考え方をそのまま取り入れるのは難しく、日本の文化や環境に合った形でどう落とし込むかが大きな課題です。選手が自ら考え、行動する力を伸ばすには、日々のトレーニングで指導者自身も変わっていく必要があります。遠征で得た気づきを継続的に活かしていくためにも、指導者同士が学びを共有し、対話を深めることが大切です。また、日本では目先の勝敗に注目が集まりやすい状況があるため、選手の長期的な成長を見据えた環境づくりを進めていくことが、今後の大きなテーマだと感じています。

●アカデミーダイレクターの総評

この度のドイツ・ハノーファー遠征は、ハノーファー96との業務提携により実現し、選手・指導者ともに大きな学びを得る貴重な機会となりました。異文化環境への適応、国際交流による人間的成長に加え、ドイツの育成システムに触れることで、日本との違いを明確に認識できました。特に「個の責任」に対するアプローチや長期的視点に基づく育成方針には強い刺激を受けました。この経験は、今後の指導やクラブの取り組みにおいて大いに役立つものと考えております。本遠征を通じて得た経験を、日常のトレーニングや育成環境の改善に活かし、クラブとしてのさらなる成長につなげてまいります。このような貴重な機会を頂けたことに、心より感謝申し上げます。

■活動写真





栃木シティ

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	栃木シティ
■活動タイトル	CITY WORLD FESTIVAL
■活動種別	国際大会主催
■実施場所(国/都市)	栃木県
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-11 以下
■活動期間	12月20日～21日

【活動報告詳細】

■活動目的

栃木県内のU-11年代の選手に、国際大会を経験する機会を提供することで、県内サッカーの活性化と選手育成に貢献する。また、栃木シティジュニアユースを目指すスクール生に国際大会を経験させることで、国際的な視野を育成し、ジュニアユース年代での活動へとつなげたい。

■活動概要

●CITY WORLD FESTIVAL 開催概要

- 開催時期:2025年12月20(土)・21(日)/2日間
- 開催場所:CFS(栃木市)
- 海外参加チーム:韓国
- 試合形式:予選リーグと決勝トーナメントで構成
- 対象カテゴリー:U-11年代(2014年1月1日生まれ以降)

■実施報告・成果

【成果】

第1回大会として、運営・競技・広報の各側面において、次年度以降の基盤となる多大な成果を得ることができました。まず運営面では、徹底した進行管理により、最大5分以内の遅延という極めて円滑な試合運営を実現いたしました。大きな事故や混乱、参加チームからの不満もなく完遂できたことは、大会の信頼性を高める大きな実績となりました。

広報面では、初のYouTube配信により遠方のファンの方々へ観戦機会を提供した他、SNSを通じて現場の熱量を広く発信いたしました。その結果、未出場チームからのフォローも相次いでおり、次年度の参加希望チーム増加につながる確かな手応えを得ることができています。

競技および強化面では、栃木シティサッカースクールの所属選手が、地元にいながら国際試合という真剣勝負を経験できたことが最大の収穫です。この貴重な国際体験は、選手の技術向上のみならず、世界を意識する精神的な成長を促しました。さらに、2年後のジュニアユースを見据え、スクールからジュニアユースへの昇格候補となる有望選手の目星をつけることができたことも非常に重要です。本大会は、スクール生にとっての明確な目標となると同時に、クラブの一貫した育成体制を構築・強化する上で、実利的な成果を収める場となりました。

【課題】

まず競技面におきまして、スコア差からチーム間の実力乖離が顕著であった点が挙げられます。より拮抗した真剣勝負を増やすため、マッチメイクの再検討が不可欠です。また、一部のチームで試合間の待機時間が長くなってしまったため、タイムテーブル策定時の配慮とともに、当日の結果集約や案内を迅速に行う専任担当者の配置が必要であると考えております。

次に運営スケジュールにおいては、準備の動き出しが遅れたことで、設営や備品調達の逼迫を招きました。今後は余裕を持った工程管理を行い、事前リハーサルを徹底することで、各チームへの案内業務の精度を高めていく必要があります。特に、海外チームへのおもてなしとして、栃木名物のいちご狩り、佐野厄除け大師、アウトレット訪問といった観光情報の事前案内や、文化体験プランを早期に提供できれば、国際大会としての付加価値を大きく高める魅力的な施策となります。加えて、会場内でも海外グルメの提供や体験型ブースの設置により、国際交流をより体感できる場を創出したいと考えております。広報面でも SNS 運用を計画的に行い、大会の価値を可視化することで、現在は助成金に依存している収益構造の改善を図り、持続可能な大会運営を目指してまいります。

●アカデミーダイレクターの総評

記念すべき第1回大会を無事に終えることができました。まずは、開催に向けて多大なるご支援をいただいたスポンサーの皆様、そして関係各所の皆様に心より感謝申し上げます。

私たちが本大会を開催する最大の目的は、海外チームを招聘し、ハイレベルな真剣勝負の場を作り出すことで、栃木県内のサッカーレベル向上に貢献することにあります。世界の多様なスタイルや強度を肌で感じた経験は、次代を担う選手たちにとって大きな刺激となり、世界を意識する貴重な一歩となりました。今大会で得た知見を糧に、栃木県内から世界へ羽ばたくタレントの育成をさらに加速させていきたいと考えています。また、栃木シティがホームゲームを行うこの素晴らしいスタジアムや、クラブの選手・スタッフの経験は、地域の大切な財産です。これらの資産を地域の方々に広く活用していただき、スポーツを通じて社会に貢献していくことは、私たちの重要な使命です。初回ゆえの課題も多く見つけましたが、それらはすべて伸び代であると捉えています。本大会を栃木の誇りとなるような国際大会へと成長させ、サッカーを通じた地域活性化と文化交流の拠点を目指して、これからも全力で取り組んでまいります。

■活動写真





ザスパ群馬

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	ザスパ群馬
■活動タイトル	ザスパ群馬 U-11 INTERNATIONAL CUP 2025
■活動種別	国際大会主催
■実施場所(国/都市)	群馬県
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-11
■活動期間	12月19日～22日

【活動報告詳細】

■活動目的

●大会の目的

- 国内だけでなく、海外のU-11世代の少年たちを招き、試合や人的交流を通じて、幅広い人格形成のための機会創出
- 技を通じて、選手個人とチーム力の向上を目指す
- 大会を通して、タイのクラブとの交流を図るだけでなく、タイの特産物を提供することで、タイ産の魅力を広く伝え、生産国が抱える課題解決の支援を目指す
- 2024年に第1回(ベトナムのチーム)を開催した。東南アジアを中心に招待していき、継続的に開催していく

■活動概要

●大会名:ザスパ群馬 U-11 INTERNATIONAL CUP

- ・開催日程:2025年12月20日(土)～21日(日)
- ・開催場所:GCC ザスパーク
- ・カテゴリー:U-11(2014年1月1日生まれ以降)
- ・試合方式:予選、順位決定とも20分ハーフ

■実施報告・成果

【成果】

1.競技・育成面の成果

- 国際経験による「基準」の変化
国内チームとタイの名門チョンブリFC が対戦することで、同年代の海外選手の体格、プレースタイル、メンタリティを肌で感じ、選手たちの競技レベルに対する意識が向上した。
- 指導者の知見共有
海外クラブ(タイ)と国内各地域のクラブの指導者が一堂に会することで、トレーニングメソッドや育成方針に関する情報交換が行われ、地域の指導レベルの底上げにつながった。

2.人格形成・教育面の成果

- 異文化理解の深化
秋間梅林観光協会協力のワークショップやレセプションを通じて、言語の壁を超えたコミュニケーションを経験します。「サッカーという共通言語」と「文化体験」をセットにすることで、子供たちの国際感覚と多様性への受容性が育まれた。
- 地域愛と誇りの醸成

群馬の地で国際大会が開催され、Jリーグクラブや地元企業に支援して頂いている様子を子供たちが見ることで、地元・群馬への愛着や誇りが強まる。

【課題】

1. 運営・持続性の確保

海外チームの招待に伴う高額なコストを賄い続けるための、「自立的な収益モデル」の構築が必要。また、多言語対応や文化的な配慮(食事・宗教等)ができる専門人材の育成も必須。

2. 交流と競技レベルの質的向上

大会期間中だけの「一過性の交流」に終わらせず、デジタル活用等による継続的な関係性をどう築くかが重要。また、国内外のチーム間で適切な実力均衡を保ち、競技的なメリットを維持し続ける調整力も求められる。

3. 社会貢献活動の具体化と発信

「タイの課題解決支援」という目的を、単なるスローガンに終わらせないための「成果の数値化(可視化)」が課題。また、この意義をサッカー関係者以外(地域住民や一般消費者)にも広く浸透させるための、戦略的な広報活動が必要。

●アカデミーダイレクターの総評

第2回目を迎えた本大会は、ザスパ群馬アカデミーが掲げる「世界を視野に入れた人間形成」を実行する国際交流の場となった。

1. 競技・育成面の総括: 世界基準への「体感」と「覚醒」

タイの名門チョンブリFCの参戦は、日本の子供たちに強烈なインパクトを与えた。スピード、球際の強度、そして何より「勝利への執着心」という、言葉だけでは伝えきれない世界基準のメンタリティを肌で感じたことは、技術向上以上の収穫。

2. 人格形成・教育面の総括: サッカーを越えた「共感」の力

ピッチを一步出れば、レセプション等を通じて、言葉の通じない相手と必死にコミュニケーションを図る子供たちの姿が見られた。「サッカーという共通言語」があれば、文化や国籍は壁にならない。この実体験こそが、多様性を受け入れる真の国際感覚を養う。子供たちが「群馬から世界へ挑む」という誇りを持つ、何よりの教育的価値となった。

3. 未来への展望

本大会は、単なるトーナメントではない。アジア各国で抱える課題解決への支援や、食文化の交流といった、「社会とつながるスポーツの姿」を子供たちに背中ですすプロジェクトでもある。ベトナム、そして今回のタイ。この継続的な歩みは、ザスパ群馬がアジアと日本をつなぐハブとなり、次世代のリーダーを育成していく決意の表れである。今後も本大会を、子供たちが夢を描き、国際社会の一員として成長するための「最高のプラットフォーム」として発展させていく。

■活動写真





浦和レッズ

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	浦和レッズ
■活動タイトル	U-16 アルアイン国際ユーストーナメント
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	UAE/アルアイン
■協力先	アルアイン FC
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-16
■活動期間	4月9日～22日

【活動報告詳細】

■活動目的

対象となる U-16 年代の選手に加え、オーバーエイジ枠の選手、将来性のある一つ下の年代の選手で大会に臨み、国際大会を経験させる。過密日程での疲労回復、語学力などサッカーやそれ以外、各自の現在地を把握させ、個々の成長を促進し、トップチームへつなげていくための遠征にする。

■活動概要

- 渡航期間 2025年4月9日(水)(出国)、2025年4月22日(火)(帰国)
- 渡航人数 スタッフ6名、選手22名 計28名(サポートスタッフ2名含む)

●U-16 アルアイン国際ユーストーナメント 大会概要

- 大会名 U-16 アルアイン国際ユース大会 2025
- 開催地 UAE (アラブ首長国連邦)・アルアイン
- 大会期間 4月10日(木)開幕 ~ 4月21日(月)閉幕
- 参加年代 2009年生れ+オーバーエイジとして2008年生れ4名(1試合3名まで同時出場可)
- 大会形式 6チーム総当たり戦
- 試合時間 40分×2本(計80分)
- 参加予定 アルアイン(UAE)、グレミオ(ブラジル)、エバートン(イングランド)、パルチザン(セルビア)、パフォス(キプロス)、浦和レッズ(日本)

■実施報告・成果

【成果】

約2週間という長期間を海外で生活する中で、チーム内の選手同士コミュニケーションをとれる機会も多く、お互いを深く知ることができた。また海外選手とのピリヤードやレストランなどでの交流においてお互いの言語を含め様々な違いの中で、困難や刺激を受けることができた。また、日本では経験のできない試合環境やレギュレーション、開始時刻が遅いナイトゲームなど、色々な状況や環境下でパフォーマンスを発揮するための準備を考え、ホテル内での時間の使い方、スケジュールに合わせてコンディションを整えるための工夫などパフォーマンスの向上、維持のために必要なことを自ら考え、トライする機会となった。そのひとつとして食事面では体重計を持参し、試合後の体重の減りに驚きながらも、その分食事で回復させるために何をどのように摂取すべきかなど考えて、量も種類も多く食べ慣れないものもチャレンジする姿が見られたくましさを感じられた。

試合においては対戦する異国の同年代の選手とのレベル差や身体的特徴の差を体感し、試合の中でどう対応すべきなのか、試行錯誤トライすることができた。自らチャレンジした事への成功体験も積むことができ、大会も3位で終わることができ自信となりました。

【課題】

ピッチ外においては言語の違いもあり、積極的にコミュニケーションを取れる選手が少なかったと感じる。個人差はあるものの食事面で好き嫌いもあり、偏った食事をしたり量を食べられない選手もいたり、苦勞する姿が見られた。

ピッチ内においては、身体的な特徴や勝負にこだわる姿勢など、結果に対する貪欲さもまだまだ足りないと感じた。

こうした経験を経て、世界基準でしか感じられない、得られないものを定期的に経験できる場の機会を作っていくことも必要と感じた。

●アカデミーダイレクターの総評

今回の海外遠征では、飛行機初体験の選手がいるなか、UAEという未知なる国で南米、西アジア、アフリカ系、欧州といった様々な人種の選手たちと真剣勝負の試合ができた。また、他のチームと同じホテルで生活することによる異文化交流や中東の食事や生活文化。世界遺産や砂漠・近代建築物を見て触れて感じられたことは、選手たちにとって大きな財産となった。大会のレベルも非常に素晴らしいもので、選手の成長を感じられるものとなった。来年も我々が招待されるのであれば、ぜひ参加したいと思った。ただし、スケジュール的に所属クラブでの公式戦を辞退することになってしまったことや、高校の入学式の日に出国というスケジュールで、早々に2週間学校を休ませてしまったことで、授業の遅れ、学力低下につながり、帰国後に練習を休む選手が出てしまった。今後、時期や学校の出席日数等を、海外遠征を企画する時の参考にしたい。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	浦和レッズ
■活動タイトル	U-15 ブラジル遠征
■活動種別	海外遠征
■実施場所(国/都市)	ブラジル/サンパウロ州イタチーバ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-15
■活動期間	7月18日～8月4日

【活動報告詳細】

■活動目的

個人の成長と経験、未知の体験・将来、世界で戦う基準設定・多感な時期において人との交流&対戦をし、現状の把握・人間形成&社会性の向上・日頃の当たり前を感じ、感謝の気持ちを養う・南米のサッカーや文化を知る

■活動概要

●ブラジル/サンパウロ州イタチーバ

- 期間:7月18日～8月4日 U15選手18名・スタッフ3名参加
- 試合:8試合(パルメイラス・グアラニ・サンパウロ・コリンチャンス・サントス等)
- 勉強:毎日1.5時間
- 面談:振り返り&今後の取り組み
- 事前学習:ブラジルについてグループワーク

■実施報告・成果

【成果】

- ピッチ内においては、攻撃面で、ブラジルのマンツーマンDFに対して、スムーズなビルドアップからの得点や、日を追うごとにゆったり感、リラックス感が出てきて、速攻スタイルのチームの中で、状況に応じてボール保持する時間を作ることができた。また、個人技が高い攻撃に対して、局面の堅守や自陣ゴール前の堅守から攻撃に移行するプレーを増やせた。守備面では、日を追うごとにボール奪取の回数を増やせた事、その中で、粘り対応、近い間合いでの対応、ボール際の本気度は、帰国後のU15JCY大会でも随所に発揮することができた。全体的には、チームシステム、チームプレーに必要な個人戦術において強烈な刺激が入り良かった。
- ピッチ外においては、日常の豊かさに気付き、改めて個人の目標に対しての強い思いを確認していた。現地で、グアラニ所属の高橋選手との出会いや話で、サッカーに取り組む姿勢や、ブラジルと日本の環境、競争の違いに驚きがあり、今後の意識を変えるべく経験になりました。また、選手たちはブラジル人の陽気さ、優しさなども感じ、ブラジル文化にも触れ、食事面では、何不自由なく摂食していた。

【課題】

- ピッチ内においては、攻撃面で、ブラジル人の繊細なボールタッチに全員が驚いていた。日本では抜かれたことがないフェイントがあったと言う選手もいた。ゴールへの優先順位やシュートテクニックは勉強になるプレーばかりだった。ボール操作のレベルの違いが明らかだった。守備面では、自陣ゴール前のマークやクリア対応、気迫や身体を張るプレーの違いが大きかった。守備が全体的に人に出る守備対応が主だったので、帰国後は、グループ戦術、チーム戦術を思い出させる作業が必要だと感じました。全体的には、プレー課題が多く抽出できたことが、計画成果だと感じています。
- ピッチ外では 8 試合を短期間で行ったことで、終盤に疲労から体調不良者が数名出てしまったことです。また、観光や社会勉強の時間をとることもできなかった。収穫の多かったこの南米遠征を継続させていくことが、今後のクラブとしての大きな課題だと考えます。

●アカデミーダイレクターの総評

ブラジル遠征ということもあり、ここまで長い移動は経験がない、また時差も大きい中での時差ボケなど初めて経験することが多く、まずはそれだけでも経験できたことは大きかった。長い期間の中でのコンディションの維持や多くの試合でタフに戦える選手、なかなか自分を発揮できない選手と改めて選手を知ることが多かった。また 8 試合を行ったが対戦相手に恵まれ、それぞれに特徴があり、選手たちにとっては自分の現状を知る良い機会となった。足の裏を使ったプレーや激しさ、うまさ、ずる賢さなど日本では味わえない経験ができた。ただ自分たちでボール保持することも多くでき、ビルドアップから得点など自分たちの良さも再確認できたことは自信にもつながったに違いない。

■活動写真





RB 大宮アルディージャ

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	RB 大宮アルディージャ
■活動タイトル	RB ライプチヒ個人留学
■活動種別	海外活動(個人単位)
■実施場所(国/都市)	ドイツ/ライプチヒ、オランダ/アイントフォーヘン
■協力先	RB ライプチヒ、PSV
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-18、U-17、指導者
●対象者詳細	スタッフ2名:丹野友輔、橋本早十 選手4名:酒井舜哉、神田泰斗、中島大翔、小林柚希
■活動期間	8月8日～18日

【活動報告詳細】

■活動目的

RB グループのライプチヒのアカデミー活動を通して、選手たちの目標である欧州でプレーすることはどういうことかを学ぶ。またスタッフは帯同を通して、現地の活動を通して IDP の運用などを学ぶ。

■活動概要

- 日程:8月8日(金)出発～18(月)帰国
- 内容:RB ライプチヒへのグループ留学と大会参加

* 追加のプログラムとして U-18 酒井舜哉がニューヨーク RB へ短期留学をそのまま継続して実施した。

■実施報告・成果

【成果】

選手の海外活動の慣れ。課題の明確化。スタッフの選手個人を伸ばす意識の理解の深まり。ヘッドオブスカウトのポテンシャルについての考え方の変化。全員のイレギュラーへの対応力、柔軟性が増えた。

【課題】

スタッフの語学力。簡単なサッカーの話をできるようなレベルにはなっておきたい。

●アカデミーダイレクターの総評

RB ライプチヒの研修は非常に有意義なものになりました。理由としては選手の面ですと、選手がはっきりと海外を意識するようになったこと、球際やゴールへ直結するプレーが増えているという点。また生活面についても物おじせずに外国人と接することができるようになった。スタッフは試合分析について相手の分析より、自分たちの選手の個人の分析が増えた。また IDP についても、参加したスタッフは重要性への理解が深まった。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	RB 大宮アルディージャ
■活動タイトル	アカデミーダイレクター研修(RB ザルツブルク)
■活動種別	海外活動(個人単位)
■実施場所(国/都市)	オーストリア/ザルツブルク
■協力先	レッドブルザルツブルグ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	指導者
●対象者詳細	小池直文 AD
■活動期間	8月8日～8月18日

【活動報告詳細】

■活動目的

レッドブルグループ U-16 大会視察とザルツブルクのアカデミー訪問を通して、グループの方向性やフィロソフィを学び、クラブに持ち帰り、RB 大宮アルディージャからの選手輩出に活用する。

■活動概要

●RB ザルツブルグアカデミー訪問 ネクストジェネレーションカップ視察

- 実施日時:8月8日(金)出国～18日(月)帰国
- 訪問先:RB ザルツブルグ
- 参加者:小池直文

■実施報告・成果

【成果】

- 1、レッドブルグループアカデミーダイレクターとの情報交換など国際経験
- 2、来季参加予定大会のレベルの把握
- 3、急遽決定したニューヨークへの練習参加で経験を積めた

【課題】

- 1、来年度大会へ参加する場合の国内公式戦との棲み分け
- 2、スケジュールの不安定さ
- 3、スケジュールの直前まで決定されない点

●アカデミーダイレクターの総評

今回のザルツブルクの訪問は大変有意義なものになった。レッドブルグループのアカデミーダイレクター会議に参加しての情報交換、特にトップチームとセカンドチームの関係、施設の重要性、クラブのフィロソフィなどの揭示方法、分析グループの存在など多岐にわたる。

■活動写真





ジェフユナイテッド千葉

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	ジェフユナイテッド千葉
■活動タイトル	2025 ジェフユナイテッド千葉アカデミー選手・スタッフ ジローナ FC 短期留学
■活動種別	海外活動(個人単位)
■実施場所(都市/国)	スペイン/ジローナ
■協力先	ジローナ FC
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-16、指導者
●対象者詳細	選手:姫野誠/指導者:藤田健(U-18)、軽込秀樹(U-15)、ホアン エスクデロ(U-12)
■活動期間	1月11日~21日

【活動報告詳細】

■活動目的

選手、指導者が、世界基準のレベルの中で、ピッチ内の強度(心技体のタフさ)を知り、ピッチ外でも異なる環境、価値観に触れることで気づきを得て、帰国後の主体的なアクションにつなげ、組織内で相乗効果を出していくことで、「人」としての成長を促していく。

■活動概要

●練習参加

- パーソナルトレーニング:AM3 回
- U-17:PM4 回

●練習視察

- U-23、U-19、U-18、U-17、U-16、U-15、U-14、U-13、U-12、U-11、U-10

●試合観戦

- ジローナ FC 育成カテゴリー:U-23、U-19、U-18、U-17、U-13、U-11
- 国王杯:FC.BARCELONA vs R.BETIS
- ラ・リーガ:RCD.ESPANYOL vs R.VALLADOLID
- ラ・リーガ:GIRONA vs SEVILLA FC

●インタビュー

ジローナ FC アカデミー

- ①育成・強化戦略について ②育成組織構造について ③育成メソッドについて
- アカデミーダイレクター アルベルト シリア氏
 - パフォーマンス部門責任者 ト氏
 - メソッド部門責任者 アレックス氏

■実施報告・成果

【成果】

10日間という短い期間であったが、選手、スタッフともに主体的な姿勢で学ぶことができ、非常に良い研修となった。

10日間オフ・ザ・ピッチでは、選手はひとりでアカデミー選手寮にて、同年代の190cmを超えるザンビア人との2人部屋での共同生活を行い、練習前後には日々、日本で行っているルーティン(ストレッチやクールダウン)も周りから好奇の目で見られる中でもやり抜く強さがあった。オン・ザ・ピッチでは、スペイン語の環境の中で、英単語がわかる選手やスタッフを見つけ、コミュニケーションを積極的にとり、ルールや状況を理解し、自分がやるべきことを明確に見つけることができ、良いパフォーマンスの発揮につなげることができた。スタッフたちは、研修ということで受け身にならず、参加スタッフ2名がスペイン語を話せることもあり、研修以外の時間で、練習終了後に相手スタッフを捕まえて、グラウンド脇にあるカフェで情報交換を行い、生きた貴重な情報を得ることができた。選手、スタッフともに帰国後の自身の活動のエネルギーになっている。

【課題】

選手は今回、同年代のカテゴリーで活動を行い、ある一定の評価を得ることができた。将来、Jリーグや海外リーグ(外国籍選手枠)で成果を収めていく選手を輩出していくアカデミーになっていくためには、同年代の活躍で満足することなく、一つ、二つ上のカテゴリーでの成果が求められる。そのためには、「多面的な指導」(心技体)と「より競争力のある環境づくり」が必要であり、それを通して「チーム」と「個人」をより強化していく。また、それと同時に「選手発掘」(選手獲得の仕組みの構築)も含めての「両輪」(選手育成と選手発掘)のサイクルを回していくことが非常に重要である。この「両輪」のサイクルを一貫性、継続性を持って回していくことができれば、安定した「トップチームにつながるアカデミー選手輩出」につながっていくと思っている。

●アカデミーダイレクターの総評

我々ジェフアカデミーのビジョンは「アカデミー出身の選手がトップチームの中心になり勝利に導く」であり、そのために「10歳から23歳までの長期選手育成プロジェクト」があり、今回改めてスペインという環境の中で、その「道のり」「道筋」の重要性を感じる事ができた。ジローナFCアカデミーダイレクターのアルベルト・シリア氏の「一番大切なのは、いつだって『人』」という言葉が印象に残った。このクラブやアカデミー組織を押し上げてきたのは間違いなく「人」だと。良い人間性(人格者、豊富な知識、成長意欲)のスタッフが良い選手を育てるとも。「大人が子どもの鏡」であり、まずは私を含めた大人たちがトライ&エラーをしながら学んでいくことがジェフアカデミーの進化、発展につながっていく。「トップチームでプレーできる準備はできているか？」そのために技術、身体だけでなく心(頭の中)も整理させられているか。選手が、主体的な姿勢で学べる環境づくりができているか。ジェフアカデミーの強み、魅力をさらに磨き、プロフットボーラーになっていく「道のり」「道筋」が見える持続性、再現性のあるアカデミーを構築していきたい。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	ジェフユナイテッド千葉
■活動タイトル	ジェフユナイテッド千葉 U-14 スペイン・マドリッド遠征
■活動種別	①海外遠征(チーム単位)
■実施場所(都市/国)	スペイン/マドリッド
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	8月24日～9月2日

【活動報告詳細】

■活動目的

今回の海外遠征の目的は同年代の世界基準を体感し、自分たちの立ち位置を確認することで、新たな基準を再設定し、今後の活動に活かすことを目指した。

また、子どもたちの人間的成長を促すためにも多くの異文化に触れ、沢山の学びを得られる活動を行う。

■活動概要

- 国際親善試合 アトレティコ・マドリッド、レアル・マドリッドと対戦
- 国際大会の参加 マドリッドユースカップへの参加
(10チーム参加/5チームずつの予選リーグと決勝トーナメントおよび順位決定戦)
- 社会勉強を兼ねた観光(世界遺産巡り)

■実施報告・成果

【成果】

●オン・ザ・ピッチ(サッカー面)

同年代のトップレベルのチームと戦うことができ、自分たちとの差を感じられたこと。特に認知力、ボールの置き場所、パス&コントロールの質の高さ、勝負へのこだわり、守備時の寄せの速さと距離、攻守の切り替えの速さを体感できたことが良かった。また、一定レベルのチーム(エタフェ、ラージョ)とは自分たちが積み上げているスタイルを発揮することができ、選手たちの自信にもつながったと感じる。

●オフ・ザ・ピッチ(サッカー以外)

オフ・ザ・ピッチでは事前に選手たちを5つのグループに分け、スペインの文化や歴史などをそれぞれで調べ、遠征前にチーム内で共有をしていた。事前学習をしていたことにより、新しいものを観るという感覚もあるが、調べてきたものを確認するということができ、より多くの学びを得ることができたと感じる。出発前にも感じていたが、改めてサッカーだけでなく、人としての成長を促す機会や新しい刺激を与えることが大切だと感じた。

また、子どもたちが口をそろえて話していたのは、洗濯を自分でやるのが本当に大変だったとあり、毎日親がやってくれていることもあり、親の大変さとありがたみを感じた機会になった。

●スタッフやクラブに関わる事

親善試合を含めて、クラブの関わりのあるスタッフと協力したことにより、ビッククラブとのマッチメイクが実現したことが良かった。改めてクラブとしてのつながりを持つ大切さを学んだ遠征となった。

【課題】

●オン・ザ・ピッチ(サッカー面)

親善試合を通じて感じたことは、日本では失点しないようなシチュエーションでも失点につながったこと。その理由はこれくらいの距離で守ればやられないだろうという環境が多く、ちょっとした距離感の違い(寄せが甘い)で多くの失点を重ねることになった。また、大会を通じて、ゲームの入り、ゲーム終盤など、ここぞという場面の集中力、エネルギーが足りずに失点し、勝てる可能性がある試合が敗戦に終わってしまった。

改めてスペインチームとの勝負所への理解の差を感じた大会となった。

●オフ・ザ・ピッチ(サッカー以外)

日常生活は特に大きな課題(問題)はなかったが、観光等での学ぶ姿勢に選手によって大きな差があると感じ、中学2年生という難しい時期(思春期、反抗期)等も手伝って、興味がある選手とない選手で持ち帰れる経験値が大きく変わると感じた。また、言語が分からない中で、分からないなりに積極的にコミュニケーションを取る選手もいれば、殻に閉じこもってしまう選手がいた。世界で戦うことからの逆算で考えると少しずつでもアプローチする必要があると感じた。最後に時代の変化もあるが、全選手がスマホをもっており、飛行機から滞在中も含めて、常にスマホをいじっていることが多かった。間違いなく便利なツールにもなるが、異国の地での活動だからこそ、チームとしてスマホの使い方を考えて使用させる必要があると感じた。

●スタッフやクラブに関わる事

レベルの大会チームとの親善試合、本気の勝負がかかった大会でのスタッフの経験値がもっと必要と感じる遠征だった。どうやってチームをマネジメントして試合に挑ませるか。目まぐるしく変化する試合状況の中での確かな判断し、決断していく。スタッフ間でどうやって役割を分けて試合に挑むなど多くの課題を感じることができ、とても良い経験になったと思う。

●アカデミーダイレクターの総評

今回のU-14 スペイン遠征はクラブとしてコロナ渦以来の遠征となりました。遠征を通じて、すべての遠征オーガナイズをスタッフに任せて実施し、準備段階からスタッフにとってもとても貴重な機会になったと感じています。今回の海外遠征では「世界のトップレベルを体感する」とこと、サッカー以外を中心に「人間的な成長を促す」機会としてより多くの異文化に触れるという2つの軸で遠征を企画しました。サッカー面では同年代の世界トップレベル(レアルマドリッド・アトレチコマドリッド)と戦うことができ、日本国内では体感できないレベルを肌で感じ、自分の現在地を知ることで、今後、選手、スタッフが目指すべき新たな基準が明確になったことが大きな収穫だと思います。またこの遠征は「人間的な成長を促す」機会としてもとても有意義な機会になりました。当初予定していた遠征日程を1日増やした事により、スケジュール的にも余裕が生まれ、マドリッド観光はもちろん、世界遺産でもあるトレド観光やサンティアゴ・ベルナベウでのスペインリーグ観戦など、選手にとっても、心に残る一生の経験ができたと感じています。

スタッフにとっても、10日間という長い遠征をマネジメントすることは国内の遠征ではなく、また日本とは異なる文化での生活は多くのリスクが隣り合わせとなり、簡単な状況下でない中でスタッフ同士の役割分担やリレーションシップを学ぶとても良い機会となりました。

今回の経験を活かして、来シーズンは今回よりもさらに良い遠征になるように準備を進めていきたいと思います。改めて、このような素晴らしい機会をサポート頂いた、Jリーグの方々にはクラブを代表して心より感謝御礼申し上げます。

■活動写真





柏レイソル

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	柏レイソル
■活動タイトル	U-12 スペイン/ポルトガル遠征(Arousa Futbol7 参加)
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	ポルトガル/ポルト、スペイン/アロウサ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-12
■活動期間	5月26日～6月3日

【活動報告詳細】

■活動目的

- ① IDP の取り組みの一環とした技術面、フィジカル面、戦術面、パーソナリティ面等の成長機会の創出
- ② 国際経験の機会創出

■活動概要

- 国際大会出場:Arousa Futbol 7
- 文化活動
- 海外クラブとのトレーニングマッチ
- ポルト観光

■実施報告・成果

【成果】

今回の遠征では、選手たちはどの試合でも果敢に相手に立ち向かい、最後まで大きく崩れることなく、タフなメンタリティを発揮してくれました。大会最後のレバンテ戦では気力を振り絞り、常に良い内容の試合を見せてくれました。柏で日々、自らに高い基準を課して練習に励んできた成果だと感じています。

【課題】

課題も明確になりました。ボールを握る力、運ぶ力が足りず、スペイン・ポルトガルのクラブチームを相手に押し込まれる時間が長く続きました。崩れることはなかった中で「果たして自分たちはサッカーの質で上回ることができたのか？」と、質問する場面が多くありました。この経験は世界の高い基準、そして今後、見つけるべき習慣を知る、非常に貴重な機会となりました。今後は、このスペインで戦ったレベルをひとつの基準とし、それを共有しながら日々取り組みに活かすことを選手たちと確認しました。一過性のものにせず、今回の貴重な経験を、さらなる活躍につなげられるよう精進していきたいと思えます。

●アカデミーダイレクターの総評

昨年に引き続きJリーグ、クラブ、保護者にサポートいただき、海外遠征を実施できたことに感謝いたします。今回の遠征では、様々なスタイルのクラブと7試合、ピッチ外では観光・海でアクティビティと非常に有意義な時を過ごすことができました。

- フットボール: 遠征を通じて世界のトップクラスの実力を体感できた。普段と違う環境に適応することの重要性を感じられた。帰国後、日頃から高い基準を求めて成長することを願います。
- ピッチ外: ポルトガルとスペイン、文化・歴史などを学ぶ良い機会となった。宿泊先では他クラブの選手と積極的に交流しコミュニケーションをとっていた。
- 遠征費用: すべての価格が高騰し、円安の影響もあり、遠征費用が当初の予定より高額になってしまった。今後の遠征については検討が必要になる。

感受性豊かな年代に、海外経験をすることは必ず成長につながるものです。

今後もクラブが選手へ投資を行います、Jリーグからのご支援も引き続きお願いできれば幸いです。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	柏レイソル
■活動タイトル	アカデミースタッフ 海外研修(ビジャレアル)
■活動種別	海外活動(個人単位)
■実施場所(国/都市)	スペイン/バレンシア
■協力先	ビジャレアル CF
■対象者	
●対象チーム・主な年代	指導者
●対象者詳細	AD 渡辺毅、サブダイレクター 平山智規 U-15 監督 御牧孝介、U-15 コーチ 土野弘樹
■活動期間	11月19日～25日

【活動報告詳細】

■活動目的

●指導者/クラブの成長

理論・理屈(セオリー)だけでなく、それらをどのように現場で応用、実践しているのかを確認する。プログラムの包括的な理解につなげる。

■活動概要

2025年2月から、ビジャレアルスタッフによる『柏レイソルアカデミー ディベロップメント・プログラム』を実施

- オンライン研修
- 座学×4回、レイソルアカデミーの活動を視察およびアドバイス
- 今回の海外研修
 - ビジャレアルスタッフによるレクチャー & アカデミー練習見学
 - トップチームの試合観戦

■実施報告・成果

【成果】

今回の現地研修では、ビジャレアルの育成方針とその背景について、非常にリアルかつ深く学ぶことができました。街・施設見学、練習・試合の視察、そして3名のスタッフによるレクチャーは、それぞれが大変刺激的で、有益な内容ばかりでした。アカデミーダイレクターからは、近年の成功『ヨーロッパリーグ(EL)制覇、若手選手の高額移籍、トップチームへの高い定着率』を支えている要因について詳細な説明をいただきました。またスカウトからは、競合クラブに打ち勝つために、観察・判断・交渉のプロセスを高速化している現状や、クラブ哲学に基づいて選手のプロファイルを定義し、世界基準に合わせて常にアップデートしている取り組みなど、非常に参考になる内容を伺い、さらにアナリストからは、ビジャレアルのアカデミーが『個別成長×チーム戦術 × 科学的アプローチ』を融合させた独自の育成を行っていること、そしてIDPを通じて、選手自身が課題を理解し、主体的に成長していく仕組みが確立されており、これがクラブ全体の競争力向上に直結していることを学ぶことができました。

【課題】

今回の研修は、内容・期間ともに非常に充実しており、最適なプログラムであったと感じています。一方で課題として挙げられるのは、今回の学びをどのように選手・スタッフ・クラブへ還元していくかという点です。帰国後にはアカデミースタッフ向けに報告会を実施しましたが、現地で得た熱量や空気感を十分に伝えることは容易ではありませんでした。そこで、現地研修の様子を動画で視聴してもらうよう促し、できる限り臨場感を共有できるよう努めています。ただし、現地でしか得られない学びや感覚が確かに存在するため、今後はスタッフが継続的に学べるよう、定期的に現地研修の機会を設けることを検討したいと考えています。

●アカデミーダイレクターの総評

このたびは、ビジャレアルでの現地研修を実施するにあたり、クラブおよびJリーグの皆様より多大なるご支援を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

現地では、日本では想像しがたい規模の施設、アカデミーに関わるスタッフの多さ、ピッチ上で展開されるフットボールの質、そして選手への多額の投資など、驚かされる点が数多くありました。

これらをそのまま日本で再現することは困難ですが、自クラブでどの要素を取り入れられるかを慎重に精査し、今後の選手および指導者の成長につなげていきたいと考えております。

なお、今回はアカデミースタッフ4名での研修を予定しておりましたが、急遽クラブより山崎社長および強化部スタッフ2名も参加することとなり、クラブにとっても大変意義のある機会になったと感じております。

■活動写真





FC東京

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	FC東京
■活動タイトル	U-15 むさしスペイン遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	スペイン/マドリード、レオン
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	6月15日～24日

【活動報告詳細】

■活動目的

本遠征で、選手・スタッフが自らを広く相対的に見る機会を獲得し、その後の自己理解や自立心を促進させる。ヨーロッパトップレベルのチーム、選手と対峙することで、技術・戦術・フィジカル・メンタルにおける差異を体感し、通用する部分、しない部分を抽出。それぞれの「基準」を見直し、帰国後の日々の取り組みに対する具体度を上げたい。

■活動概要

- 期間:2025年6月15日(日)～6月24日(火)予定
- 滞在国/都市:スペイン/マドリード、レオン
- 人数:選手18名、スタッフ4名
- その他:アカデミースタッフ交流、施設見学、文化交流、世界遺産観光

■実施報告・成果

【成果】

サッカー面では主導権を持ち相手コートで4局面を行える時間を多く持てた。同じ時間を過ごすことでより多くのコミュニケーションを選手たち主導で実施できるようになった。また、日常の基準、意識の再確認ができ帰国後の取り組みに変えていきたい。

【課題】

海外(普段とは違う環境)での適応力、予測がまだ足りない。本質である部分とゴール前の質、アイデアも上げていく必要性を感じた。目的からの逆算、気づきがまだまだ足りないことも明確にみえた。

●アカデミーダイレクターの総評

基準の低さを実感した中、日々のトレーニングでスタッフ含めて意識を高めて実施できている。1回のトレーニングに対する、取り組み、意識に変化が見られてきていて、選手間のコミュニケーションが活性化し、内容も深くなっている。

活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	FC東京
■活動タイトル	FC東京 U-17 フランス遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	フランス/パリ
■協力先	リール
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-17
■活動期間	6月2日～11日

【活動報告詳細】

■活動目的

本遠征で、選手・スタッフが自らを広く相対的に見る機会を獲得し、その後の自己理解や自立心を促進させる。ヨーロッパトップレベルのチーム、選手と対峙することで、技術・戦術・フィジカル・メンタルにおける差異を体感し、通用する部分、しない部分を抽出。それぞれの「基準」を見直し、帰国後の日々の取り組みに対する具体度を上げたい。

■活動概要

- 期間:2025年6月2日(月)～6月11日(水)予定
- 滞在国/都市:フランス/パリ、リール
- チーム:パリ・サンジェルマン FC
- 宿泊先:パリ・サンジェルマン FC 寮使用
- 人数:選手 17 名、スタッフ 4 名
- 参加大会:第 27 回 TOURNOI INTERNATIONAL (開催地:リール/大会方式:3 チーム、総当たりで 20 分ハーフでのリーグ戦)
- その他:パリ近郊 2 クラブとの練習試合、アカデミースタッフ交流、施設見学、文化交流、世界遺産観光

■実施報告・成果

【成果】

今遠征において、自分たちの強みが組織力であることを認識することができた。その組織力を活かして試合を行えば、互角に戦うことができるということも分かった。

世界を基準として自分たちの現在地を確認することができたことは選手たちにとって非常に良い事であった。

【課題】

個人という観点で比べると、まだまだ不十分であるということを感じることができた。特に On the ball の局面において強みを持つ選手が多く、より個人の力が必要とされる両ゴール前(Box and Box)においては対戦したチームの方が、質が高かった。

●アカデミーディレクターの総評

クラブとして一貫したフィロソフィ・スタイルで継続して積み上げた部分は間違いではないと感じる中、個人という観点の視点を改めて強く感じた。今までの基準では通じないということを実感し、特に個の部分に対して意欲的に取り組む姿が多くみられるようになった。また、帰国後、以前よりも主体的にサッカーに取り組むことができるようになったのは大きな収穫と感じる。

■活動写真





東京ヴェルディ

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	東京ヴェルディ
■活動タイトル	東京ヴェルディ U-14 スペイン遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	スペイン/バルセロナ、ジョレット・デ・マルヘ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	4月13日～22日

【活動報告詳細】

■活動目的

昨年よりU-14で海外遠征を行うことをクラブとしてスタンダードにすることができた。昨年はクラブ独自でプログラムし、トレーニングマッチを中心に活動した。今年は大会に参加。今後の海外遠征について、どのような形式が選手にとって良いかを検証したい。

また、クラブがスペインのクラブと提携を進めているので、スペインでの大会に参加することとなった。

■活動概要

- International Mediterranean Cup(通称 MIC)2025 への参加
- 現地クラブとのトレーニングマッチ
- ラ・リーガ試合観戦
- バルセロナ観光

■実施報告・成果

【成果】

サッカーのレベルに関して、グループリークは物足りなさを感じたが、トーナメントからは一気にレベルも強度も上がり、国内ではなかなかできない経験ができた。ヨーロッパのトップレベルのサッカーを体感し、個人・チームの現在地を知ることができた。また、個人の課題が明確になった。

オフ・ザ・ピッチにおいても、エスパニョール、バルセロナなどの、リスペクトを感じるピッチ外の振る舞いを目の当たりにし、自分たちがどうするべきかを認識することができた。事後学習での感想文でもこの点に触れている選手が多かったので、今後の変化に期待したい。

また、日本と違う文化、食事、言語、宗教に触れて、海外を通すことで改めて日本を知ることができた。海外の文化に触れ、新たな価値観を形成することの一助になったと思う。

ほとんどの選手が初めての海外遠征であったが、オン・ザ・ピッチ、オフ・ザ・ピッチで多くの刺激を得てきたことが、帰国後の取り組みを見ていて感じられる。やはり日本での活動だけでは得られないことが多々あることを実感している。今後も継続できるようにしたい。

【課題】

大会に参加したことで、ヨーロッパのトップレベルのチームと対戦したり、観戦したりできるメリットがある。スタジアム・観客の熱狂度など試合の雰囲気も非常に良かった。一方で、グループリークやトーナメント1回戦で敗退すると強豪チームとの対戦は難しい。今回は勝ち進むことができたから良かったが、そうではない場合は物足りなかつた可能性が高い。そして、選手間やチーム間の交流などは難しく、練習場所の確保も難しかった。

また、試合の勝ち進みによりスケジュールが変わってくるので、試合観戦のチケット購入などで急遽の対応が必要になった。結果的に帯同していただいた方の尽力でラ・リーガの試合を観戦することができたが、スケジュールを組むことに難しさを感じた。

オン・ザ・ピッチでは個人の質の違い(技術・個人戦術・フィジカル・振る舞い)が大きかった。世界で活躍する選手になるためには自分たちはすべての面において足りていないと感じたと思う。今後はその差を埋めるためにどうするかを選手だけでなく、私たちスタッフが考えていかなければならないと痛感した。

●アカデミーダイレクターの総評

昨年よりU-14年代に海外遠征をさせるということをし、クラブとしてのスタンダードにしてもらいました。昨年はオリジナルで遠征を企画したので、今年は大会に参加しました。遠征先がスペインということで、選手や保護者の満足度は高かったと思います。事前学習も素晴らしい内容で、意欲的に取り組んでくれたことがよくわかりました。大会については予選リーグまではレベルがあまり高くなかったようですが、決勝トーナメントからはかなりレベルが高かったそうです。自分たちと同年代に「こんなすごい選手がいる」ということを目の当たりにし、強い衝撃を受けたようです。プロになるために、海外で活躍するためには「このままではいけない」ということを痛感したと思います。1つ残念だったのは当初予定していたバルセロナFCの試合日程が変更になってしまい、観戦する試合が変わってしまったことです(エスパニョール vs ヘタフェ)。ラ・リーガではよくあることらしいですが、せっかくの機会だと思っていたので残念でした。今回の成果と課題を精査して、来年の遠征計画を立てていきたいと思っています。いずれにしても、Jリーグからの助成金のおかげでこのような活動ができることを大変ありがたく存じます。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

■活動写真





FC町田ゼルビア

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	FC町田ゼルビア
■活動タイトル	オリンピック・リヨン個人留学
■活動種別	海外活動(個人単位)
■実施場所(国/都市)	フランス/リヨン
■協力先	オリンピック・リヨン
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-18、U-17
●対象者詳細	選手:武田翔琉、佐藤智風、原櫻太 スタッフ:菅澤大我、野寺和音、相澤皓太
■活動期間	3月4日～3月15日

【活動報告詳細】

■活動目的

クラブビジョン「町田を世界へ」に基づき、アカデミー選手が海外遠征で国際経験を積みます。異なるサッカーへの適応や活躍、異文化交流を重視し、自らの考えや行動を見直して今後の目標を再確認することを目的とします。

■活動概要

- 期間 2025年3月4日から3月15日
- 内容 トレーニングおよび練習試合

選手がオリンピック・リヨンのトレーニングに参加する。リヨンには戦術理解やテクニック指導に優れたコーチが多く、質の高い指導を受ける貴重な機会となることを期待する。
また、文化体験や生活面では、異文化に触れることで、選手としてだけでなく一人の人間としての成長を目指す。フランスの食文化や生活習慣、リヨンの観光名所・文化遺産に触れることも、留学生活の重要な一部とする。

■実施報告・成果

【成果】

- ① リヨンスタッフからの高評価
- ② 4回目の渡仏となったが、リヨンアカデミーとの違いに対する選手の反応から、改めて考えさせられる課題ができたこと。

【課題】

- ① 異なるプレースタイル
想定通り、異なる種類のサッカーに苦しんだ。グループ・チーム戦術的な緻密さは全くない中で分かりやすい活躍の場面が少なかった。個人で解決する事に対して不慣れ。
- ② 異文化への適応
想定内であったが、異なる言語、考え方、感情表現に馴染むことに時間がかかった。

③ 選手のメンタリティ

辛口に言えばスモールワールド。異なる事に対して納得できない部分も理解できるが、人としての成長を流さなければならないと感じた。もっと矢印を自分に向けて目的意識を強く持った人材を育成しなければならない。

●アカデミーダイレクターの総評

アカデミーを代表する選手が個人留学したことで気づかされた課題が成果と言える。チームとしてのチャレンジで一定の評価や感触を得たが、個人としてハングリー精神や高い目標設定に対して本当の意味で上昇志向を持たせていかなければならないと感じた。サッカーの先進国と言われる環境に早く慣れさせていきたいとより思えた。サッカーについてすべてを認める事はできないが、明らかにビッグクラブである事は間違いない。この提携を最大に生かして育成に励みたい。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	FC町田ゼルビア
■活動タイトル	FC町田ゼルビア U-12 韓国遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	大韓民国/保寧、ソウル
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-12、U-11
■活動期間	7月23日～8月1日

【活動報告詳細】

■活動目的

「町田を世界へ」というクラブビジョンに則り、アカデミー選手が海外遠征を通して、国際経験を積み世界につなげる。

■活動概要

- 期間 2025年7月22日から8月1日
- 内容 「2025 BORYEONG JS CUP U12 International Youth Football Tournament」への参加。FCソウルとの練習試合。文化体験と生活環境。

■実施報告・成果

【成果】

今回の韓国遠征では、日本国内では得がたいタフな経験を積むことができた。フィジカル能力に優れた相手との対戦や、試合時間の直前変更といった不測の事態に対応する中で、選手たちは高い適応力と精神的な強さを発揮した。

攻撃面では、強度の高いプレッシャーが50分間続く状況下でも慌てることなくボール保持を徹底し、組織的守備が少ない相手に対して空いたスペースを的確に見極め、最適なポジションを取りながら攻撃時間を増やすことができた。

守備面では、相手のフィジカル優位な状況下においても、ロングボールやカウンター対応、球際での勝負に粘り強く取り組み、予測・準備・ラインコントロール・チャレンジ&カバーの重要性を改めて体感した。

また、遠征テーマである「自分たちのサッカーを徹底する」という点においても高い意識でチャレンジし、国際大会でエンブレムを背負って戦う緊張感や、アウェイ環境で戦うタフさを経験。世界を目指すための土台を築く、非常に貴重な機会となった。

【課題】

遠征を通じて、選手たちは想定以上に大きなフィジカル能力の差を痛感した。攻撃面では、強度の高い相手に対してチームとしてのボール保持はできたものの、個人で打開する力が不足しており、局面を変える突破力や1対1の強さが求められると感じた。

守備面では、相手のサイズやパワーに押し込まれる場面が多く、ロングボールや速いカウンター、球際の争いで後手に回ることがあった。そのため、球際の強化に加え、カウンターを受けないためのポジショニングや予測・準備の精度向上、ロングボールに対するラインコントロールやカバーリングの徹底が必要である。

また、フィジカル差を直接埋めることは難しいため、巧さや賢さで差を補い、逆に上回る方法を見出すことが重要となる。今回の経験を日常のトレーニングや国内試合に落とし込み、個人・チーム双方の成長をさらに加速させることが次の課題である。

●アカデミーダイレクターの総評

今回の韓国遠征は3回目の大会参加となったが、これまで以上にレベルの高い戦いとなった。特に今回は、初めてKリーグの育成組織が参加し、日本では経験しにくい高いフィジカル能力やプレッシャー強度を持つ相手との対戦が実現した。

不測の試合時間変更など予期せぬ環境にも直面し、選手たちは強い緊張感と集中力を持って試合に臨む必要があった。攻撃面では、高い強度の中でも慌てずにボールを保持し、限られたスペースを見極めて有効に活用する場面が多く見られた。一方で、強度ある相手を個人で打開する力の不足も明確となった。

守備面では、相手のサイズやパワーに押されながらも、ロングボールやカウンターへの対応、予測や準備の重要性を、実戦を通じて学ぶことができた。

3回目の参加にして、これまで以上に国際大会の厳しさと価値を実感する遠征となり、選手たちにとって今後の成長へとつながる貴重な経験となった。

■活動写真



【活動 3:基本情報】

■クラブ名	FC町田ゼルビア
■活動タイトル	FC町田ゼルビア U-18 韓国遠征
■活動種別	①海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	大韓民国/ソウル
■協力先	FC ソウル
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-18、U-17、U-16
■活動期間	8月18日～23日

【活動報告詳細】

■活動目的

- 「町田を世界へ」というクラブビジョンに則り、アカデミー選手が海外遠征を通して、国際経験を積み世界につなげる。
- T1 リーグ再開を想定し、強度の高い相手との対戦を通じてコンディションとチーム力を高めることを目的とする。

■活動概要

- 期間:2025年8月18日から8月23日
- 内容:現地チームとの練習試合、文化体験と生活環境

■実施報告・成果

【成果】

日本では味わえないフィジカルの強い相手に対して、日頃自分たちが取り組んでいるサッカーが、どれほど通用するのかを試される遠征となった。3試合とも立ち上がりは押し込まれる時間帯もあったが、相手が出てくることで生まれるスペースを認知し、そのスペースをうまく活用することで、時間の経過とともに試合をコントロールすることができた。

CM(中央のポジション)では、韓国遠征前に出ていた課題である「ゴールに向かうアクション」や「それを見逃さない視野」、「コンビでのアイデア」などにおいてポジティブなチャレンジが多く、成長を感じられる3試合であった。守備面では、体格の良いフィジカルの強い相手に対して、組織として相手の良さを消しながら制限をかけ、ボールを奪いに行くことができた。前線からの守備でボールを奪い決定機を作り出すなど、良い守備の場面も多く見られた。また、攻守の切り替えの場面では、下がらずに相手陣内でボールを奪い返し、連続して自分たちの攻撃につなげるプレーも徐々にできるようになってきたことは収穫であった。

相手のフィジカルや体格に気押されることなく、自分たちのサッカーを3試合通して表現できた時間帯が多かったことは、選手たちにとって大きな自信につながった。

サッカー以外の面では、食事や観光など日本とは異なる文化に触れ、選手間およびスタッフとのコミュニケーションが増えたことで、相互理解が深まる有意義な時間となった。観光の際には「ゼルビアですか」と声をかけられる場面もあり、「町田を世界へ」というクラブの理念が韓国でも少しずつ浸透してきていることを実感するできごともあった(韓国籍の選手が在籍していることも背景にある)。

【課題】

フィジカルの強い相手に対して、攻守において組織として上回ることはできたものの、個対個で見たときには相手の方が上だったと言わざるを得ない。1人で相手を剥がす力、守り切る力、1本のパスの精度、そしてそれを何度も繰り返せる量など、個人のレベルをもう一段階引き上げていく必要があると感じさせられた。

また、慣れないピッチコンディション、日本と異なるジャッジ、普段対戦しないタイプの相手に対し、限られた時間の中で、ピッチ内でアジャストしていく力も求められる。3試合とも立ち上がり失点していたら、試合の流れが大きく変わっていた可能性は十分にあった。そうした意味でも、ピッチ内での積極的なコミュニケーションは今後の課題の一つである。

さらに、ピッチ外でも、コーチ陣に促されることなく現地の人々と積極的にコミュニケーションを取る選手は多くなかった。今回の遠征を機に、ピッチ内外を問わず、より自発的にコミュニケーションを取れるようになることを期待したい。

■活動写真





川崎フロンターレ

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	川崎フロンターレ
■活動タイトル	「第7回ベトナム日本国際ユースカップ U-13」への U-13 生田・U-13 等々力の大会参加
■活動種別	海外遠征（チーム単位）
■実施場所（国／都市）	ベトナム／ビンズン新都市
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-13
■活動期間	12月18日～12月21日

【活動報告詳細】

■活動目的

日越サッカー事業の発展、日越相互サッカー観戦意欲促進、国際経験を通して選手・スタッフの個別育成

■活動概要

なかなか経験できない国際大会に参加することの他、ベトナム国内及びその他チーム・選手たちとの国際交流、また現地での日越文化交流、施設訪問による社会貢献事業の経験

●ベトナム日本 国際ユースカップ U-13

- 参加チーム：【ベトナム】ベカメックス・ビンズン FC 他 6 チーム
【日本】川崎フロンターレ他 5 チーム
【シンガポール】1 チーム
- 試合概要：前後半 25 分ハーフ（各チーム予選 3 試合、順位決定トーナメント 2 試合、合計 5 試合）
* 大会最終日、各チームから選抜された選手によるオールスター戦を実施（ベトナム国営放送にて全国中継・配信）

■実施報告・成果

【成果】

生田・等々力ともに、海外チームとの試合を通して、選手・スタッフが現状の自分たちのプレーレベルを確認でき、今後の課題や新たな目標につなげられること。また、異国の地で、生田 vs 等々力の試合が行え、加えて他国の人たち・文化交流を通して、新たな刺激を受け、人間性向上につながること。

【課題】

自分たちより、身体的に高い相手に対して対等以上に戦える技術・戦術の発揮とアジリティー・プレースピードの向上、苦しい試合でも、最後まで戦い抜ける強いメンタリティを身に付けること。また、今年は 2 チーム 出

場が実現したので、どちらかのチームが優勝することを目標にしていたので、それが叶わなかったこと。それから、運営的には、レフリーの質の向上が必須。

●アカデミーダイレクターの総評

普段と違う環境の中(異文化・宿舍・食事 etc.)での活動を通して、技術・戦術・サッカーメンタル etc.、そしてサッカーのみならず、海外の異文化・人々と交流することで、選手個々の活動に対する意識・取り組みに、今後少しずつ変化が見られることを期待したい。今後もこの活動を継続していくことで、選手たちへより高い刺激を提供していきたい。

■活動写真





横浜F・マリノス

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	横浜F・マリノス
■活動タイトル	2025 マンチェスター遠征
■活動種別	①海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	イングランド/マンチェスター
■協力先	マンチェスター・シティ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-16、U-15
■活動期間	3月12日～22日

【活動報告詳細】

■活動目的

世界トップクラス的环境下で、同年代の選手との対戦や交流から自身の目標に近づくための刺激を得て、その意志を継続発揮する。

■活動概要

U-16年代(2025年3月時点)16名の選手と、スタッフ5名にて現地8泊9日のチーム遠征を実施。提携クラブグループでの活動一環となり2023年、2024年に続く活動である。今回もマンチェスター・シティのエティハドスタジアムを拠点として、シティU-16との対戦の他、マンチェスター・ユナイテッドU-16、リバプールU-16と各クラブの施設内で90分(天然芝)の試合実施。また、チーム活動の合間にてシティ各部門担当者とのミーティングを実施し、帯同スタッフは、前回からの変化や新たな情報を得て自クラブの育成にアレンジする試みを継続する。

この他、プレミアリーグ観戦(vs ブライトン@エティハドスタジアム)、エティハドスタジアムツアーを実施。

■実施報告・成果

【成果】

今回で3年連続のマンチェスター・シティアカデミーへのチーム遠征により、先方スタッフとの連携がより一層深まり、育成知識の上積み、以前実施していたことの検証結果など、我々マリノスアカデミーの今後への発展の為に参考材料をまた今回も増やすことができた。シティで行われていることをそのままマネすることではなく、実施しているプログラムの目的と経過、様子や感触を正確に把握し、それを現状の我々の環境下で何を取り入れたいか、そのために何をすべきかをスタッフ間で協議することができる状況をつくれた。

一方、「現地のスタンダード」を知るという目的を選手と共有し、「マリノスのフットボールを表現する」こと、トレーニングマッチとはいえ「勝負にこだわる」ことを強く念頭にもち、強豪3クラブのホームピッチで90分の試合を行うことができた。その結果、多くのポジティブな表現が発揮され、それぞれが今後に向けて成長するための自信を得ることができた。もちろん、課題となる点にも同じぐらい気づくことができた。

【課題】

この関係性を続けながらも、より遠征からの生産性を向上させるために、チーム単位での遠征に加えて「個人留学」の実施を行えるようにしていきたい。チームとしてそれぞれ自分(自分たち)の良さを発揮することは、こ

の3回である程度の感触を掴めている。ただ、今後マリノスでの活躍後にヨーロッパの強豪クラブで活躍できる個を輩出していくことをアカデミーでのターゲットにしているため、その機会創出を準備していく必要性をより感じる事ができた。もちろん、可能な範囲であることは想定されるが、より実り多いものとするためには先方に用意してもらうことと同時に、こちらとしても日々積み上げてその時のために準備するものもあるかと思うので、その視点で他スタッフと共有し、議論を行っていきたい。対象選手、帯同スタッフの語学力の積み上げ、現地での選手評価項目をこちらでも合わせて、現地でどう評価されるかなど、ただ”飛び込む”だけにならないようにしなければいけないと考えている。

●アカデミーダイレクターの総評

今回で3年連続3回目のチーム遠征。帯同スタッフは新たなメンバーとし、より多くのアカデミースタッフに現地の空気を吸い温度感を得てもらうことができた。それを継続して抜げることで、「我々マリノスアカデミーとして、よりどうしたら良いか」の議論と発展力を高める狙いを持っていたが、その予想通り全体での報告会や日々の活動内にて、今遠征ネタからの議論が増加。それぞれが広い視野でのアカデミー発展への思考を持つようになってきた。その理由として、現地での3試合の体験もさることながら、各部門スタッフとのミーティングを今回も多く持つことができたこと。また、他カテゴリーの試合やトレーニングも視察、そしてその担当コーチとも対話を持てたことがあると感じている。今後においては、このスタイルの遠征に加えて、個別の短期留学や本気度の高い大会参加も実施できるよう先方スタッフと引き続き調整し、低年齢からのシティ遠征ストーリーを形成していきたいと考えている。

■活動写真





横浜FC

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	横浜FC
■活動タイトル	横浜FC U-14 スペイン・ポルトガル遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	スペイン/マドリード、ポルトガル/ブラガ
■協力先	アトレティコ・マドリード、UD オリヴェイレンセ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	3月28日～4月5日

【活動報告詳細】

■活動目的

- ①個人・チームのレベルアップと海外クラブとの試合経験から視野拡大
- ②自クラブのMCOによるオリヴェイレンセ訪問により、自らのパスウェイの具体的イメージの構築

■活動概要

スペインとポルトガルの4チームと交流戦を行い、またマドリードではラ・リーガの観戦も実施。昨年のIBURAカップという大会に参加したが、今回は試合数が減るものの、高いレベルのクラブと試合を組み、レベルアップを図る。MCOであるオリヴェイレンセの訪問(トレーニング見学、ユースOB所属選手との交流)も大きな目的となる。現在2名のユースOB選手が所属しているため、U-14選手の具体的目標の一つとする。

■実施報告・成果

【成果】

今回、ラージョ(スペイン)とスポルティングブラガ(ポルトガル)と同年代でも圧倒的レベルの差を体感できたこと。前者は組織としての戦術理解度が高く、相手を見て、立ち位置やグループとしてプレーを選べることに特徴を感じ、そこに自チームとの大きな差を痛感。また、そのグループとして求められるプレーを可能にする個人スキルが高く、ボールを握って攻めることに対する育成の質の高さを感じた。後者は個人のフィジカル能力、一人で打開するなど個の質が高い。前を向く、相手を剥がして前進する。ゴールを狙い続けるという点に自チームとの前へ攻めるというこだわり、個で打開するという高い意識の違いが見られた。チーム/個人として埋めていかねばならない具体的テーマが明確になった。

【課題】

環境面では日本では珍しい夜遅くの試合時間、審判は主審のみ、ボールの質感の違い、ピッチコンディションなど日本では味わうことのできない環境でサッカーができたことは、選手の成長にとって非常に良い経験となった。異国の環境で力を発揮できる選手、発揮できない選手とスタッフから見ると顕著に差がみられた。今後タフな選手に育っていくためにも、今回のようなイレギュラーな環境を意図的に作っていく必要性を強く感じている。

●アカデミーダイレクターの総評

MCOの一環として、横浜FCがオーナーを務めるオリヴェイレンセ(ポルトガル2部リーグ所属)訪問を兼ねた欧州遠征は今年で2回目となります。昨年はポルトガル国内の大会に参加し、今年は厳選したトレーニングマッチを5試合とラ・リーガ観戦を企画実施となりました。遠征全般の評価としては、トレーニングマッチ2勝1分2敗の結果であり、特に2敗となった(ラージョ、ブラガ戦)は、圧倒的な個人能力の差や正確な技術を要したグラウンドを広範囲に使ったチーム戦術に手も足も出ない経験ができたことは、今後、彼らのサッカー感の広がりや自らの現在地を把握する大きな経験になったのは間違いありません。今後の遠征を企画する上で、大会参加の利点・欠点(常に勝敗を求めた環境を用意できるものの、拮抗或いは圧倒的強者との対戦を多くは期待できない)を考えた中で、今回のようにピンポイントで対戦相手を選びスケジューリングする方向も健闘していきたい。オリヴェイレンセ訪問では、永田滉太郎と高橋友矢のユース出身選手の海外でチャレンジする姿を見たうえで、彼らの志などの話を直接聞く機会は非常に有意義であった。

■活動写真





湘南ベルマーレ

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	湘南ベルマーレ
■活動タイトル	2025 COPA BELLMARE U-11 PILOT INTERNATIONAL TOURNAMENT
■活動種別	国際大会主催
■実施場所(国/都市)	神奈川県平塚市
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-11、U-12 女子
■活動期間	6月21日～22日

【活動報告詳細】

■活動目的

本大会は2000年より開催していた「湘南ベルマーレホームタウンカップ」を前身としており、2016年より「COPA BELLMARE」として装い新たに国際大会として開催しています。湘南地域の子どもたちが、サッカーを通じて国際交流を行う機会を作り、またJクラブや海外チームと対戦することで、少年・少女のサッカー技術の向上と健全な心身の発育を図ることを目的とします。

■活動概要

8人制の競技規則に沿って大会規定を定めます。大会期間中は、海外チームが大会冠スポンサーのPILOT工場に表敬訪問や、指導者研修、指導者懇親会、選手交流会を実施し、参加選手・スタッフが様々な交流を持てる機会を創出します。

- 開催日 2025年6月21日(土)、22日(日)
- 会場 馬入ふれあい公園サッカー場 人工芝・天然芝・アリーナ
- 参加資格 2014年1月1日以降生まれの選手
- 参加チーム数 国内外の24チームが参加(チーム登録は選手16名、スタッフ4名)
- 大会方式 1日目:4チーム×6グループのリーグ戦、1日3試合実施
2日目:順位決定戦トーナメント

■実施報告・成果

【成果】

今大会はパルメイラス(ブラジル)の圧倒的な実力を発揮し優勝で閉幕しました。今大会の成果として、①日本文化交流②女子チームの初参加③指導者講習会の実施④国際交流の4つが挙げられます。

①日本文化交流としては、今大会のメインスポンサーである株式会社パイロットコーポレーションの平塚工場に、パルメイラスの選手・スタッフが表敬訪問しました。工場の方々にご挨拶をするとともに、PILOTの主力製品であるフリクションのボールペンを作成する体験会を実施していただきました。

②女子チームの初参加として、湘南ベルマーレU12ガールズ選抜を編成しました。セレクションにも数多くの女子選手が参加していただき、また大会当日も男子チームに負けない実力を発揮し、大会全体が盛り上がりました。

③指導者講習会は、ホームタウンレセンの指導者を中心に参加し、パルメイラス監督を講師に据えて大会前日の夜に実施しました。ブラジルのサッカー事情やパルメイラスの取り組みを中心に世界のサッカーに触れる機会の創出となりました。

④国際交流については、大会初日の試合後に参加チーム・選手全員が楽しめるようなイベントを実施しました。イベント後には、あちらこちらで海外チームと国内チームの選手同士の挨拶を交わすなどの場面が見られました。

【課題】

今大会の課題として、①運営の負担、②暑熱対策、③大会費用の3つが挙げられます。

①運営の負担については、今大会はほぼアカデミースタッフを中心に準備、運営、片付けを行っているので、スタッフの負荷が極端に高くなることが挙げられます。また開催時期がどうしても6月に開催されるので、育成スタッフは直前まで公式戦との日程調整に追われ、参加できないスタッフ分の負担が参加できるスタッフのしかかってくるものが挙げられます。

②暑熱対策として今年も30℃を超える気候の中で開催となり、熱中症予防にはだいぶ力を入れました。しかしながら暑い時間帯の試合開催など大会運営のあり方を再検討しないといけない状況にあることは課題として残りました。

③大会費用として海外チーム招聘に伴う費用負担が高騰していることが課題として挙げられます。大会レベルを維持または拡大を目指すとして、南米、欧州それぞれから1チームずつは招聘したいと検討していますが、円安傾向が続く中、渡航費の高騰などにより費用負担が増加し難しいのが現状です。

●アカデミーダイレクターの総評

今大会は大成功となりました。クラブとして半年以上前から事前準備をフロントとアカデミー全体で行い、各セッションにグループを分け、全体で大会に向けて積み重ねてきた経験を活かしたことが成功の要因だと感じています。さらにスポンサーの拡大に努め、サポート体制を整えました。そして、クラブ内外で指導者講習会を実施し、地域の指導者との交流を深めたことや女子選手へのプレー環境の提供をすることでさらなる地域活性化につながったと感じています。この大会があることでレセン活動が活発になり、各チームが若年層の強化を図るきっかけとなり、地域の目標となる大会になってきています。私自身も湘南地域で育ち、この地域から多くの選手が世界へ挑戦していく未来を描きながら、選手にとってかけがえない経験となり未来への大きな一歩となるように、引き続きより良い大会となるように来年以降も取り組んで参ります。

■活動写真





ヴァンフォーレ甲府

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	ヴァンフォーレ甲府
■活動タイトル	ヴァンフォーレ甲府 U-18 シンガポールキャンプ
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	シンガポール/チャンピオンズウェイ
■協力先	国立シンガポールスポーツスクール
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-17、U-16、指導者
■活動期間	1月16日～24日

【活動報告詳細】

■活動目的

U-18のシーズンスタートにあたり、温暖な環境にて、個人、チームにアプローチするために実施する。また、国立シンガポールスポーツスクールの恵まれた施設を使用し、特にフィジカル面へのアプローチを行い、個人のフィジカル面を強化したい。現地では通訳を置かず、選手、スタッフの語学力向上へのアプローチを行う。

■活動概要

オン・ザ・ピッチではボールワークトレーニング、戦術トレーニング、個人強化トレーニング、フィットネストレーニング、国際交流試合を実施いたします。オフ・ザ・ピッチの活動として、観光、現地生徒との交流会を行い、選手、スタッフの国際感覚を養う一助としたいと考えています。

■実施報告・成果

【成果】

国立シンガポールスポーツスクールの高水準な施設を活用し、体幹・スプリント・持久系のトレーニングに計画的に取り組むことができた。温暖な環境下での負荷にも順応し、選手個々のフィジカルリテラシーが向上した。ボールワーク、戦術トレーニング、国際試合を通じて、ポジションごとの個人課題(IDP)に向き合う時間を確保し、技術・判断・フィジカルの統合的な成長が顕著に見られた。また指導者間の意思統一、一貫性が高まり連携がより強固なものとなった。

【課題】

温暖環境下での高度なセッションでは、戦術理解や判断スピードに乱れが見られる選手もいた。プレー原則として自動化するには継続的な積み重ねが必要。また生活面でのセルフマネジメントとして暑熱環境での水分補給管理や栄養摂取に課題がみられる選手がいた。自己管理能力は継続的に強化が必要。最後に多くの選手はコミュニケーションに挑戦したが一部選手は発話の積極性に欠いた。話さざる得ない状況作りがより効果的と考えられる。

●アカデミーダイレクターの総評

本キャンプは、温暖なトレーニング環境と国立シンガポールスポーツスクールの充実した設備を活かし、フィジカル・戦術・語学・国際感覚という複数のテーマを統合的に伸ばす機会となった。選手は慣れない環境下でも主体的に取り組みフィジカル強化と戦術理解(新監督)においてたしかな前進が見られた。総じて、シーズン開幕に向けた準備段階として非常に有意義であり、ここで得た経験と課題意識を、年間のトレーニング計画へ落とし込むことで、さらに大きな成長が期待できる。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	ヴァンフォーレ甲府
■活動タイトル	ヴァンフォーレ甲府 U-14 インドネシア遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	インドネシア
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	4月14日～21日

【活動報告詳細】

■活動目的

9年間の一貫指導(U-12、15、18)を基本に、プロ選手の育成を目的として活動していることから、この年代において海外遠征を経験し、世界基準を体感すること、海外での国際大会を経験(移動、気候、環境、食事、審判)することにより、強い精神力の養成が図れること、異文化交流することにより、今後、国際感覚を養うための一助とする。

■活動概要

現地での大会参加をメインに参加クラブ、選手との国際交流を行う。また観光などを行い、インドネシアの歴史や成り立ちを学び国際感覚を養っていく。

【大会概要】

- 東ジャワ/インドネシア
- BARATI CUP INTERNATIONAL TOURNAMENT 2025

■実施報告・成果

【成果】

特筆すべき成果として局地戦での球際の強さ、プレッシャー下での判断スピード、そしてトランジションの質など、国内の基準とは違う強度を体感したことで、選手たちの基準値が上がった点が挙げられる。また東南アジア特有の食事にも徐々に慣れていき、水分補給・睡眠など異文化環境での自己管理スキルの意識が各段に高まった。言語が通じない環境での自己主張、宿泊生活での自立など心理的な成長が顕著に現れた。

【課題】

高い強度でプレッシングを仕かけてくる相手に対し、最終ライン及び中盤のパススピードとポジションを取り続けることが遅くなりプレッシャーを受けてしまうことが顕著に見られた。特に足元へのパスに依存する傾向が強く、相手の圧力を利用して背後へ抜け出す判断(ライン間を広げる駆け引き)が不足していた。その結果、ビルドアップの初期段階でボールを前進させることが難しくなり、プレッシングを受け続ける時間帯が生じた。

●アカデミーダイレクターの総評

今回のインドネシア遠征は、選手たちにとって日本では決して得られない経験が凝縮された非常に価値の高い機会となった。天然芝の不均一なピッチ、高温多湿な環境、局面の強度が高い現地チームとの対戦は、選手たちの技術・判断・フィジカルにリアルな負荷を与え、その中で多くの学びと成長が引き出された。また言語・文化の壁を超えて交流し、時間をともにした経験は、サッカーを通じて世界とつながる実感を持つ非常に重要なステップとなった。

■活動写真





松本山雅FC

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	松本山雅FC
■活動タイトル	U-14 アメリカ遠征 New Year's Futures Cup 参加
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	アメリカ合衆国/アリゾナ州フェニックス
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	1月1日～8日

【活動報告詳細】

■活動目的

- 海外で試合することを通して海外のレベルを体感し、自分の現在地を確認する。
- 海外で生活することで、海外に早く適応できる選手になる。
- 海外遠征を通じて、世界で活躍する選手・人材を育成する。

■活動概要

- トレーニング・トレーニングマッチ
- U-14 New Year's Futures Cup への参加
- カルチャーツアー(グランドキャニオン)
- RAZUSO 講演(プロカメラマン永見亜弓さんによる講演)

■実施報告・成果

【成果】

日常の活動からタフで、世界で活躍できる選手を目標に、シーズンを通して連戦や暑い中でのゲームや高校生を相手にし合いを行ってきた成果を感じられた。

試合の中のプレーでは、海外選手の身体的な違いにも対応している場面や対応しようとしている場面も多くあり、たくましさも感じられた。

また、初めての45分試合も経験することができたのも良い経験となった。

オフ・ザ・ピッチでは現地の物を食べて環境に適応できている・適応しようとする姿勢があり、少しずつたくましさが出てきた。

現地の選手や海外選手とも積極的にコミュニケーションを取り、1年間クラブスポンサーのAtoZ様の英会話授業を受けた成果を出すことができていた。

サッカーでもサッカー以外でも選手に取っては今後の生活にとっても良い刺激となった遠征だった。

【課題】

オン・ザ・ピッチでは多くのチャレンジする場面があったが、まだまだ自分たちでチャレンジ→解決 or 課題→取り組みという行動を増やしてほしい。

1対1の球際の強さはまだまだ力強さが足りないと感じられた。

海外選手のダイナミックさやずるがしこさを取り入れ、日本人の中でも尖った部分も作ってほしいと感じた。

オフ・ザ・ピッチでは食事の量をもっと増やしていかないといけないと感じた。食事の量は食べていたが、アメリカの食事の量に選手たちが残す場面も見受けられたので、日本に帰ってもバランスも大切だが量の部分にも取り組んでほしい。

アメリカに行くよりも帰って来てからの方が、時差ボケが強くでている選手が多かった。遠征に行って終わりではなく、帰ってから普通に生活やクラブの活動を当たり前に行えるタフさも身に付けてほしい。

●アカデミーダイレクターの総評

U-14(新 U-15)の選手はU-13 年代から、スポンサーの AtoZ 様の協力のもと月に 2 回程度の英語の授業を受けていた。この活動は、世界で活躍できるサッカー選手・社会人を育成するミッションを達成するために始めたもので、この選手たちに海外遠征をぜひ体験してほしいと思っていたことが実現できてとても良かった。

サッカーに関しては、異なる国のサッカーチームと対戦できたことは選手としての価値観を広げることができたと思う。多くの選手は、帰って来てからプレーがダイナミックになったと感じている。

今回の海外遠征を忘れず、自分が海外でプレーすることを描きながら IDP にも積極的に取り組んで個の力を向上させて行ってほしい。

■活動写真





AC長野パルセイロ

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	AC長野パルセイロ
■活動タイトル	IIZUNA International Junior CUP2025
■活動種別	国際大会主催
■実施場所(国/都市)	長野県長野市
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-12
■活動期間	7月29日～31日

【活動報告詳細】

■活動目的

- 長野県の子供たちに、サッカーを通じて国際交流の場や国際試合の経験を積む機会を提供することで、仲間との絆を深め心身の健全な発展の発達に寄与すること。
- 今後キャンプ地、大会誘致を視野に入れ拡大開発計画のある夏でも涼しい飯綱高原南グラウンドを利用し、スポーツ振興と飯綱高原のグリーンシーズンの観光振興も目指していく。

■活動概要

【大会概要】

- 開催期間 7月29日(火)～7月31日(木)の3日間
- 会場 長野県長野市飯綱町(飯綱南グラウンド)、長野県長野市篠ノ井東(長野Uスタ) 予選リーグ7月29日、30日飯綱で開催、31日は決勝・順位決定トーナメントで長野Uスタを利用
- 参加チーム 長野県内チーム12チーム、海外招聘クラブ2チーム、県外2クラブで開催

【その他の活動】

- 大会期間中に参加クラブ選手指導者、海外招聘クラブ選手指導者との交流会を実施
- 31日試合開催前イベントとして防災イベントを実施(全参加クラブ向け)

■実施報告・成果

【成果】

- ① 大会開催について多くのメディアの露出があり大会の存在を多くの人に知っていただけた
- ② 国際試合経験機会が殆どない県内U-12チームの選手、スタッフのとても良い経験になった
- ③ 海外選手との技術やスピードの差を自らの経験として選手たちが体験した
- ④ 飯綱高原という涼しい場所の告知拡大につながった
- ⑤ 海外チームを招聘できたことで他県Jクラブの参加も叶い(浦和レッズU-12)、長野市内からの参加クラブも普段戦うことのできないJクラブとの対戦が叶った

【課題】

早くも来年開催の有無などの問い合わせがあるが、グラウンド周辺には多くのクラブを一度に受け入れる宿泊施設がないため、長野市飯綱町と計画している飯綱の開発事業を進める際には、その点を考慮することでより規模が大きい大会に成長すると感じた。

今回は 16 チームの参加であったため運営面では問題なく運営できた。

●アカデミーダイレクターの総評

今回このような大会「IZUNA international Junior CUP」を開催するにあたり、多くの企業様、Jリーグからの補助金でサポートしていただき実施することができました。

普段経験することができないがこのような大会を、長野県で海外チームを招いて行えたことは、本当に今後の長野県のサッカーに大きく影響すると感じました。

選手はピッチの上で対戦したことのない海外の選手と戦い肌でいろんなことを感じたと思います。(フィジカルの強さ、スピード、技術)などを感じながらピッチ上で戦うことができたと思いました。この大会で選手自身が気づいて今後何をしていかなければわかればこの大会を開催した意味があるかと思いました。

選手だけではなく多くの指導者方も気付かされるが多かったのではないのでしょうか

今後は私たちパルセイロと長野県の指導者の方が、いろいろな意見交換をしながら長野県のサッカーを盛り上げていければいいと思います。

冒頭にもお伝えさせていただきましたが多くの企業、Jリーグからの補助金、運営に携わってくれた多くの方に感謝しています。

■活動写真





アルビレックス新潟

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	アルビレックス新潟
■活動タイトル	JINTAN U14 ASEAN Dream Football Tournament 2025
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	タイ/バンコク
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	7月20日～27日

【活動報告詳細】

■活動目的

U-14年代でアジアでの戦いを通して、ピッチ内外での多様なスタイルやライフスキル、また価値観を実際に体験し、選手として、人としての成長を加速すること。

■活動概要

【大会概要】

- 協力 タイサッカー協会
- 後援 (公社)日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)、タイサッカー協会、在タイ日本国大使館、日本アセアンセンター、タイ国日本人会
- 開催日時 2025年7月21日(月)～7月26日(土) ※24日(木)休息日
- 会場 ヴェルソーインターナショナルスクール(バンコク)
- 参加チーム 日本から5チーム、タイから10チーム、マレーシアから1チーム 合計16チーム

■実施報告・成果

【成果】

高温多湿な気候への適応や、日本の基準とはやや異なるレフェリングへの対応、そしてフィジカルやスピードに優れた相手との真剣勝負を体験することができた。選手たちは、感情をコントロールしながらプレーを続けることの重要性や、プレースピードの向上といった変化が見られた。また、この年代で異国の文化に触れることで、多様性への理解が深まり、すぐに言葉を理解できなくても、何とか伝えようと努力する姿も見られた。コミュニケーションもサッカーもスキルが重要なのは言うまでもないが、同じくらい、何かを成し遂げるための情熱や主張したり聞いたりすることの重要性にも気づきがあったのは成果であった。

【課題】

プレーの強度やゴールを奪う/守ることへの執着では、現地の強豪には圧倒された。また、事前に分かっていた長時間移動や時差、気候の差がある中での試合に対する準備は不足していたと言わざるを得ない。しか

し、プレーを含めた環境への順化という意味では成長を感じることができた。ここで体験した基準や成長スピードを落とさないように日本でその環境をいかに提供/創造していくかが課題である。

●アカデミーダイレクターの総評

今回の遠征のテーマは「タフ、『or』よりも『&』」でした。スケジュール的にもタイトなものを構築し、気候/食事/文化/の違う環境、とりわけアジアで強度の高い同年代の選手と真剣勝負をすることができた。初戦、現地の強豪ブリーラムには敗れたものの、以降は環境や強度にアジャストしていく様子から、成長を感じることができた。文化交流ではプロのアテンドではなく、現地の学生との小グループ観光を実施し、母国語以外でコミュニケーションを図りながら一日を過ごし、これも貴重な体験となった。今後はここで体感した強度やコミュニケーション力を日常にできるか、アカデミー内で積極的にストレッチ&統合を繰り返しながら選手個々に適したプレー環境を提供していくことで、ここで得た体験を成長につなげてきたい。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	アルビレックス新潟
■活動タイトル	SC ブラガへ選手と指導者の短期留学
■活動種別	海外活動(個人単位)
■実施場所(国/都市)	ポルトガル/ブラガ
■協力先	SC ブラガ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-17、U-16、指導者
●対象者詳細	選手:山崎琉偉、田中琉磨、指導者:梅山修
■活動期間	8月16日~9月1日

【活動報告詳細】

■活動目的

- ターゲット選手が、世界のトップレベルの育成環境で、自分の強みや課題を再認識するとともに、近い将来プロ選手として活躍するための土台を作り、成長を加速すること
- 指導者は年代別代表を多く輩出しているクラブのフィロソフィやメソッド、指導や環境を学ぶこと

■活動概要

●対象 選手:山崎琉偉、田中琉磨

●対象指導者:梅山修

- 選手はクラブ施設内の寮にて寝食しブラガの同年代選手とともに活動(トレーニング/試合)する(まずは各選手の年代カテゴリーでプレーし、その後、適したカテゴリーに移る予定)
- 指導者は活動及びハードソフトの環境を視察するとともに育成フィロソフィを学ぶ

■実施報告・成果

【成果】

●オン・ザ・ピッチ

- この度の短期留学で求めたのは、スキルよりもポテンシャルを発揮するための意識の変化であった。その点で、選手がそれぞれ課題と自覚していた、プレースピードやオフザボールの質をはじめとする“強度”に、最初は戸惑いも見られたが、意識で変えられる部分には変化が見られた。帰国後も確実な変化が継続して見られており、それをチームメイトに要求するなどチームにも良い影響を与えている。
- ピッチ内外で言葉を理解しようとする意志、伝えようとする熱意など、世界でプレーするためにベースとなる重要な要素を、身をもって体験し、深く理解した。

●オフ・ザ・ピッチ

- 寮での共同生活を通して、いかに自分たちの日常が恵まれているのか、ライバルとなる同年代の選手たちはどのような背景で、あるいは環境でサッカー選手を目指しているのか、実際に近くで過ごすことで周囲への感謝やモチベーションにつながった。コミュニケーションや言語についてもその重要性も実学として体験し、海外で活躍するイメージや動機につながった。
- 他の地元クラブともつながりができ、トップチームを含めた個人の交流やアカデミーチームレベルの遠征も可能性が見えてきた点もポジティブ要素。

【課題】

●オン・ザ・ピッチ

- 強く速い強度を日常にすること
 - ① 高強度の中で素早くプレーするための基礎技術とそのベースとなるフィジカルの向上
 - ② 今は“意識”すればできることを“無意識”にできる状態になるよう日常の継続/実践

- コミュニケーションスキルとセルフコンディショニング
 - ① 主張と傾聴のスキルを向上させること。(世界ではほとんどの人が英語を話せる)
 - ② 睡眠/食事/学業などサッカーに集中するために自身でコントロールできることを自分で準備すること

● オフ・ザ・ピッチ

- コミュニケーションスキルとセルフコンディショニング
 - ① 主張と傾聴のスキルを向上させること。(世界ではほとんどの人が英語を話せる)
 - ② 睡眠/食事/学業などサッカーに集中するために自身でコントロールできることを自分で準備すること

● アカデミーダイレクターの総評

この度の SC ブラガ留学では、2選手がそれぞれ持つ課題に直接的に刺激を与えることができた。特に世界のトップ選手を目指す同年代の中で、自身のテクニックやプレースピードや判断スピード、コンタクトの強さやメンタル的な強さがどの位置にいて、今後何に取り組むべきか、多くの収穫があった。

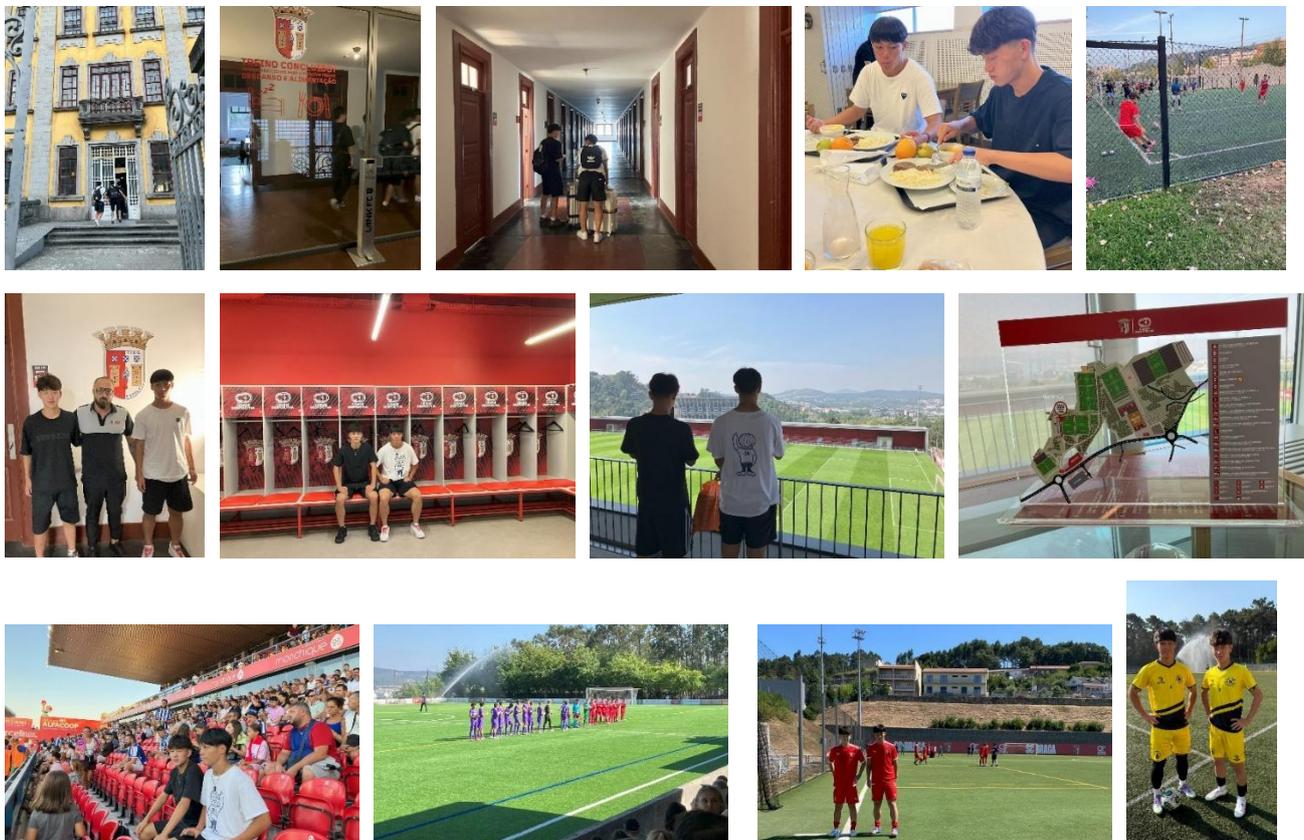
また、本事業は 2 人の成長だけにとどまらず、ここで体感したものをチームに還元し、日常を世界基準に近づけていく狙いもあり、ここからの大きなテーマでもある。

指導者にとっては、国やクラブによって異なる育成の方針やアプローチを学ぶことができた。SC ブラガではカテゴリーや年代は試合の条件でしかなく、ストレッチという概念もないのではないかと思えた。また、トップから育成まで同じ戦術で統一しちることでクラブ全体が一つのチームであり、その中で“個々にあった環境でプレーする”ことでシームレスな育成となっていると感じた。

また育成部門では指導者の年齢が比較的若く、プロ選手にはなれなくてもプロ指導者を目指す若者が多いという文化が定着しつつあり、教えようというよりも、ともに成長/成功に向かおうとする空気感があつた。自クラブでも、カテゴリーは試合の条件でしかないという意識でシームレスな成長環境を推進していく。

同時に、本事業を通して、Jクラブで長く通訳をされた方やJリーグ選手経験のある方とのつながりもでき、クラブ間での交流にも発展の可能性を得られたことも大きな成果と言える。

■ 活動写真



【活動 3:基本情報】

■クラブ名	アルビレックス新潟
■活動タイトル	選手個人と指導者の短期留学
■活動種別	海外活動(個人単位)
■実施場所(国/都市)	ブラジル/クルゼイロ
■協力先	クルゼイロ EC
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-16
●対象者詳細	選手/長谷川蒼羽 指導者/手塚俊一朗
■活動期間	10月16日～11月4日

【活動報告詳細】

■活動目的

ターゲット選手が、世界のトップレベルの育成環境で、自分の強みや課題を再認識するとともに、近い将来プロ選手として活躍するための土台を作り、成長を加速すること。指導者は年代別代表を多く輩出しているクラブのフィロソフィやメソッド、指導や環境を学ぶこと。

■活動概要

●クラブ クルゼイロ EC(ブラジル)

期間:2025年10月16日～11月4日(TR10月20日～11月3日)

- *選手はクラブ施設内の寮にて寝食しクルゼイロの同年代選手とともに活動(TR/試合)する(まずは同年代カテゴリーでプレー。その後、適したカテゴリーに移る可能性あり)。
- 指導者は活動及びハードソフトの環境を視察するとともに育成フィロソフィを学ぶ。

■実施報告・成果

【成果】

スピードが速く、フィジカルコンタクトが強い、強度の高い環境の中で、最初はパスが受けられない、受けても周りと合わずボールを持ちすぎて失ってしまうシーンが多かったが、意識の変化が見え、判断を早くすることや動きの緩急を大きくするなど、少しプレーに変化が見えた。その結果自分の技術の高さを出せるシーンも増え、名前を呼ばれてパスを受ける回数も増えたと思う。ピッチ内で言葉がわからないながらも、自分の意志や考えを伝えようと、身振り手振りや英語でコミュニケーションを取ることもチャレンジしていた。海外でプレーする目標もある選手なので、コミュニケーションの重要性と、自分の意志を伝えることの大切さを理解していた。

【課題】

●オン・ザ・ピッチ

日常のTRでスピード意識する→無意識へ

- ① 速くて強いプレスの中で判断のスピードを上げる。動きの連続性を身につける。
- ② 守備のプレス強度と反応速度を高める。

●オフ・ザ・ピッチ

コミュニケーションスキルとセルフコンディショニング(プロ意識)

- ① 自分の意思を伝える。(言語能力の習得、自己主張)
- ② ピッチ上で100%出すための準備をする。特に食事で身体を作っていくこと。ピッチ上で100%出すための準備をする。特に食事で身体を作っていくこと。

●アカデミーダイレクターの総評

今回のクルゼイロ EC 留学では、選手の足りない部分を本人が肌で感じることができる環境を与えることができたと思う。ブラジルの世代別の代表が多いたる環境の中で TR を行う中で、技術面での手応えを感じる一方で、判断のスピード、フィジカルコンタクトの強さ、反応速度など自分に足りないものを感じ、今後何に取り組むべきか知ることができた。ただし、こうした課題は継続的な取り組みの中でしか向上していかないものでもあるため、ブラジルで感じた強度をチーム全体へ発信していくことが求められる。これからの本人の意識の変化と指導者として、そうした環境づくりが必要になってくる。

指導者にとっては、日本とは違った選手へのアプローチやクラブの考えを学ぶことができた。日々の TR や公式戦に向けたミーティングの指導者の熱量が非常に高く、それが選手の取り組みやプロ意識につながっていると感じた。そして、クルゼイロ EC では、カテゴリーを超えてのスキップもあるが、アカデミーとトップチームとの関わりが強いと感じた。特に U-20 はトップチームと同じ練習会場で行っているため、トップチームの練習にアカデミー選手が参加することはもちろん、トップチームのスタッフが練習を見に来ることも多いようだ。その結果、プロ選手と比べたアカデミー選手の課題が明確になり、そこに対しての取り組みが、プロ契約の多さにつながっているようだ。また育成部門ではカテゴリーの垣根を超えて、お互いの TR や試合に参加しており、クラブ全体で選手一人ひとりを育てようという雰囲気を感じた。また、選手の良いプレーには、手放しに褒めている姿も印象的だった。その結果、選手の自主性や創造性が生まれていくものと思った。

また、クルゼイロ EC から継続的な選手の練習参加や関係継続の提案もあり、今後も選手や指導者がお互いに学び会える環境を提供し会えればと思う。

■活動写真





カタレ富山

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	カタレ富山
■活動タイトル	カタレ富山ユース選手スペイン留学
■活動種別	海外活動(個人単位)
■実施場所(国/都市)	スペイン/バルセロナ
■協力先	Club Esportiu Europa
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-17、U-18
●対象者詳細	選手:長谷川岳久、村上達郎、スタッフ:東保成
■活動期間	10月17日~11月2日

【活動報告詳細】

■活動目的

- ユース選手の個人留学を通じて、国際的な経験とスキルの実証化を図る。
- 選手の成長を通じて、地域のサッカー文化に貢献する。
- 個人留学の成功を基盤として、将来的なクラブ間提携の可能性を探る。

■活動概要

- 留学期間:2025年10月17日(金)~11月2日(日)
- 選手:受け入れ先クラブでのチームトレーニングへの参加、個別トレーニング、試合観戦
- 指導者:受け入れ先クラブのトレーニング視察、研修、意見交換、試合視察

【期待される成果】

ユース選手の国際性とスキル向上、スタッフの技術と認識の展開、地域のサッカー文化の起点としての影響力強化

■実施報告・成果

【成果】

●選手たちが感じたもの

- 勝負へのこだわり(「闘う」をプレーで表現する/球ぎわ、身体を投げ出すシュートブロックなど)
- 積極性(自分の考えを持ち、それを周囲に伝えようとする)
- プレーの速さ、正確性

●選手コメント

「練習中から勝負にも目の前の相手にも負けたくない気持ちが強くなった。球ぎわも意識している。周囲へも強く要求することが増えている。技術面でも更に早くプレーできるように次へのイメージ、スムーズなターンなどを意識するようになっている」(長谷川)

「練習中から勝負にこだわる気持ちが強くなり、目の前の相手には絶対に負けないことを強く意識するようになった。自分の目指す場所を意識した体作りも始めている」(村上)

以上のように選手は強く刺激を受け、帰国後は練習中からプレーで表現している。周囲の選手たちも負けじと成長を見せている相乗効果が見られた。私自身も外を知ることで、より自分たちを見ることができた。自信を持ち活動できる場所、不足している部分へどう行動を起こしていくかを考える起点をもらえたように感じている。

【課題】

スペインで育成年代の試合を多く観戦して感じたのが、コーチたちが指示をしなくても相手の出方によってどんどんプレーを変化させていっている選手たちを目の当たりにした。驚きであった。「自分で考え行動する」のはるか先を行っている…と感じざるをえなかった。U-18 選手を留学させたが、U-15 以下のカテゴリーでもこれからの取り組みとして、どうしていくべきか…と悩んでいたタイミングなのでなおさら驚いた。こういう課題についてもディスカッションできたのは良い機会となった。スペインでは「小さいころからの戦術の積み重ねがある」と聞いた。教えないで考えるように…ではなく、「どうプレーするのかをしつけられていく」の印象をうけた。その積み重ねにより、引き出しが増え、自分で考え行動していくにつながっているように解釈した。そして、自分たちの指導はどうだろうか…と考えがうつる。カテゴリーに合わせて考えを促し、自分たちで判断・決断をさせているだろうか。プロになる年代が若年化していく中で、選手たちを人としても自立させていかなければいけない。

●アカデミーダイレクターの総評

当初、個人留学への効果に不安を持っていたが、クラブの中に深く入り込める点で本当に良かったと感じた。選手にとっては初めての環境で「自分を出していく難しさ」をどう乗り越えていくのかを体験できた。その中でプレーで示し、カテゴリーをアップさせて TOP チーム B まで参加し、GM・監督に認めてもらったのは選手共々、自信になった。このように良ければステップアップの土壌ができていて、スムーズに実行されていく仕組みのでき上がりに違いを感じた。指導者交流で 3 名の方(GM・コーディネーター 2 名)とお話する機会もかなり貴重な時間となった。この仕組みの背景にある「育てる」ことへの思いが詰まっているように感じた。人・選手を育成していくことへの情熱の話、プレーモデル、それを実現させるメソッド、自分たちが大切に考えているタレントの定義について共感できる部分が多々あり、自分たちが漠然と良い！と思っていたものを明確に持っていて、そこに向かって育成していく事に対し、仕組みが整備されている。すべてがつながっていた。育つスピードが自分たちからみると早く見えるのがスペインに来て感じたことであった。まず自分たちにできることを考え行動に移していくことから始めていきたい。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	カタールレ富山
■活動タイトル	カタールレ富山 U-13 ベトナム遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	ベトナム/ハノイ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-13
■活動期間	12月3日～9日

【活動報告詳細】

■活動目的

●教育

- (1) 成長著しい東南アジアサッカーでの戦いを経験し、世界への扉を開ける ※世代別日本代表ではアジアでの戦歴がひとつの選考基準
- (2) 海外遠征でしか味わえない日本と異なる環境(気候風土や文化、慣習、食事など)への耐性を身につける
- (3) ベトナムの歴史や社会、文化に触れ、豊かな感性を養う

●富山県の認知拡大

県民クラブとして富山県の重要関係国ベトナムでのサッカー大会に参加し、メディアや SNS を通じて活動内容を情報発信

■活動概要

県民クラブとして富山県の重要関係国ベトナムでのサッカー大会に参加し、メディアや SNS を通じて活動内容を情報発信

- (1) 強度の高い試合の実施
 - ・カタールレ富山、Vittele FC、HANOI FC、Con An HANOI FC の 4 クラブ総当たりの大会を実施
- (2) 現地工場+社会見学を通して、豊かな感性を刺激するプログラム
 - ・YKK の現地工場見学
 - ・アオザイを着てハノイ市内見学
- (3) 対戦チームとの懇親やサッカー教室を通じた日越交流
- (4) 事後学習
 - ・遠征の様子や学んだことを報告書(PPT)にまとめたものを所属学校に提出
 - ・代表者がスポンサー企業に表敬訪問を実施

■実施報告・成果

【成果】

今回大会では、スピードやパワー、テクニックに勝る現地チームと真剣勝負ができた事は貴重な経験となった。初めはベトナム選手の早い寄せ、強い球際に苦戦する場面が多くみられたが、試合が進む中で、対応や修正を繰り返すことで成長していく様子も感じられた。同時に、自分たちの長所で勝負するメンタリティーが求められることを体感できたことは今後生きてくると感じている。また、コミュニケーション能力の高さに加えて、積極的にプレーする意思の強さは見習うべきものであり、いかに日常の生活やトレーニングで基準を高めていけるかが今後の成長につながると感じた。今遠征で、言葉は分からずとも身振り手振りで心を通わせ、ベトナム語で挨拶を交わすなど国際交流は大きな経験となった。また、協賛企業への訪問や、現地邦人の子どもたちを対象にしたサッカー教室を実施する中で、サッカーに関わる多くの人々のサポートや応援があってこそそのスポーツ活動であることを実感し、プロを目指す競技者として、サッカーとこれからの自分との関わり方について考えるきっかけとなった。

【課題】

① 開催時期の検討

この時期(12月)はシーズン終了を迎えており、オフシーズンに入るため、遠征の成果を効果的に、また最大限に継続することが難しい。遠征後は、海外での高強度の試合や海外生活を通して、個人戦術やチーム戦術、サッカーへの向き合い方、モチベーションなどの基準が上がっているからこそ、あまり期間を空けずトレーニングや公式戦につなげることが最大成長につながるのではないかと感じた。気候や海外の受け入れ時期など、検討する件はあると思うが、シーズン前の2月下旬、3月初旬(春休み)、またはシーズン中の夏休み(7、8月)などに実施できれば、大きな成果につながるのではないかと考える。

② 事前ワークシート学習

事前にレクチャーはあるものの、自分たちでベトナムについて調べるワークシート学習をすることで、より興味・関心を持つことができ、ベトナムでのコミュニケーションや現地での生活が充実したものになると感じた。ベトナム語での挨拶、生活習慣、食文化、サッカー文化など多面的なテーマから主体的にアプローチすることで、能動的な活動につながると考える。

●アカデミーダイレクターの総評

感受性豊かな中学生年代に外国で異文化に触れ、日本とは違う環境の中で生活をする。異文化を理解しようとし、受け入れながら自分たちの考え方も理解してもらえるようにコミュニケーションを取るという機会は大変貴重な時間であった。また普段と違うサッカーの質の中でのプレーも貴重な時間。短期間であったが、その中で変化が見られたのが収穫であった。サッカーだけでなく社会見学なども実施できたのは人間教育を大切に考えている中では継続していきたい事項である。今後も人間教育を絡めながら継続実施していきたい。

活動写真





ツエーゲン金沢

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	ツエーゲン金沢
■活動タイトル	U-12 韓国遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	大韓民国/梁山
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-12
■活動期間	7月27日～8月4日

【活動報告詳細】

■活動目的

海外遠征を通じて異文化や環境を肌で感じ、知見を広げるとともに、海外チームと真剣勝負をすることで選手・指導者のレベルアップにつなげ、学んだことをクラブに還元する

■活動概要

韓国・梁山にて韓国のチームと親善試合と釜山の国際市場を観光

■実施報告・成果

【成果】

●ピッチ外

- コミュニケーションを図る姿勢に成長を感じた
- 自発的な言動が増えた

●ピッチ内

- 攻撃ではより相手を見て判断できるようになった
- 守備では能力の高い相手に対し、早い予測から相手の強みを出させない工夫が見られた

【課題】

●ピッチ外

- 多くの選手に自発的な言動がみられたが、数名はまだ受け身の姿勢の選手がいるのでその選手へのアプローチ

●ピッチ内

- 数名の選手は相手の強度があがると恐怖心を持ち、プレーに積極性がなくなる選手がいる

●アカデミーダイレクターの総評

本遠征では、空港までの移動やチェックイン、出国手続き等の場面において、可能な限り指導者が先導するのではなく、選手自身がチケットや標識を確認しながらスタッフを先導し、韓国まで無事に到着した。金海国際空港では換金も選手自ら実施し、初めての海外経験ながら、身振り手振りのジェスチャーや簡単な英語で意思疎通が可能であることを体感。また、ホテルスタッフ、食堂スタッフ、コンビニ店員、対戦相手の選手・スタッフ等、多くの関係者に対し、韓国語で挨拶を行い、積極的に異国の方々と交流を図る姿が見られた。言葉が通じない相手とも、「ジェスチャー」「表情」「心」によるコミュニケーションが成立することを実体験できたことは、選手の将来において大きな財産となるものと考える。

プレー面においては、日本国内では対戦機会の少ない、フィジカル(サイズ・スピード)で優れる韓国人選手との対峙が、選手にとって新たな刺激となった。韓国選手は高い運動能力と技術を有していましたが、判断能力や相手を外すアイデアにおいては、当チームが優れている場面も多く、自信にもつながった。

これらの経験により、選手たちは異国の地での試合を通じて視野を広げるとともに、自己への自信を深めることができた。遠征後は、プレーの向上だけでなく、トレーニングへの姿勢やスタッフとのコミュニケーションなど、「人」としての成長も顕著に感じられた。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	ツエーゲン金沢
■活動タイトル	第3回ツエーゲン金沢 J-league・U-11
■活動種別	国際大会主催
■実施場所(国/都市)	石川県金沢市
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-11
■活動期間	8月22日～24日

【活動報告詳細】

■活動目的

Jリーグクラブと海外クラブが参加し、サッカーを通じて異文化交流を深める大会を通じ、各選手の能力及びチーム力強化を図る

■活動概要

海外クラブ、Jリーグジュニアチーム、Jリーグスクール選抜でのリーグ戦
参加クラブ:東門城、アルビレックス新潟、カタレ富山、京都サンガ F.C.、セレッソ大阪、栃木SC、ツエーゲン金沢

■実施報告・成果

【成果】

- 様々な地域のJクラブと交流ができたこと。また、東門城倶楽部(台湾)との国際交流ができた
- 全チームのレベルが拮抗しており、質の高い試合ができた
- チームだけでなく、スクール選抜を入れることで様々な特徴のチームや選手の交流ができた
- 懇親会を実施し、国内外様々なチームの状況を共有できた
- 装飾、優勝チームへのトロフィー、優秀選手賞で大会の雰囲気を作り、全チームのモチベーションを保てた
- 全チームにテントやドリンクを提供し、熱中症対策ができた

【課題】

- レフェリーの質

●アカデミーダイレクターの総評

ジュニアチームであるツエーゲン金沢 U-12 ジュニアにとっては、遠征で他地域に出向くだけでなく、大会ホストとして運営に携われたことも大きな経験となり、人間的な成長にもつながったと感じている。
また、スクール選抜であるツエーゲン金沢 U-12 スーパーの選手たちにとって、北信越という地域柄、日常の中でこれほど強度の高い試合を経験する機会は多くありません。今大会で得た学びをそれぞれの所属チームに持ち帰り、石川県全体のレベルアップへとつなげてくれることを期待する。

さらに、本大会には海外チーム、ジュニアチーム、スクール選抜チームなど、様々な形態のチームが集った。他大会との差別化を図ることができ、遠方から参加されたチームにとっても、日常では得られない貴重な刺激を提供することができたものとする。

■活動写真





清水エスパルス

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	清水エスパルス
■活動タイトル	Glico Challenge Tour in Spain 2025
■活動種別	①海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	スペイン/バルセロナ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	8月26日～9月3日

【活動報告詳細】

■活動目的

このグリコチャレンジツアーは「将来日本を代表し、世界で活躍する選手の輩出に向けて、挑戦する機会の提供をし、今後の成長を促すこと。また大会を通じ、現状把握、課題の気づき、競技力向上の糧とすること。異文化を体験し順応するたくましさを身につけること」を目的に実施してきました。

■活動概要

「Glico Challenge Tour 2025 スペイン遠征」は、清水エスパルス U-14 を中心とした 20 名が参加し、8月26日から9月3日にかけてスペイン・バルセロナで開催した国際大会遠征です。FCバルセロナやマジョルカ、ゲンクなど欧州強豪と対戦し、3勝1分2敗で5位。異文化環境での生活や交流、ラ・リーガ観戦、文化学習を通じて、競技力だけでなく人間的成長を促す貴重な機会となりました。選手たちは挑戦と学びを重ね、「世界への第一歩」として大きな経験を得ました。

■実施報告・成果

【成果】

本遠征では、清水エスパルス U-14 の選手たちがスペイン・バルセロナで欧州強豪と対戦し、国際大会「Glico CUP」において高い競技レベルを体感しました。試合を通じて個々の技術・戦術理解の向上だけでなく、試合強度やプレッシャーの中での判断力、フィジカル・メンタル両面の課題を明確にできたことが成果です。また、現地クラブとの交流や異文化環境での生活を通じ、語学・マナー・主体性など「人間力」の成長も顕著に見られました。試合外でも栄養講習会や事前学習、現地での文化体験を実施し、自ら考え行動する姿勢が育まれました。SNS や映像配信などの広報面でも成果を上げ、クラブの育成活動の発信力強化にもつながりました。グリコグループをはじめ多くの支援のもと、安全かつ充実した環境で実施でき、選手たちが「世界を身近に感じ、自身の成長課題を自覚する」貴重な経験となりました。

【課題】

本遠征の課題として、まず競技面では、欧州のトップクラブとの対戦を通じて、試合強度・球際の圧力・プレースピードなど、世界基準とのギャップが明確になりました。個々の技術だけでなく、戦術理解・判断の速さ・チームとしてのプレッシングやビルドアップ精度など、総合的な戦う力の向上が求められます。また、短期間での試合過密日程による疲労蓄積も見られ、試合数やコンディション管理の最適化が課題となりました。生活面では、長時間移動や慣れない食環境への適応力に個人差があり、自己管理・準備力の重要性が再認識されました。さらに、試合外での主体的行動やチーム内コミュニケーションの質にもばらつきが見られ、海外での自律性・責任感を育む教育的サポートの強化が必要です。今後は、国内外での実践機会を継続的に設け、学びを次の成長段階につなげる仕組みづくりが求められます。

●アカデミーダイレクターの総評

今回もこの大会を開催でき、非常に良い経験ができました。FC バルセロナ、RCD マジョルカ、RCD エスパニョール、ベルギーの強豪ゲンクに加え、育成に定評のあるビジャレアル CF が参加。球際の激しさや勝負へのこだわりがチーム別に違い、指導者の声掛けも千差万別でそれを見られただけでも収穫があり新たな気づきができました。海外遠征はアカデミー選手には「百聞は一見にしかず」が、そのまま当てはまる貴重な体験ですので継続して行いたいと思います。ご支援ありがとうございました。

■活動写真





ジュビロ磐田

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	ジュビロ磐田
■活動タイトル	ジュビロ磐田 U-18 ドイツ遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	ドイツ/ボーフム
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-18
■活動期間	3月9日～18日

【活動報告詳細】

■活動目的

2024年3月にパートナーシップを提携した VfL ボーフムを訪問し交流を図る。

昨年は磐田で合同トレーニングを実施(U-15)し、今年はボーフムでトレーニングマッチを実施することで相互選手・スタッフの成長の機会とする。また近隣のブンデスリーガアカデミーとのトレーニングマッチを通じ、新シーズンへの準備の機会とする。

■活動概要

- ① トレーニングマッチ(3試合 vs VfL Bochum、Arminia Bielefeld、SC Paderborn)
- ② ブンデスリーガ観戦(2部:1.FC ケルン vs ダルムシュタット、1部:VfL ボーフム vs アイントラハト・フランクフルト)
- ③ デュッセルドルフ日本人学校訪問&交流
- ④ 観光(ドイツサッカーミュージアム、ケルン大聖堂)

■実施報告・成果

【成果】

U-18選手およびスタッフが異国の地で自分たちのフィロソフィを体現することができたこと。
また、様々なハプニングにも冷静に対応することができた。

【課題】

言葉の大切さを各自が感じた。最低限の英会話は必要。

●アカデミーダイレクターの総評

VfL ボーフムのオーガナイズが素晴らしく、オン・ザ・ピッチ、オフ・ザ・ピッチのいずれも充実した活動を行うことができた。選手たちはハードスケジュールの中でもクラブ理念に基づき活動することができた。ぜひ毎年実施したいと思わせる遠征であった。

■活動写真





藤枝MYFC

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	藤枝MYFC
■活動タイトル	スペインよりゲストコーチを招いたサッカークリニック
■活動種別	その他
■実施場所(国/都市)	日本/静岡県
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14、指導者
■活動期間	7月22日

【活動報告詳細】

■活動目的

- 海外の指導者と交流し、文化に触れることで、人間的な成長を促し、将来のキャリアにおいて海外でプレーする意識を持たせる。
- アカデミースタッフは指導方法や参考になるものを学び、クラブに落とし込む

■活動概要

- UEFA pro ライセンスコーチによるトレーニング
- 2025年7月22日(火) 藤枝MYFCサッカー場にて実施
- スタッフ7名、U-14選手21名が参加。地域の指導者9名が見学

■実施報告・成果

【成果】

- 数的優位、オフザボールのポジションチェンジを意識して取り組んだ
- 選手の向上心とクラブ愛が高まった
- 海外クラブとの接点づくり
- 地域の指導者との関係構築
- メディアも招き、取り組みの発信

【課題】

事前打合せを行い、1回のセッションとしては良かったのですが、海外クラブとのリレーションを深め、数日間実施する。さらには毎年定期化し、より踏み込んだ指導を受けることや、アカデミーフィロソフィの再構築に役立てることが必要だと感じた。

●アカデミーダイレクターの総評

スペインでは重点的に取り組まれている「ビルドアップ」をテーマにし、今回の内容はあえて先方に任せて行いました(藤枝MYFCからは選手データ、フォーメーション等基本データを共有)。普段同じテーマでトレーニング

を行っていますが、伝え方・メニューが違う中で選手の対応力とサッカー理解を養うこと、逆に共通点も見つけて、サッカーの原則の大切さも理解してくれる時間になったと思います。

指導してくれたコーチも、「自分は1回しか指導しないのでチームへの影響も考えて、基本的な内容を意識した」と配慮があり、フリーズやシンクロの数を抑えて、オーガナイズで意図を伝える工夫をしてきていました。選手たちも緊張から動きが硬かったですが、良い刺激になり、将来海外でプレーをするということが夢ではないという意識を持つ選手も出てきました。

今回の取り組みで、選手の意識向上やクラブとしてのつながりづくり(クリニック・海外遠征等)のきっかけとして大きな効果が見込まれると同時に、Jリーグの海外活動助成を地域の指導者にも見学してもらうことで、PRできたことも良かったと感じます。

活動に助成していただき、誠にありがとうございました。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	藤枝MYFC
■活動タイトル	U13 韓国遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	大韓民国/ソウル
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-13
■活動期間	8月3日～7日

【活動報告詳細】

■活動目的

- 海外の選手と交流し、文化に触れることで、人間的な成長を促し、将来のキャリアにおいて海外でプレーする意識を持たせるための足掛かりとして、一番身近な外国の韓国でのU-13遠征を決定
- 普段と違う相手との試合を経験し、選手の強化につなげる

■活動概要

- 試合、トレーニングマッチの実施（対戦相手:輔仁中学校、城南FC、FCソウル、富川FC）
- 選手同士の交流
- 文化施設の訪問

■実施報告・成果

【成果】

- 韓国トップクラスとの比較で、プロ選手育成の環境と獲得選手の基準見直し
- Kリーグアカデミーの調査、意見交換等親睦を深めることができた
- 選手が世界に目を向け、自分の現在地を肌で感じる事ができた
- 選手は普段と異なる環境に適応を試み、自立心・団結心が育つ機会になった
- 藤枝MYFCを海外にPRし、クラブ間交流・ビジネスチャンスにつなげるきっかけづくり
- スタッフは、海外遠征で必要な事項を精査し、現場での対応力・交渉力を学んだ
- スポンサーとの良好な関係の構築
- 他部署との連携もあり、協賛金などで参加者の金銭的負担が軽減できた

【課題】

- 旅行業者の選定(仕事の精度を事前に調査したい)
- 外国の味付け等苦戦する選手にどこまで配慮すべきかの線引き
- 定期的に行う為の財源の確保
- 重度のアレルギーを持つ選手(1名)への対応の難しさ

●アカデミーダイレクターの総評

今回 U-13 の遠征を実施したことは、選手の意識向上に有効であった。今後は、U-18 と両方行かせることで（別々の国）、競技力と意識の育成をさらに推し進めていきたい。

海外の選手や施設、育成事情を観ることにより、自クラブの現状を再確認し、そこから改善すべきものや、方向性の確認等、「クラブのストレッチ」にチャレンジする為の良い機会となった。

■活動写真





アスルクラロ沼津

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	アスルクラロ沼津
■活動タイトル	XIV NARDINO PREVIDI MEMORIAL 第 14 回ナルディーノ・プレヴィディ記念大会 参加
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	イタリア/サッスオーロ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-15
■活動期間	9月1日～8日

【活動報告詳細】

■活動目的

異なる環境や文化の中で競技・活動を行うことで、自分自身の視野を広げ、国際的な経験を積むとともに、世界の高いレベルの相手と交流・対戦することでサッカー選手としての成長につなげる。また、海外との交流を広げ、クラブの今後の海外展開へとつなげていく。

■活動概要

内容： 第 14 回ナルディーノ・プレヴィディ記念大会に参加
 場所： イタリア サッスオーロ Sassuolo(ボローニャ近郊)
 期間： 9月1日～9月8日
 大会期間： 9月3日～9月7日
 参加者： AS Roma、Sassuolo Calcio、FC Bologna、Modena Calcio、Canadian Selection、Parma Calcio、Hajduk Split、FC Helsingor (Denmark)、San Michele Calcio (Local team)

■実施報告・成果

【成果】

今回の遠征を通し、同世代の世界レベルの選手と試合をすることで選手たちは自分たちの現在地点を知ることができた。またクラブとしてもイタリアのサッカー文化に触れ、クラブとしてもっと成長しなくては世界に勝つことができないと強く感じた。

大会では 4 チームのグループリーグ(ローマ、カルピ、レジャーナ)を戦い、1 勝 2 敗のグループリーグ敗退で今大会の日程を終了した。

[試合結果： vs ローマ 0-9(負け) / vs カルピ 2-1(勝ち) / vs レジャーナ 0-5(負け)]

【課題】

■戦術・技術面

プレッシング耐性： イタリアの育成年代は守備の強度が高く、寄せの速さや体の寄せ方で苦しむことが多い。日本の細かいパス回しが封じられる場面が多いはず。

決定力不足： ゴール前でのシュート精度や思い切りの良さが足りず、チャンスを逃してしまう。

守備の個対個： イタリアのFW はフィジカルと駆け引きに長けており、1 対 1 で後手に回る場面が目立つ。

■フィジカル面

強さとスピードの差： 体格差だけでなく、球際の「当たりの強さ」や「切り替えの速さ」で後れを取る。
 持久力と強度の維持： 試合を通して高いインテンシティを維持する点で差が出やすい。

■メンタル面

積極性： 相手が強豪だと引いてしまい、自分たちのプレーを出せない。
 勝負への執念： 点を奪いに行く姿勢や守り切る気迫で相手との差を感じる。
 異文化への適応： 言葉や環境の違いに戸惑い、集中が切れる場面がある。

■チーム面

戦術理解度： 局面ごとの判断(プレスのかけどころ、ラインコントロールなど)に統一感が不足。
 役割意識： 試合の流れの中で「自分がやるべきこと」を瞬時に選べる選手が少ない。
 コミュニケーション： 試合中の声掛けや意思疎通が弱く、相手に主導権を握られやすい。

●アカデミーダイレクターの総評

選手たちは普段触れることない異国の文化、生活に接することができた。サッカーの面においても文化やプレースタイル、身体特性などが異なる中で、世界のハイレベルを体感することができたと考えている。この経験を日本での日常に還元し、選手としてのレベルアップ、また人としての成長につなげて今後の変化を継続的に加速させていくことで本遠征の意義が大きくなると考えている。

■活動写真





名古屋グランパス

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	名古屋グランパス
■活動タイトル	名古屋グランパス U-16 イタリア・ローマ遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	イタリア/ローマ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-16、U-15
■活動期間	3月22日～4月2日

【活動報告詳細】

■活動目的

- 「世界で通用し、日本を代表する選手の育成」で海外での試合経験で世界を知り現状を把握する
- 「トップチームで活躍する選手の育成」を目指し、海外のサッカー観を体感することで選手の大きな成長へつなげる。
- 異国文化に触れることで、知見や知恵の幅を広げ、人間形成および教育の一環とする。

■活動概要

名古屋グランパス U-16 は、2025年3月23日から4月2日までの7泊9日間、イタリア・ローマで遠征を実施しました。本遠征では、ASローマをはじめとする現地クラブとの親善試合やトレーニングを通じ、異なるサッカー環境の中で新たな刺激を受け、選手としての成長を促しました。また、異文化に触れる機会として、ASローマのプロコーチによる指導、同年代のアカデミー公式戦、セリエAの試合観戦、ローマ市内の観光、ピザ作り体験などを実施。サッカーを通じて国際的な視野を広げるだけでなく、多様な価値観に触れることで、選手としても人としても成長する貴重な経験となりました。

■実施報告・成果

【成果】

ローマ遠征を通じ、選手たちは日本とは異なるサッカー文化に触れ、プレーの強度やコンタクトの厳しさを体感する貴重な機会を得ました。丁寧なビルドアップから個の力で打開するスタイルや、激しいデュエルへの対応は、大きな刺激となりました。試合を重ねる中で、ピッチサイズやボールへの適応、審判とのコミュニケーションといった環境面でも前向きな変化が見られました。サッカー面だけでなく、食事や生活習慣といった文化の違いにも向き合ったことは、選手一人ひとりの視野を広げ、今後の成長を後押しする貴重な経験となりました。

【課題】

今回のローマ遠征では、イタリアの育成年代が見せる高いプレー強度や個人戦術に直面し、選手たちの課題がより明確になりました。ピッチ上では攻守のデュエルやゴール前での対応力に差が見られ、試合の中で駆け引きに慣れている相手に対し、受け身になる場面もありました。また、体調不良者もでた中で、自己管理や周囲への配慮といった行動面でも改善の余地が感じられました。異なる環境下で自らを律し、主体的に行動する力が今後の成長に向けた大きなテーマとなります。この経験を通じ、選手自身が意識すべきポイントを肌で感じ取れたことは、今後に向けた重要な一歩です。

●アカデミーダイレクターの総評

異なる文化、異なる強度の中で選手たちが過ごした9日間は、自身の立ち位置を知り、向き合う時間になったと感じています。ゴール前での個の力、コンタクトの強さなど、日本では得がたい経験に触れたことは大きな収穫でした。一方で、自己管理や周囲への意識といった行動面には今後への課題も見られました。こうした経験が、次の取り組みにどう生かされていくか。遠征の価値は、これからの歩みの中で本当の意味を持つてくると思います。

■活動写真





FC岐阜

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	FC岐阜
■活動タイトル	FC 岐阜 U-17 U-14 海外遠征(大韓民国)2025
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	大韓民国
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-17、U-16、U-14
■活動期間	8月4日～8日

【活動報告詳細】

■活動目的

- アカデミー目標「トップチームで活躍する選手育成」「社会で活躍する人材育成」を目指す
- 国内では経験できないタフなゲームを体感し、アカデミー選手たちの技術向上、勝負へのこだわり、たくましさを養う
- サッカーを通じた国際経験、異国文化、人種や歴史の違いに触れ、アカデミー選手たちの自立心を養い、今後の行動へ大きな刺激を与える
- 自己表現の苦手な FC 岐阜アカデミー選手たちの殻を破る大きなきっかけとしたい

■活動概要

- 親善試合、観光
- 観光ルート事前学習(観光ルートの検索と予定表の作成)
- 事前学習(韓国のサッカー選手との講習会(キム・ユゴン)と質疑応答・実用的な日常会話など)
- 事後活動(活動レポートの提出・パートナー企業への報告訪問・パートナー企業の職場見学)

■実施報告・成果

【成果】

今回の遠征には、高校2年生3名、高校1年生13名が帯同。出発にあたり「チャレンジし続けること」「自律すること」「自主的に行動すること」を確認し、中部国際空港を後にしました。

対戦いただいた4チームはいずれも非常に力のあるチームであり、韓国世代別代表選手を複数擁するチームや、前年度の韓国高校サッカー全国大会優勝校とも試合を行うことができました。どのチームも共通してフィジカルの強さや高さがあり、前線サイドには1対1に秀でた選手が多く配置されていました。そのような相手に対し、選手たちは強気なマンツーマンマークや丁寧なビルドアップに挑み続け、最後まで戦い抜くことができました。

失点は多くありましたが、その分、同年代のアジアトップレベル選手との1対1や数的不利の状況を繰り返し体験することができました。その中で適応力を高め、個人のベースアップが試合ごとに見られたことは大きな収穫です。攻撃面でも、単純な縦パスやいつもの仕かけでは相手の堅固な守備に阻まれる場面が多かったものの、選手たちは工夫を凝らし、連動した攻撃や勇気あるドリブルで打開を図りました。促す場面もありましたが、多くは自ら適応し、成長を示してくれました。チーム全体としても、仲間を思いやるプレーや姿勢、積極的なコミュニケーションが増え、パフォーマンス向上につながりました。今後は、ここで培った個人の成長をさらに磨き、チームとして理解すべきプレーを積み重ねていきたいと考えております。

ピッチ外では、当初は控えめで交流に踏み出せない選手も多かったです。しかし、こちらからの働きかけや、何より相手選手たちの試合後のフレンドリーな姿勢に刺激を受け、自ら積極的にコミュニケーションをとる姿が増えていきました。言葉の壁はありましたが、必要な言葉を自ら学んだり、身振り手振りを交えたりすることで伝えようとする姿勢も見られました。さらに、時間や身だしなみを守ること、助け合うことなど、クラブのエンブレムを背負う者としての自覚や人と接する上で大切な振る舞いも学ぶことができました。もちろん未熟で失敗もありますが、根気強く指導を続け、一人前の人間として成長できるよう寄り添っていきたく思います。

今回の遠征を通じて、選手たちはピッチ内外で多くの学びと刺激を得ました。そして「さらに成長したい」「日々の基準を上げたい」という声が自らの口から出るようになりました。ここから彼らが大きく飛躍していくきっかけを作れたと強く感じております。改めて、この素晴らしい環境と機会を与えてくださったクラブ、スポンサーの皆様にご心より感謝申し上げます。

【課題】

1. 競技面

■対人強度・フィジカル対応：韓国チームは対人の強さや球際の激しさに特徴があり、日本の選手にとっては普段経験しにくい「強度の高いプレー」への適応が求められました。対応しきれない場面も見られましたが、貴重な経験となり、今後の成長につながる課題が明確になりました

■試合展開のスピード：攻守の切り替え、特に縦に速い攻撃への対応が鍵となりました。守備組織をどこまで崩さず対応できるかが課題として浮き彫りになり、カウンターからクロスで失点する場面もありました。今後のトレーニングで改善できる余地が大きい部分です。

2. メンタル・心理面

■逆境時の粘り強さ：激しいコンタクトや判定への不満を感じる状況でも、感情的にならず主体的にプレーを続け、最後まで諦めない姿勢を見せた点は大きな評価ポイントです。一方で、さらに安定して力を発揮できるようなメンタル面の強化が今後の課題となります。

3. 遠征の目的達成度

■「挑戦」の姿勢の徹底：今回の遠征を単なる親善試合で終わらせず、課題発見や個人の成長につなげられた点は収穫でした。ただし、線手によって姿勢に差が見られるのも事実であり、チーム全体で「挑戦」を共有できるよう、教育活動を通じて役割理解をさらに深めていく必要があります。

●アカデミーダイレクターの総評

今回の韓国遠征では、昨年よりもさらに強い相手との対戦を希望しました。よりタフな環境で、「韓国に来た」という実感を選手たちに得てもらいたかったからです。遠征の目的は、アカデミー選手の技術・身体能力・メンタルの強化に加え、今年は「主体的に挑むこと」「自分で考えて決断すること」をテーマに掲げて臨みました。

その意味では、選手たちはピッチ上で本当に主体的にプレーしてくれました。相手の身体能力の差やプレースタイルの違いを感じ取ると、目の色を変えて考え始める姿が印象的でした。与えられた時間を最大限に使い、挑戦し、失敗し、悩み、立ち向かい、そして成功を掴み取る場面を数多く見られました。

ジュニアユースは4試合を行い、3勝を挙げました。監督のテーマを体現し、たくましい姿を見せてくれました。特に3日目のソウル E-LAND 戦では、疲労が見える中 1-1 で拮抗しながらも、最後まで粘り強く守り抜き、カウンターから 2-1 で勝利を収めました。誰一人諦めず、疲労を口にせず戦い抜いた姿から、海外遠征の意義を強く感じました。

一方で、ユースは全敗という結果でした。しかし、これこそ「海外遠征の価値」だと考えています。世界は広く、今の努力量では到底戦えないことを肌で実感できたのは大きな学びでした。前半早々に 0-3 とされる試合もありましたが、選手たちは一切諦めず、自ら戦術や戦い方を修正しながら相手に挑み続けました。試合後には相手監督から「点差はつきましたが、本当に勉強になる試合でした」と言葉をいただきました。サッカーの文化や指導の違いが戦術に表れ、それが新鮮に映ったのだと思います。

「正しい負け方」という言葉があります。FC 岐阜でも、何点取られても最後まで戦い抜くメンタリティや姿勢を指導しています。その先にこそ「真の勝利」があると信じています。将来的には、どんな相手にも勝てるチームを作りたい。そして岐阜県から FC 岐阜トップチームを強くしてくれる選手を一人でも多く輩出することを目指し、活動を続けてまいります。

■活動写真





京都サンガ F.C.

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	京都サンガ F.C.
■活動タイトル	京都サンガ F.C. U-15 韓国遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	大韓民国/全州
■協力先	全北現代アカデミー、強豪高校
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-15
■活動期間	3月25日～29日

【活動報告詳細】

■活動目的

U-15年代(中学年代)で日本のライバル国である韓国遠征を通じ、プロ選手を目標としている選手個々人の成長と日本一を目指すチームの強化の重要な契機と考えています。また、全北現代は、名実ともに韓国トップのクラブチーム。現在、我がクラブOBであるパク・チソン氏が顧問として在籍していることもあり、双方のクラブにとって未来につながる契機と考えられます。

■活動概要

- 目的 選手や指導者の国際経験の機会創出
- 期間 3月25日(火)～29日(土) 4泊5日
- スケジュール
 - 3月25日(火) トレーニングマッチ
 - 3月26日(水) vs 全北現代 U-15、観光
 - 3月27日(水) vs 全北現代 U-16、全北現代クラブハウス・スタジアムツアー
 - 3月28日(金) vs 中央大付属高校 U-17
- 場所 韓国/全州 ※対戦相手、全北現代 U-15・U-16、強豪高校
- 参加者 選手 20名、スタッフ 4名

■実施報告・成果

【成果】

U-15年代での生活、文化、サッカーなど日常と違う海外経験ができたこと。また、チームで寝食をともにすることによって一体感を作ることができた。身体的・フィジカル的に上のチームを相手にどう戦うべきかを学ぶことができた。

【課題】

フィジカルをどう高めていくのかが一番の課題である。

●アカデミーダイレクターの総評

選手はもちろんスタッフの学びも多かった。全北現代アカデミースタッフのホスピタリティには本当に助けられた。Kリーグの審判を手配して下さった試合運営はもちろん、自チームのアカデミー選手も入れないトップチームのクラブハウスを惜しげもなく見学できるように準備して下さった点など感謝してもしきれない。懇親会での交流は忘れられない。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	京都サンガ F.C.
■活動タイトル	U-13 タイ遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	タイ/バンコク
■協力先	アサンプション
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-13
■活動期間	7月31日～8月6日

【活動報告詳細】

■活動目的

近年アジアで日本のライバルとして力を見せているタイへの遠征を通じ、プロ選手を目標としている選手個人の成長と日本一を目指すチームの強化の重要な契機と考えています。昨年の経験から、体格が大きくフィジカルの強いタイの選手たちを相手に「どこまでやれるか」が、ポイントと考える。また初の海外経験となる選手が多い中どのような環境でも適応できる力を養い、コミュニケーション力を養う場にする。

■活動概要

「CHONBURI U-13 INTERNATIONAL FOOTBALL INVITATION 2025」への参加

- 期間 2025年7月31日(木)～8月6日(火)
- 大会方式 全8チームでのグループリーグ戦と準決勝、決勝
- スケジュール
 - 8月1日(金) 前日トレーニング
 - 8月2日(土) 予選リーググループ B vs JOHOR DARUL TA'ZIM マレーシア
 - 8月2日(土) 予選リーググループ B vs MUANGTHONG UNITED タイ
 - 8月3日(日) 予選リーググループ B vs CHONBURI FC タイ
 - 8月4日(月) 準決勝 vs ASSUMPTION UNITED タイ
 - 8月4日(月) 決勝 vs PVF ACADEMY ベトナム
- 大会成績 優勝
- 個人賞 MVP:山田智裕(京都)、得点王:山本龍星(京都)

■実施報告・成果

【成果】

1. アジアレベルの大会を優勝することで大きな自信を得ることができた。
2. 日本と異なる環境の中で高いレベルのサッカーをするために、どのように生活しなければならないのか、どのような準備が必要なのかを実感することができた。
3. 他国の選手と戦うことで、必要なフィジカルの力が何かを知ることができた。
4. タイの人々のサポートを頂き、感謝の気持ちをはぐくむことができた。

【課題】

規則的な生活をおくる力、なんでも食べられる力、どんな状況にも動じることなく進める精神力を身につけること。

●アカデミーダイレクターの総評

2年目となるU-13 タイ遠征は、昨年の大会に比べ、出場国、試合環境、宿泊環境、移動環境、行政との取り組み、予算面などあらゆる面でレベルアップしていた。大会関係者には心から感謝したい。選手は、昨年に比べ個々の実力が高く、異国の地でも競技面、生活面ともに自ら動ける選手が多く、チームとしての一体感も一層高まった。スタッフは、4名中2名が初参加であり、タイ訪問も初であったが、準備段階から力を合わせて取り組むことができ、遠征中も常にコミュニケーションを絶やさず、結束が高まった。また、選手保護者とも、保護者代表とダイレクトに連絡が取れるよう連絡グループを作り現地での活動を写真、動画でタイムリーに共有することで、深い信頼関係を築くことができた。我がアカデミーのU-13からU-18までの海外経験の形ができつつあると感じている。

■活動写真



【活動3:基本情報】

■クラブ名	京都サンガF.C.
■活動タイトル	京都サンガF.C.U-18 韓国遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	大韓民国/蔚山
■協力先	蔚山現代
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-18、U-17
■活動期間	8月9日～13日

【活動報告詳細】

■活動目的

1. 選手、指導者の海外でのサッカーと生活を経験する
2. アジアのライバル国である韓国のトップクラスのチームと対戦することで、現在の力を確認する
3. プレミアリーグ昇格を目指すチームの一体感を高める

■活動概要

韓国Kリーグの蔚山現代、光州FC、浦項スティーラーズのU-18との試合を行う。

- 期間 2025年8月9日(土)～13日(水)
- スケジュール
 - 8月9日(土) トレーニング
 - 8月10日(日) 16:00 キックオフ vs 光州FC U-18 2-1
 - 8月11日(月) 17:00 キックオフ vs 蔚山現代FC U-18 2-2
 - 8月12日(日) 19:00 キックオフ vs 浦項スティーラーズU-18 4-1

■実施報告・成果

【成果】

1. アジアの強豪でありライバル国、韓国のトップレベルのチームと対戦し勝利(2勝1分)することで大きな自信を得ることができた。
2. チームで海外を経験することで、チーム力(一体感、組織力など)が向上した。
3. 他国の代表レベルの選手と戦うことで、高いインテンシティの中で、必要な技術、判断、フィジカルの力が何かを知ることができた。
4. 日本での環境がいかに恵まれているか知ることができた。

【課題】

1. 世界で戦い抜くための身体づくり、個のフィジカル能力を鍛える。
2. 世界で順応していくためのコミュニケーション能力や、環境の変化への適応能力を身に着ける。

●アカデミーダイレクターの総評

コロナ以降、また私がダイレクターに就任後(4シーズン目)、U-18では初の海外遠征となった。この度の海外遠征はJリーグの助成金なくしては不可能であった。心から感謝申し上げたい。

U-18韓国遠征は、韓国U-18世代のトップレベルのチームと対戦することができた。

結果は光州 FC(8 月の全国大会準優勝)、蔚山現代 FC(6 月の全国大会優勝)、浦項 FC(8 月の全国大会ベスト 8)に各々2-1、2-2、4-1 の成績となった。

試合内容はどの試合もお互いの特徴が出た見ごたえのある試合となった。韓国のチームは個のフィジカル能力が高くボールを保持しようとしていた。京都は前からアグレッシブにボールを奪いに行き、ボール奪取後はカウンターとポゼッションを状況に合わせて使い分け、運動量でも上回っていた。3 連戦を怪我人がいる中 3 連戦を戦い抜き、大きな成長を遂げることができた。

また、この機会を通し、選手保護者代表とダイレクトに連絡が取れるよう連絡グループを作り現地での活動を写真、動画でタイムリーに共有することで、深い信頼関係を築くことができた。

U-18 は韓国での経験を活かし今後ヨーロッパ遠征にチャレンジしてみたい。

■活動写真





【活動 1:基本情報】

■クラブ名	ガンバ大阪
■活動タイトル	AJAX FUTURE CUP 2025 参加
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	オランダ/アムステルダム
■協力先	アヤックス、Amsterdamsche Football Club(タウンクラブ)
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-17、U-16
■活動期間	4月14日～22日

【活動報告詳細】

■活動目的

世界で通じる選手を育成するために、世界トップレベルのクラブやヨーロッパの強豪チームと対戦し、世界基準を体感させるとともに、海外での環境・食事・文化に触れ合うことで、今後の人間形成に良い経験をすること。

■活動概要

提携先のオランダ・アヤックス、アムステルダムの招待を受け、大会参加およびトレーニングマッチ等の活動。

- 大会名 AJAX FUTURE CUP 2025 (結果:5位)
- 出場チーム
A グループ:アヤックス(オランダ)、パリ・サンジェルマン(フランス)、ガンバ大阪
B グループ:アンデルレヒト(ベルギー)、アスレチックビルバオ(スペイン)、バイエルン・ミュンヘン(ドイツ)
- トレーニングマッチ Amsterdamsche Football Club(オランダのタウンクラブ)
- 行程 4/14(月)出発、4/15(火)トレーニング、4/16(水)トレーニングマッチ、4/17(木)トレーニングと市内観光、4/18(金)トレーニング、4/19(土)・20(日) AJAX FUTURE CUP 2025 参加、4/21(月)帰国、4/22(火)午前到着

■実施報告・成果

【成果】

トレーニングマッチの対 AFC 戦 4-2 の勝利(城阪のハットトリック)/トレーニングマッチ&トレーニングでの大会レギュレーションの共有(キックインドリインのメリットデメリットなど)/大会順位決定戦の勝利(5位決定戦)/欧州のスピード、フィジカルに対してガンバ大阪のボールポゼッションしながらの攻撃(3人4人と連動した攻撃)/組織で守る守備(カバー、スライド)/対アヤックスのチャンスの数/GKを中心とした粘り強い守備/ピンチ時のプレスバックの反応、スピード/対パリ・サンジェルマンの後半の戦い方(2点ビハインド&体力低下でも戦うメンタル)/順位決定戦の4得点(嶋岡2、川野、城阪)/個の成長(川野の背後の抜け出し、村田の守備対応、野畑のビッグセーブ数、笠井の運動量、北井の安定感など)/身の回りの事に自主的に取り組めた(移動、チーム荷物管理、手洗い洗濯)/対戦相手、ホテルスタッフの方などへの積極的なコミュニケーション

【課題】

ゲームコントロール(対アヤックス、対パリ・サンジェルマンの立ち上がりの失点)/タッチアウト時の集中力(対アヤックス1失点目、一瞬の隙突かれた)/さらなるメンタル(試合に向かう強い気持ち、闘志)スピード、フィジカルに負けない強さ、判断/ボール奪取後のプレー(球離れの悪さ、判断、技術)/ドリインのアイデア(素早さ、判断)/首を振る数の差(相手は常に周りを見て情報を得ていた)/フィジカルの強い相手にフ

イジカルで挑んでいた／球際の強さ(足先だけでいくシーンが多かった)／攻守においての1対1(特に守備)／クロス
の守備&ゴール前の守備／トップスピードでの技術、判断／プレッシャーの中で発揮できる技術／1試合通
して素早い切り替えができていない／アタッキングサードの質、ゴール前の動きの質、プレーの判断、精度／先
発組とサブ組の力の差、サブ組の底上げの必要／選手個人へのフィードバック映像の早さ(試合中から個人へ
のフィードバック映像が作成されている)

●アカデミーダイレクターの総評

①世界基準を知る、それにより自分たちの実力を知る

予想はしていたものの特にフィジカル的な要素(スピード・パワー・サイズ)では、戸惑いを感じながらも徐々に
対応していくといったゲーム内容となりました。できること・できなかったことを実感できたことは選手たちにとつても非常に良い体験とな
りました。

②文化としてのフットボールを感じる、日本には分からない違いを感じる

大会期間中、全チーム同じホテルで、食事と一緒にいる時間も、身振り手振りでコミュニケーションをとる姿も見ら
れ、言葉(英語)の重要性を感じていたようです。

また、大会までの期間、トレーニングマッチや多くの異文化に触れることができました。

大会では、オランダサッカー協会とも連携し、ルールに関して様々なトライアルを行いました。

- 交代人数、回数に制限なし:交代は一人ずつ、交代間は10秒空ける、ピブスの受け渡しで交代
- 交代はプレー中も可能」FP交代時にプレーは止まらない、GK交代時は止める
- スローインの代わりにキックイン、ドリブルイン:フリーキック、ゴールキック、コーナーキックもドリブルスタートOK
- GKが手でボールを完全にコントロールする状態になってから8秒以内にプレーを開始する(残り5秒から審判が指
折りカウントダウンをする)
- イエローカードを受けた選手は4分間の退場となる
- 試合時間はインプレータイムのみ(20分×2だが実質30分×2くらいのプレー時間となった)

ルールの多くは、スピーディーさを求めるもので、切り替えの早さが求められ、試合中常にアラートな状態を保つことが求
められました。

今回、育成にも定評のあるアヤックスに招待を受けました。提携クラブということもあり、フィジカル測定や認知テスト等
を行い、継続してデータの情報交換・分析をしていくこととなります。できれば今後も継続して参加し、「世界基準」を体感し
ていければと考えています。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	ガンバ大阪
■活動タイトル	JINTAN U14 ASEAN Dream Football Tournament 2025 参加
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	タイ/バンコク
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	7月20日～27日

【活動報告詳細】

■活動目的

世界で通じる選手を育成するために、中学生年代で、海外での環境・食事・生活・サッカーと触れ合うことを経験する。また海外での環境・食事・文化に触れ合うことで今後の人間形成に良い経験をすること

■活動概要

- 大会名 Jintan U-14ASEAN Dream Football Tournament 2025
- 行程 7月20日(日)出発、7月21日～23日予選リーグ、7月24日市内観光、7月25日準決勝、7月26日決勝、帰国、7月27日午前到着
- その他の活動 観光(寺院等)・パートナーシップを結んでいるチョンブリFC 選手たちとの交流)

■実施報告・成果

【成果】

- 日本では経験できない環境を体験できた。(食事、気候、試合時間の変更 etc.)
- 1位トーナメント進出はできなかったが予選でレベルの高い3チームと対戦できたこと。
- 予選リーグ最終戦で勝てば1位の状況を経験できた(引き分けで3位)
- 個の重要性を確認できたこと。(1対1の攻守)
- 技術、判断の重要性を感じられた。(予測を含めたプレー)
- ゲームコントロールの必要性を感じられたこと。
- 勝ちたい、負けて悔しい気持ちが出せたこと。

【課題】

- ピッチや日常生活においても準備、予測、コミュニケーション、リーダーシップが必要だと感じられたこと
- 攻守一体化(予測を効かせ、意図的にポジションをとること。次のプレーへの準備、実行ができるようになること)
- 状況に応じたプレーの選択・技術
- 1対1で攻守ともに勝つこと(突破、守備の対応)
- アタッキングサードでの質、アイデア、関係性(強い相手に対して)

- セットプレーの守備(3失点)
- ゲームコントロール(前から守備?ブロックを引く?カウンターに出る?ボールを保持?押し上げ、戻り etc.)

●アカデミーダイレクターの総評

今回もタイでの大会に参加、東南アジアも最近では環境(芝生の状態等)も改善されてきており、また今回は人工芝も利用するなど整ってきているが、サッカーの国際大会を通じ、日常とは若干違うサッカーに触れることができた。(去年はスコールで更に重い芝生でのゲームで、そういった経験もできるかと思いましたが…)オフ・ザ・ピッチでも言語はもちろんのこと、食事や生活習慣等、異文化に触れることができたのは良かった。選手たちにとって、今後活かされる活動であったと思います。

■活動写真





セレッソ大阪

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	セレッソ大阪
■活動タイトル	セレッソ大阪 U-13 選抜 スペイン遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	スペイン/アルネド
■協力先	NSG GLOBAL HOLDINGS PTE. LTD.
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-13
■活動期間	9月8日～16日

【活動報告詳細】

■活動目的

【ON THE PITCH】

世界基準に挑み、自分の基準を高め、表現する

【OFF THE PITCH】

異国の文化や歴史に触れ、世界を取り入れ、相手チームや現地の方々と、共感する

■活動概要

【ON THE PITCH】

スペイン現地にてトレーニングや親善試合などを行い、第29回 U-13 アルネドトーナメントに出場。

【OFF THE PITCH】

遠征前から事前課題(アルネドについて調べる)に取り組み、遠征初日のホテルを実施。

遠征最終日に、FCバルセロナの本拠地を見学して世界のクラブの歴史を学ぶ。

■実施報告・成果

【成果】

- 攻撃 技術を武器にゴールに迫るプレーが増えた(ラインを破る・背中 & 背後の意識)
- 守備 連動したハイプレス+DFラインのコントロール(コンパクト)の意識
- 頭・体 自分の足でピッチに立とうとしている(数年間の積み上げ)

【課題】

- 攻撃 判断を伴う意図的な前進(DFラインから安定した持ち運びや中盤V0を經由しての攻撃や方向転換)奪ったボールをしっかりとマイボールにする
- 守備 正しいポジションからの粘り強い対応(スペースと人)失点の仕方(判断→決断&実行:状況理解・見るものを増やす)
- 頭・体 狡賢さ、身体の使い方、サッカー理解&状況理解

●アカデミーダイレクターの総評

昨年までの積み上げを踏まえ、今遠征の大目標で掲げた「観客を魅了する」というところまでは辿り着けなかったが、オン・ザ・ピッチは「世界基準に挑み、自分の基準を高め、表現する」、オフ・ザ・ピッチは「異国の文化や歴史に触れ、世界を取り入れ、相手チームや現地の方々と、共感する」という目標については、選手たちはよくトライしてくれた。

選手たちの表情を見ると、悔しい思いを噛み締めながら帰阪したことが1番の収穫であると感じる。予選リーグで戦った2チームがともに躍動しながらファイナルに進み輝かしく成長していく姿を間近で見て、「本当ならば、あの場所に自分たちが…」という思い、そして「1得点の重みと1失点の悔やみ、1プレーの重要性」を強く感じることができた大会だった。

また、サッカー理解、状況理解、いわゆる個人戦術においては大きな差を感じる。その状況下でどんなプレーが正解で、どんなプレーがダメなのかをこの年代においても理解し、実行している選手が多い。特に、状況が悪い時に、迷いなくプロフェッショナルファウルをし、それを認めているスタッフや観客の姿がそこにある。その背景には、そうした文化が時間をかけて醸成されてきたことを感じさせられた。

この経験値をしっかりと日本に持ち帰り、U-13年代としての成果と課題に対しての取り組みをいかに日常につなげることができるのか、選手のみならず、スタッフに課せられた大きな責務だと感じている。

また、この遠征は、多くの時間をかけて、ハナサカクラブをはじめ、クラブスタッフやたくさんの方々のサポートがあって実現していることに対する感謝の気持ち、セレッソ大阪のエムブレムの重さも選手とともに考えさせられる良い機会になった。

■活動写真





ヴィッセル神戸

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	ヴィッセル神戸
■活動タイトル	ヴィッセル神戸 U-15 ZED INTERNATIONAL LEAGUE への参加
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	エジプト/ギザ
■協力先	ZED FC、アストン・ヴィラ、コロンバス・クルー、ASEC ミモザ、アル・アハリ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-15
■活動期間	2月17日～24日

【活動報告詳細】

■活動目的

①選手の国際経験の習得

- 海外チームや選手と対戦・交流することで、選手の主体性を育み、国際的な競技基準を肌で感じる。
- 異なる環境下で、異なるスタイルのチームとの対戦を通じて、力を試し、課題を明確にすることで、競技レベルの引き上げにつなげる。

②異文化体験による人間性向上

- 海外ならではの文化や環境に触れることで、選手としてだけでなく、人間性の成長を促す。
- 異文化や多様性への理解を深め、柔軟な思考や適応力を養う。

③スタッフの経験値向上

- 世界を舞台に戦える選手を育成するために必要な基準を学び、指導力向上につなげる。
- チーム全体の成長を支えるための新たな視点や知識を得る。

■活動概要

ZED FC 主催の ZED INTERNATIONAL LEAGUE への参加

- 参加クラブ: ZED FC (エジプト)、ASTON VILLA (イングランド)、COLUMBUS CREW (アメリカ)、ASEC MIMOSAS (コートジボワール)、AL-AHLY SC (エジプト)、VISSEL KOBE (日本)
- 6 チーム総当たりリーグ戦
- 大会終了後にピラミッド、スフィンクス、大エジプト博物館を訪問

■実施報告・成果

【成果】

エジプト遠征での成果は3点挙げられる。まず1点目は、攻撃において身体能力(パワー、スピード、アジリティー)の高い相手に対しても、確かな基本技術の発揮、優位性の創出によって、意図的にビルドアップ、前進、突破とつなげることができた。

2点目は、対戦相手の身体能力の高さや海外選手ならではの球際の強さを感じたことで、自身、自チームのハードワーク、球際の攻防の基準値が上がったことである。今までに感じたことのない強度のチームや選手と対戦することで、基準を高く持つことができたことは、日本では感じることはできなかった成果の一つではないかと考える。

3点目は、中央を強固に守ってくる相手に対して、サイドからの攻撃の仕かけやクロスに対しての入り方、ゴール前の迫力を持ってプレーすることができた。得点シーンでもいくつか出たが、サイドからの得点も増えている。

3点挙げたが、この他にも通用したこと、していないことがいくつかあるので、今後のチームや個人の取り組みの中でチャレンジし、さらに遠征での成果を忘れずに上積みしながら成長を促したい。

【課題】

エジプト遠征での課題は3点挙げられる。まず1点目は、フィニッシュ技術の向上である。うまくビルドアップから前進、突破とつなげることができてきているが、フィニッシュゾーンでの、シュートやパスなどの精度が低くチャンスをものにすることができなかった。

2点目は、身体能力(パワー、スピード、アジリティー)の高い選手に対していかに戦うのか。守備に関しては、相手との間合いや対応方法(細かいポジショニングの修正…etc)、フィジカルコンタクトでの強さなど、個人戦術の面でも課題が残った。攻撃においては、1対1での仕かけるタイミングや、グループでの関わり、相手とのコンタクトをできるだけ少なくいかに突破につなげるかなど、より精度を上げていく必要があるとともにアイデア、創造性を持った攻撃の組み立てが必要だと感じた。

また、攻守においてボールが来る前の駆け引きやポジショニングに関しては、より細部にこだわってプレーをしないといけないと感じた。

3点目は、しっかりとボール保持から前進、突破につなげる攻撃をする中で、相手のハイプレスに対して適切な判断の元、プレーを実行することである。ONの選手はプレーの判断を様々な状況(エリア、相手のプレス状況、味方の位置、スペースなど)を認知した中で決断すること。OFFの選手は、サポートの種類(継続、前進、緊急など)を意識した中で状況に応じて、ポジショニングを取り、味方とのつながりを持ってプレーすることが必要であった。

●アカデミーダイレクターの総評

Jリーグのアカデミー活動助成制度を活用させていただき実施した今回のエジプト遠征は、ZED INTERNATIONAL LEAGUE への参加と異文化体験を通じて、選手・スタッフの成長を促す有意義な機会となった。

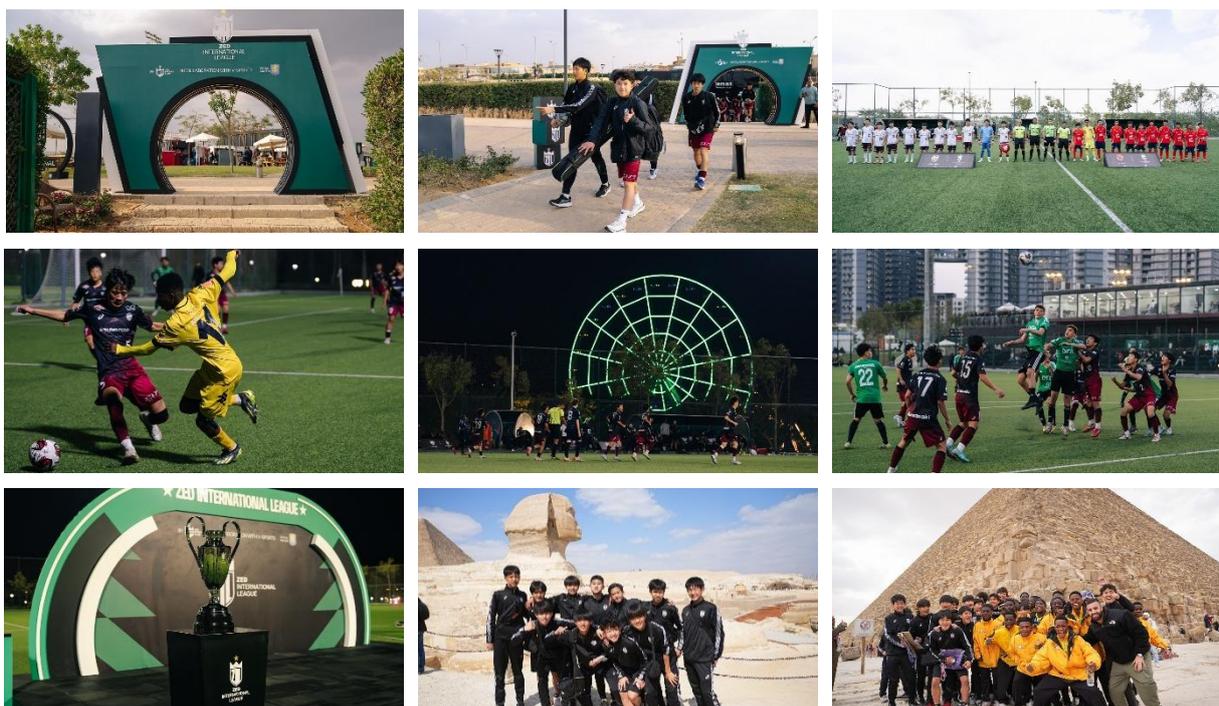
特に、アストン・ヴィラとの戦略的パートナーシップを背景に、ASEC ミモザ他、各大陸の強豪クラブとの対戦においては、世界基準の個人強度とチーム戦術を体感。

また、ピラミッド等の観光は歴史・文化への理解を深め、国際的な視野を広げる貴重な経験となった。

帰国後に即時実施したアンケートの結果においても、海外チームとの対戦は選手の強度や意識を高め、実力を知る良い機会となった、といったポジティブコメントが多数。一方で、移動時間や環境面での課題といった改善点も明らかになった。

今回の活動記録と評価を適切に保管し、次回以降の海外遠征をより有益なものにしたい。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	ヴィッセル神戸
■活動タイトル	ヴィッセル神戸 U-18 アメリカ遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	アメリカ/シアトル
■協力先	シアトル・サウンダーズ FC、シアトル大学、バラード FC
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-18
■活動期間	2月28日～3月10日

【活動報告詳細】

■活動目的

①選手の国際経験の習得

- 海外チームや選手と対戦・交流することで、選手の主体性を育み、国際的な競技基準を肌で感じる。
- 異なる環境下で、異なるスタイルのチームとの対戦を通じて力を試し、課題を明確にすることで、競技レベルの引き上げにつなげる。

②異文化体験による人間性向上

- 海外ならではの文化や環境に触れることで、選手としてだけでなく、人間性の成長を促す。
- 異文化や多様性への理解を深め、柔軟な思考や適応力を養う。

③スタッフの経験値向上

- 世界を舞台に戦える選手を育成するために必要な基準を学び、指導力向上につなげる。
- チーム全体の成長を支えるための新たな視点や知識を得る。

■活動概要

パートナーシップを締結しているシアトル・サウンダーズ FCをはじめ、シアトル大学やバラード FC との試合実施。シアトル・サウンダーズ FC クラブハウス見学や、選手によるプレゼン大会、スタッフ懇親会、MLS 観戦や観光も実施。

■実施報告・成果

【成果】

●フィールドプレーヤー

フィジカル能力が高くて強度高い相手に試合を行うことができ、日本ではなかなか経験できない充実したサッカー環境だった。前線から強度の高いプレスをかけてくる相手に対し、相手の狙いや矢印を感じながら相手を観てどこにスペースと優位性があるのかというこれまで我々が大事にしてきたことを、より時間がない中で選手たちが判断→実行することが必然的に求められる環境だった。そんな中、意図的にボールや相手を動かし、前進→突破まで再現性あるシーンが何度か見られ、徐々に相手の足を止める事も自分たちの流れにゲームをコントロールすることができた。

●ゴールキーパー

ビルドアップや守から攻での切り替えなどのディストリビューションでは相手よりも組み立てられた。またシュートストップや 1 対 1 の状況でも落ち着いて対応することができた場面もあった。

【課題】

●フィールドプレイヤー

個々の局面での1対1の強度やスピード、グループとしてのプレスバックからの挟み込みやスライド・チャレンジ&カバー、組織としてのコンパクトさやリスク管理の構造など、身体能力で優る相手と対等以上に戦うには様々な状況の中でよりアラートかつ的確にイメージを共有して対応する必要があることを痛感した。少しでも準備や対応を怠ったり遅れたりするとどうしても埋めきれないフィジカルの差がより致命的なエラーとしてゲームの中で起こってしまうことを今遠征の対戦相手から学ばせてもらうことができ、今後自分たちが今まで以上に基準高く様々なシチュエーションや相手に対応できるようにならなければならないと感じた。また両ゴール前でのゴールを奪う、ゴールを守るという部分でも、もっと個の質と回数にこだわりを持って今後も取り組んでいく必要があると感じた。

●ゴールキーパー

「スピードの速い、フィジカルの高い相手に対してどのような準備が必要か」ということ。オフザボールの際には相手を洞察して次のプレーを予測し、味方へコーチングをしておくことが必要。また、シュートモーションの速い相手やシュートを打つタイミングをずらしてくる相手に対して構えるタイミングを合わせる必要があると感じた。

●アカデミーダイレクターの総評

Jリーグアカデミー活動助成金を活用しシアトル遠征を実施。サッカー技術向上に加え、異文化体験を通じた人間形成、国際的な視野の育成を目的とした。選手はアメリカの文化・歴史・風習を学びプレゼン大会を実施。滞在期間中は英語での交流も積極的に行った。提携するシアトル・サウンダーズの充実した施設で練習を行い、クラブチームや大学生との試合を通じて、フィジカル差への対応を学んだ。食事面で課題が残るも、ホテルのジム等を活用し自主的なトレーニング機会も得た。サウンダーズ幹部とリーグ構造やアカデミー運営、スカウトに関する情報交換も実施。アンケート結果から、海外チームとの試合や異なる環境への対応経験や異文化交流などを成果とする一方、食事や対戦相手の最適化が課題として挙げられた。

■活動写真





奈良クラブ

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	奈良クラブ
■活動タイトル	U-13 スペイン遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	スペイン/バルセロナ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-13
■活動期間	12月3日～10日

【活動報告詳細】

■活動目的

本遠征は、奈良クラブアカデミーとして初めてのスペイン遠征となります。サッカー強豪国であるスペインにおいて、現地のトップレベルのアカデミーチームや強豪クラブと実際に対戦することで、日本とは異なるプレースタイル、試合の強度、戦術理解、判断スピードなどを肌で感じ、選手一人ひとりの「個」のレベルアップを図ることを目的としています。

また、世界基準の環境に身を置くことで、自身の現在地を客観的に知り、今後どのような基準で努力していくべきかを考えるきっかけとし、将来プロを目指す上での意識改革につなげていきます。

ピッチ外においては、現地の人々との交流や異文化体験を通して、言葉や習慣の違いに触れ、多様な価値観を受け入れる力やコミュニケーション能力の向上を目指します。海外という慣れない環境の中で、自ら考え行動する経験を積むことで、主体性・協調性・責任感といった人間力の育成にもつなげていきます。

本遠征を通じて、サッカー選手としてだけでなく、一人の人間として成長することを目指し、将来にわたって活きる経験とすることを目的としています。

■活動概要

12月3日～10日、スペイン・カタルーニャ州タラゴナで行われる「Cruyff Football Tournament」に出場。遠征では大会参加だけでなく、サクラダファミリアやカンブノウミュージアムなどを観光し、現地の人や文化と触れ合うプログラムを実施しながら、大会前にトレーニングマッチで調整し大会への準備もしっかりと行い大会に挑みます。

■実施報告・成果

【成果】

奈良クラブアカデミーとして2回目となる海外遠征はU-13がスペインに行きました。クラブとして2020年からエコメソッドを取り入れ、スペイン人のメソッドダイレクターを招聘しクラブとしてメソッドを構築してきました。その本場のスペインで強豪チームに対してどのような試合をするのかクラブとして楽しみにしておりました。各国の強豪クラブが集まった大会に参加しグループリーグではアヤックスに勝利しグループリーグを突破。決勝トーナメントではFCバルセロナにPK戦で勝利するという素晴らしい結果を残してくれました。決勝ではフィジカルの強い相手に圧倒され準優勝で大会を終えました。選手たちが普段から取り組んでいることを変わらずピッチでも表現してくれ、それが結果につながったことは選手たちにも大きな自信になったと思います。またクラブとしても今まで積み上げてきた成果を感じることができました。

【課題】

オーガナイズされたチームに対しては拮抗した試合ができましたが、個の能力が高い相手が多いチームに対する対応が課題というところが明確に出た大会でした。海外のチームとの対戦でよりその課題が浮き彫りに

なっただと思います。グループやチームとしての解決策や対応は高いレベルでできているので、より個にフォーカスした取り組みが必要ではないかと感じました。

今後は、これまで以上に「個」にフォーカスしたトレーニングやアプローチを強化し、1対1の強化、フィジカル面の向上、判断力・技術力の底上げを図ることで、チームとしての完成度だけでなく、世界基準で戦える個の育成にも取り組んでいく必要があると考えています。

●アカデミーダイレクターの総評

アカデミーとして2回目となる海外遠征でしたが、選手たちにとって非常に価値のある、かけがえのない経験となる遠征となりました。ピッチ内においては、日頃のトレーニングで積み重ねてきた成果を存分に発揮し、自分たちのサッカースタイルや狙いを随所に表現してくれたと感じています。試合を重ねるごとに、チャレンジする姿勢や成長の兆しも多く見られ、選手一人ひとりの可能性を強く感じることができました。

一方でピッチ外においては、海外という普段とは異なる環境の中での生活や行動を通じて、選手一人ひとりの「人」としての部分がより顕著に表れたと、スタッフからも多くの声が聞かれました。言葉や文化の違い、慣れない環境への適応など、簡単ではない状況の中でも、自ら考え行動し、仲間と協力しながら過ごす姿は、大きな成長の証であり、今回の海外遠征を実施した大きな成果の一つであると感じています。

本遠征で得た経験を、単なる思い出で終わらせるのではなく、今後のサッカー人生、さらには将来の自分自身の成長につながる「財産」として活かしてもらいたいと考えています。そのためにも、日常のトレーニングや生活の中で、この経験を振り返りながら次の目標へとつなげていってほしいと思います。

また、クラブとしても、選手たちにより多くの学びと成長の機会を提供できるよう、今後も継続的に海外遠征を実施し、世界に触れる機会を積極的に創出していきたいと考えています。

■活動写真





ガイナーレ鳥取

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	ガイナーレ鳥取
■活動タイトル	アジア国際ユースサッカーIN 鳥取 2025
■活動種別	国際大会主催
■実施場所(国/都市)	鳥取県米子市
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-16
■活動期間	7月11日～13日

【活動報告詳細】

■活動目的

地元空港直通便のある身近な海外チームとの試合機会を創出することで、選手、指導者が世界基準を体験する。かつ、大会を通して行われる国際交流を通じて、選手、指導者の成長を促進する。また、大会に参加する海外クラブの選手、指導者がJリーグや鳥取県への興味関心を高めることに寄与する。

■活動概要

●大会方式

- (1) 4チームによる総当たりのリーグ戦を行う
- (2) 試合時間:70分(前・後半35分)
- (3) ハーフタイムのインターバル:原則として10分
- (4) 延長戦は行わない
- (5) 同点の場合はペナルティキック(PK)方式により勝者を決する

●出場チーム

ホンコン・チャイナ U-16(香港)、チャイニーズ・タイペイ U-16(台湾)、ガイナーレ鳥取 U-16、鳥取県選抜 U-16

■実施報告・成果

【成果】

●競技

U-16年代でアジアの代表チームと対戦できたことは非常に良かった。1日1試合3日間の試合レギュレーションは、各チームの成長具合も見えて良かった。夕刻キックオフにしたことにより、熱中症の対策も行うことができ、選手のパフォーマンスも落ちることなく最後まで接戦した試合となった。

●交流

試合以外の交流をする場として歓迎レセプションと最終日の試合後のバーベキューパーティーを企画し、開催した。歓迎レセプションでは、席が近くなったアカデミー選手と香港の選手が交流をする場面も見られ、英語やスマートフォンを使ってコミュニケーションを取っていた。バーベキューパーティーでは香港・台湾チームにスイカ割り体験してもらったり、チームの選手同士が交流したりする場面もたくさん見られた。

●まとめ

大会形式で実施することによりチームも育成の場として活用ができ、なおかつ、海外チームとの対戦や交流ができることによりアカデミー選手たち、県内選手たちの育成に寄与できたと感じている。

【課題】

●オフ・ザ・ピッチ プログラム

バーベキューパーティー以外のプログラムを組むことがなかなかできず、海外チームが空き時間にホテル近くを散歩したり観光地へ行ったりする機会があった。そのような場面で地元の選手たちと交流する機会を作っても良かった。

●ハード面

球技場も活用して実施したが、ロッカールームがなかったり、トイレの導線が相手チームと重複したりとハード面でやや不足する場面があった。今回はチームの理解によって、それらはクリアにはなったが、今後は文化が違う国や、よりこだわるチームが参加した際には1つの障壁となるのではないかと考えている。

●移動

香港チームはスタジアムから30分圏内の地元の空港から入ってくる事ができた。台湾チームは関西国際空港経由して入ってきており、移動に4時間かかった。台湾と地元空港の国際定期便も就航しているが、台湾代表チームの交通規定によりLCCは利用できないため、関空からの来日・離日となり、移動の負担をかけることとなった。

●アカデミーダイレクターの総評

今大会は、U-16中心にU-15選手と合同で大会に参加した。ストレッチ&統合という観点やこの年代での国際大会・人から見られる環境の中でのプレーは、非常に良い経験となった。

サッカー面においては、勝負にこだわりつつも個人をどのように伸ばすか。スタッフも含め成長を感じる大会となった。同じアジア圏とはいえ、多岐にわたり微妙な違いもあり、感覚の違いをピッチで感じる事ができた事は選手にとって有意義なものになったと思う。

また、レセプションパーティーなどでの選手やコーチ陣の交流もとても良かった。慣れない中でもサッカーが好きな仲間同士の交流は素晴らしいと感じた。

今大会は、鳥取サッカー協会のスタッフの皆さんの尽力のおかげで無事終える事ができた。鳥取県サッカー協会や地域と良好な関係を築いていけるように今後もアカデミーとしても、地域の中での価値を高められるように努力をしていきたい。

国際感覚を養っていくことは、まだまだ足りていないと感じているので、今後もグローバルな視点も持ちつつ、アカデミーを前進させていきたい。

■活動写真





ファジアーノ岡山

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	ファジアーノ岡山
■活動タイトル	U-18 韓国遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	大韓民国/ソウル
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-18、U-17、U-16
■活動期間	8月12日～17日

【活動報告詳細】

■活動目的

日常で対戦することのない海外のチームとの試合経験によって、チームおよび個人の競技力向上に寄与すること。加えて、異文化を経験することにより、個人の持つ価値観の幅を広げること。

■活動概要

韓国、ソウルを拠点に、期間中同年代4チームとのトレーニングマッチ、K1リーグ観戦、観光等を実施した。他方、当初予定していた教育プログラムの一環としてのグループワークおよびプレゼンテーションはスケジュールや実施場所の問題で実施することができなかった。

■実施報告・成果

【成果】

プレミアリーグ後期に向けて夏のショートキャンプの位置付けでも行った本遠征。暑熱が危惧される中、仁川は気温も30℃前後と岡山よりも涼しく、クオリティを求めることができた。移動時間も短く時差もないことと、オフ後、後期再開に向けてコンディションの向上と戦術の浸透においても最適な遠征となり順調な強化の期間となった。また、遠征期間中アテンドしてくれた方々の配慮で何不自由のない遠征を実行でき、IDPの部分でもメンタル・社会性の部分で異文化に触れること、いつ、どこで、誰とでも自分(たち)らしいフットボールをすることの大切さを実体験から感じる機会となった。トレーニングマッチも同学年(Kリーグクラブ×3、大学×1)だったが、日本とスタイルが少し異なるが拮抗したゲームの中で、勝利のために一体感を持ってトライを続けることができた。(出場時間120～210分/人)またオフ・ザ・ピッチでも他国の習慣や食事にも触れたこと、歴史的建造物を見たり、市街地を散策したりする時間も設けることができ価値観を広げる機会にもなった。

【課題】

後期に向けての夏のショートキャンプの位置付けでこの期間での韓国遠征となったが、韓国は同日程で全国大会が開催されているので日程調整は課題。U-16国民スポーツ大会中国予選の日程を外しながらも2学期が始まる前(2025年は8月21日が始業式)の日程で行う必要性があった。韓国のより高いレベルのチームとのマッチメイクをするためには国スポメンバー以外で行くか、日程を変え欧州や南米などプレシーズン(2～3月)に計画することも視野に考える必要がある。

●アカデミーダイレクターの総評

コロナ禍において、この海外遠征はもとより、日常においても表現や行動が制限された期間を経て、そこで培えなかったものを取り返す意味で、U-18の年代で、ローコストで持続可能な遠征を求めて韓国遠征を実施してきた。「異国でのフットボールの強化」と「異文化に触れて新たな価値観と出会う」機会を3年間韓国遠征で創出したが、上記目的により、選手のピッチ内外での表現力や主体性、そして夏のショートキャンプという意味での強化においても、一定の成果は得られたと考えている。

他方、世界で活躍できる選手を育成・輩出していくためには、上記監督からの課題にもある通り、欧州または南米でよりハイレベルを経験させるための計画をしていきたい。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	ファジアーノ岡山
■活動タイトル	第 1 回 Coppa FAGIANO U-13
■活動種別	④国内大会主催(年間を通じたリーグ戦)
■実施場所(国/都市)	岡山県/浅口市、倉敷市
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-13
■活動期間	10月25日～26日

【活動報告詳細】

■活動目的

弊クラブ育成部として、岡山から世界で活躍できる選手や人格を育てるために、U-13 年代の選手の競技力向上を目指すため、または「ホームタウングロウン」の考え方からなる岡山県内のサッカーの普及と発展のための大会として、本大会を実施する。

■活動概要

日本国内のJクラブ、タウンクラブ、中体連の U-13 チームに、ホストチームであるファジアーノ岡山 U-13 を加えた 12 チームで 2 日間の大会を 2 会場で行う。3 チームずつの 4 グループに分けて 1 日目に予選リーグ、2 日目に順位決定リーグを行う(試合時間はすべて 60 分)。来年度第 2 回大会からは海外チームを招待予定。

■実施報告・成果

【成果】

ファジアーノ岡山育成部として初めて主催する大会、「Coppa FAGIANO U-13」を開催した。本大会の主旨は、岡山から世界で活躍できる選手や人格を育てること、そして岡山サッカーの発展と、参加選手のさらなるレベルアップを目指すことにあったため、大会テーマとして【真剣勝負】と【全員出場】を掲げ、運営にあたった。

大会は全順位が決まるレギュレーションを採用し、どのリーグでも最後まで負けられない戦いが繰り広げられる形となり、高いインテンシティの中で、自分のクオリティを発揮することが求められる大会となった他、全試合で全員出場をルール化することで、参加した選手全員が成長できる貴重な機会となった。

また、チーム集めやグラウンド確保、宿泊先確保、審判確保、パンフレットや大会ホームページ作成、映像配信、4 種チーム招待、トップチーム選手のメッセージ協力、協賛依頼、そして当日の運営と、多くのクラブスタッフが尽力し、クラブ外の多くの協力を得られた。アカデミー、強化、フロントが一体となり、協力しながら実現できた最高の大会であったと実感していることに加え、参加チームからも、この大会に対するクラブの熱意や運営のホスピタリティに感動したとの声を直接いただき、想像以上の成果を挙げられたと言える大会となった。

【課題】

大会後、クラブ内の振り返りミーティングで出た課題として、「2日間という期間とピッチ2面」という設定により、大会レギュレーションの順位決定方式がトーナメントではなくリーグになったこと、また予選リーグ1位のチームも1チームのみ1位リーグを戦えないレギュレーションとなったことは来年以降、日数を増やすか使用するピッチを増やすかの検討が必要である。また、大会に参加する選手たちがチームの垣根を越えた親睦機会をより作っていける環境を提供することが重要であると考え、来年以降、ホテルやグラウンドでの親睦機会を作る企画や環境を提供していきたい。そして、来年以降は海外チームを招待していきたいと考えている以上は、支出の面や価値発信の面をふまえても、より協賛を募っていくことが求められる。

最後に安心・安全の観点で、大会初日に選手同士の衝突により、会場に救急車を呼ぶ事象が発生した。真剣勝負の場において怪我はつきものではあり、今回も周辺の医療施設は事前に確認や案内をしていたものの、会場でのメディカル体制はより盤石なものを作っておく必要があると感じた。

●アカデミーダイレクターの総評

クラブとして初めて主催した今大会は、サッカーを「する」「みる」「ささえる」の三者を育む大会として、大きな成果をあげることができたと考えている。サッカーを「する」立場の選手たちにとっては、全国から強豪チームにご参加いただき、順位を決める真剣勝負の中、全員出場ですべての選手の成長に寄与できたと実感している。また、サッカーを「みる」立場として、選手のご家族をはじめとする関係者はもちろんのこと、岡山県内の4種チームを招待し、全国トップクラスの中学1年生のプレーを生で見させていただく機会を作ることができた。そして大会を「ささえる」立場である我々クラブスタッフにとっても、知恵を絞りノウハウを会得する機会として貴重な経験となった。来年以降は海外チームを招待し、より対象カテゴリーを増やしていきながら、岡山県全域の子どもたちや、サッカーを「する」「みる」「ささえる」の方々にとってより充実した機会や環境を提供していきたい。

■活動写真





サンフレッチェ広島

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	サンフレッチェ広島
■活動タイトル	2025年指導者留学FCケルン
■活動種別	海外活動(個人単位)
■実施場所(国/都市)	ドイツ/ケルン
■協力先	1.FCケルン
■対象者	
●対象チーム・主な年代	指導者
●対象者詳細	野田知、関原遼河、平繁龍一、井前尚、田邊友恵
■活動期間	2月7日～19日

【活動報告詳細】

■活動目的

1.FCケルンでの指導者研修を通して、指導者の力の向上とクラブに戻ってきてからのクラブスタッフ、選手への働きかけでクラブ全体の向上を目指す。

■活動概要

1.FCケルンのトップ～ジュニア年代と女子、フィジカルなどの視察とミーティングなどを実施。

■実施報告・成果

【成果】

カテゴリーの異なる監督、コーチ(指導者のみ)での研修となったがそれぞれの担当しているカテゴリーを中心に視察することができたため、自らの立場やチームの環境に置き換えて考察することができた。

また、指導者のみで研修を行えたことでスタッフの中には1.FCケルンの各指導者との交流の場も設けられたことでより考えを深められたと感じる。

日本とドイツとの環境の違いや日本より進んでいる部分(バイオバンディングにおけるトレーニングなど)に関してはより深く考えを伺うことができ帰国後の活動に活かしていけるものだと感じた。

日本とドイツの文化の違いや人間性の違いなど刺激を得ることで、自分自身のこれからの活動や人生において活かせるものも多くあると感じた。

【課題】

事前に研修先とのスケジュール調整がより必要であると感じた。研修先で時間を持て余すこともあり、その時間を埋められるように研修前にケルン側とミーティングを行い、練習だけでなく施設の見学などもっと細かく打ち合わせをして視察ができれば良かったと考える。

また突然練習が中止になり、グラウンドには行ったが視察ができないこともあったため滞在期間もより密にスケジュール調整、打ち合わせが必要であると感じた。

●アカデミーダイレクターの総評

成果や課題、報告書、研修後の話の中で「もっとこうすれば良かった」などの話がたくさんある。この課題は必ずなくなることはないが、少しでも研修の効果を上げるために、この課題を取り組んでいく。今回は初めて指導者だけの研修を行った。これまで、ケルンや海外研修に行ったことのないメンバーでの研修だった。特に監督をしている場合、シーズン中に研修に行くことが難しいので、プレシーズン期間中に実際開催することができた。いつかはアカデミーのスタッフ全員がこのような経験を積みたいと思っている。選手の成長のためには指導者の成長がなくてはならない。しっかりと続ける。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	サンフレッチェ広島
■活動タイトル	2025 年選手・指導者留学 FC ケルン
■活動種別	海外活動(個人単位)
■実施場所(国/都市)	ドイツ/ケルン
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-16、指導者
●対象者詳細	選手:高橋成海、富田雅翔、野口魁斗、指導者:駒野友一、岡本知剛
■活動期間	3月12日~21日

【活動報告詳細】

■活動目的

選手は 1.FC ケルンの選手とコミュニケーション、自己表現を率先してできるようにする。現時点で同世代の選手と一緒にトレーニングをしてフィジカル、技術の違いを体現して学ぶ。学んだことを今後の成長につなげてほしい。指導者は戦術、コーチング、トレーニング内容を見て聞いて今後活かしていきたい。

■活動概要

1.FC ケルンの U-16、17 トレーニングに参加する。トレーニング以外では 1.FC ケルンのトップ、アカデミーの試合観戦。

■実施報告・成果

【成果】

今の時点での海外同世代選手とのレベルの差と一緒にプレーをして学ぶことができたし、見て学ぶこともたくさんあり若い世代から経験できたことはいい刺激になった。この経験が日本に帰ってからの人としてもそうだしサッカーでも成長してほしい。そして他の選手にも学んだことを伝えてほしいしプレー面でも共有できれば、お互いが成長し相乗効果につながる。

【課題】

言語がわからないのでルールを理解するのに時間がかかってしまったり、選手とコミュニケーションを取れなかったりするので、若い頃から言語の勉強は必要だと感じた。サッカーでは止めて蹴るといった技術、シュートの意識が海外の選手に比べると低いと感じた。練習から、その意識を持ってやらないといけない。

●アカデミーダイレクターの総評

この留学は選手が伸びる大きな機会ととらえている。この留学を経て、プロになっている選手がすでに出てきている中で今年の留学に参加した選手がこれからどれくらい伸びるのかを楽しみしている。帰国してすぐに結果が出るわけではないが、野口、高橋、富田はチームの中でリーダーシップを発揮するようになってきた。正法地が直前の体調不良で参加できなかったのはとても残念に思う。参加メンバーは海外での経験をしっかりと

発揮して、行っていないメンバーにも良い影響が出ることを期待している。またスタッフも海外の環境を見ることで間違いなく成長する。

■活動写真



【活動3:基本情報】

■クラブ名	サンフレッチェ広島
■活動タイトル	2025年ジュニアユースU13ケルン遠征
■活動種別	①海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	ドイツ/ケルン
■協力先	1.FCケルン
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-13
■活動期間	8月18日~27日

【活動報告詳細】

■活動目的

海外での遠征(試合観戦、試合)を通じて世界基準を経験し、個人の成長とチームの成長を促す

■活動概要

ドイツ・ケルンでのトレーニングとトレーニングマッチの実施。プロチームのトレーニング見学、プロ選手との交流
ピッチ内だけでなく、海外の選手との交流、文化の違いを知る。
(ケルン市内観光の実施)

■実施報告・成果

【成果】

U-13年代でドイツでの海外経験・海外の選手と交流でき現所在地を知ることができたことは、有意義な時間であった。
食生活や言語、文化の違いに戸惑いながらも、現地の人との触れ合うことで貴重な経験となった。プロチーム施設見学やケルンU-19 vs マインツU-19の公式戦を観戦できたこと。サポーターを含めアカデミー選手がスタンドで応援している光景は、素晴らしいものだった。
成果としては、攻撃面で背後のアクションから裏をとりゴールに迫ることができた。優先順位を理解しプレーすることで、得点や多くのチャンスを作ることができた。また、ドイツの選手よりもキックという部分では長い距離も蹴れ、シュートでも遠い距離からでも振ることができていた。
守備ではアグレッシブにボールを奪いに行き、連続してプレスをかけていい奪い方→ゴールへ迫ることは非常に良かった。ドイツの同じ年代の選手と比べて、ラインアップやコンパクトにすること、グループでボールを奪いに行くことはドイツ選手よりできていた。
また、ドイツの育成サッカーを知るという点では、どの年代も「GKを含めたビルドアップ」をしっかりとしていた。後ろで数的優位を作りながら、チャンスがあれば背後を狙うが、基本的には全員でボールを大切にプレーしていた。
ケルンの育成年代のトレーニングでは、4ゴールや1回で終わらない、連続したトレーニングを行っていた。自然と「観る」「判断」「切り替え」の出るトレーニングが多かった。
そういったトレーニングを見学できたことも非常に良かった。

【課題】

日程次第ではあるが、トッパリーグのブンデスリーガをケルンのホームスタジアムで観戦させてあげたかった。
ピッチ外で、自主性を持ち、率先して物事を行うことは課題と感じた。ピッチ内では、グループとして組織としてはサッカーを上手く進めることができたが、個人でより活躍する選手を育成していかないといけない。
ケルンの選手は特徴を持っている選手が多い印象。個人の特徴を見て、スタッフもその選手にコーチングをしていた。「君の特徴はなんだ」と気づかせる、トライさせるアプローチをしていた。その中で基礎技術の徹底、身

体操作も含め、「止める」「蹴る」「運ぶ」ボールを扱いながら1人がボールに触れる時間の確保を行っていた。

守備では、「切り替え」がどのチームも早く、「1対1の球際」は強かった。

メンタル面の強さ、体格差にも立ち向かう精神面、ボールを奪いに行く迫力は見習わないといけない。プレー中も頭を休めている選手が、ほとんどケルンの選手にはいなかった。常に関わり続ける、逆にこちらは1回1回プレーが止まる選手があるので、常にボールがないとき・ある時間問わず「ボールに関わる」ことをもっと日常から習慣にしていけないといけない。

●アカデミーダイレクターの総評

「ケルンの選手はボールを扱いながら身体をスムーズに扱っていた。ぎこちなさがなかった。」

「トレーニング後はU-13選手と一緒にランチをした。英語でコミュニケーションをとる選手もいて、良い時間となった。食後のフリータイムでは日本のけん玉で盛り上がった。」

このように、ケルンでの刺激と活動が選手たちの力になっていると思う。

毎年、同じように行くが課題が似ていたりする中で、今年はこれができるなどの報告があり、成長を感じている。そして、毎回書いているが、1.FCケルンのスタッフのホスピタリティにいつもとても感謝している。急な日程変更にも柔軟に対応してもらい、包み隠さずアドバイスをしてくれるなど、遠征や活動を通じてとても嬉しく思う。選手たちもこれが普通ではなくて、特別なのだと、もし立場が変わってもこの経験を活かして活躍してほしいと思う。

■活動写真



【活動4:基本情報】

■クラブ名	サンフレッチェ広島
■活動タイトル	2025年ジュニアユースU14タイ遠征(10月・JSEインターナショナルカップ)
■活動種別	①海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	タイ/バンコク
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	10月16日~20日

【活動報告詳細】

■活動目的

海外での遠征(試合観戦、試合)を通じて世界基準を経験し、個人の成長とチームの成長を促す

■活動概要

タイでTR、大会への参加。ピッチ内だけでなく、海外の選手との交流、文化や飲食の違いを知る

■実施報告・成果

【成果】

コートの大ささ、相手の身体能力、気温や気候に慣れるまで時間がかかったが、暑さに対する対応もでき選手たちなりに策も考え、体は日が経つにつれ、しっかり動いた。体が動くようになると、背後の意識と前線プレスのスライドが改善され、相手ビルドアップへのジャンププレス、スライド。動けるようになったのでプレスバックがしっかりとでき、前線や中盤で引っ掛ける場面が増えた。攻撃では背後の意識が増えたことで、中間ラインで受ける回数も増え、狭いピッチでも相手を見て余裕を持つてできた。今大会のチームは人を取りに来る傾向が強いので、背後へ頭を越えらるともっと間延びさせてスペースができたかと思う。3日目以降はコンディションも上がり、気候や食事にも慣れ1番のパフォーマンスを出すことができた。攻守ともに、間延びがなくなり守備ではコンパクトフィールド、攻撃ではセカンドの回収もうまくいき得点量産につながった。結果的には2位で大会を終えることができた。

【課題】

初日から気温と湿度が高くほとんどの選手が動けていなかった。コートが横50m×縦95mと非常に狭く、縦に早いゲーム展開。普段より個人での打開や守る能力が必要となり、その差が失点に現れてしまった。特に1日目は、コートが狭く前線プレスが強い相手背後にスペースがあったが、中々良いボールが供給されず前線で引っかかるシーンが目立った。2日目以降も、35℃の気温で熱中症になり、離脱する選手もいて100分近い出場時間の選手は、能力のある選手に対してついていくことができず、失点を重ねてしまった。日数が経っても、特に湿度と食事に対して克服できない選手はなかなか試合で活躍することができなかった。

●アカデミーダイレクターの総評

「最初の試合で負けてしまう」

だいたい日本のチームが海外に行くと最初の試合で負けてしまって、後から力を発揮できるようになるという報告を受ける。環境になれることがとても大切、この順応する力を経験でつけていきたい。今メンバーはこの経験をしっかりと自分のものにして成長を期待する。また指導者もしっかりと経験を積んで成長してほしい。

また、野津田選手が訪問してくれた。海外で活躍している先輩にあえて話げできたことは彼らにとって、プロ選手・海外で活躍することが少しは身近に感じられる良い機会になった。サンフレッチェ広島で育った選手がこ

のように積極的に会いに来てくれることはとても嬉しく、本人が来てくれたのにも感謝。そして、野津田選手に関わった今までの指導者の方たちにもとても感謝したい。

■活動写真





徳島ヴォルティス

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	徳島ヴォルティス
■活動タイトル	U-14 カンボジア遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	カンボジア/シェムリアップ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	7月22日～28日

【活動報告詳細】

■活動目的

海外遠征を通して、選手育成と海外での交流を目的とする。普段経験することのできない環境での試合・生活を通して人間力を向上させる。

■活動概要

①国際親善試合(3 試合)

②ミッション教育プログラム

少人数グループに分かれ、与えられたミッションに挑む。

言語や環境が違う中で、どうやって情報収集し解答を導くかを工夫して行う。

■実施報告・成果

【成果】

カンボジアとタイの紛争発生により、途中帰国となりました。短い期間となりましたが、参加できたことはとても良かったと感じています。

国際親善試合を1試合行いました。海外の選手と戦うこと、また、スタジアムでの観客入りの試合、試合前の国歌斉唱など多くのことを経験できました。

夜にはウェルカムパーティを開催していただき、アンコールタイガーFCの選手たちと交流しました。言葉の通じない中で、ジェスチャー等で積極的に行動していたことは良かったと思います。

全体を通して、飛行機の長距離移動や、現地での食事も含めて、選手たちには多くの刺激になりました。海外が初めてで不安な選手もいたと思いますが、改めて実施できたことは本当に良かったと思います。

【課題】

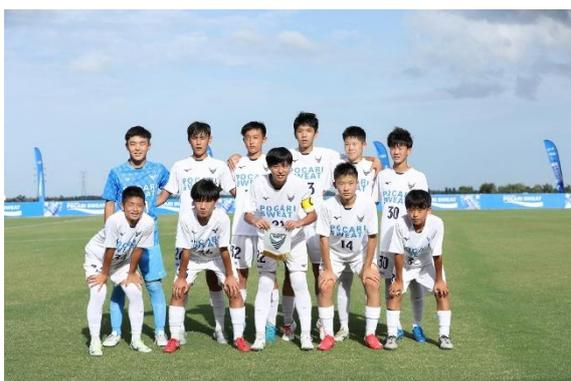
食事において選手たちが食べられる環境作りが必要。

移動時間を考慮したスケジュール管理。

●アカデミーダイレクターの総評

事前の準備から時間をかけていただけに、国際紛争のイレギュラーで、途中帰国を決断したことは残念ではありましたが、皆が安全に帰国でき、たくさんの人に支えられての遠征になりました。サッカーの部分だけでなく、人間形成に働きかけるきっかけになってくれればと思います。帰国してからの取り組みも大事にできていて、継続してアジア遠征を実施していきたいとスタッフとも振り返っています。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	徳島ヴォルティス
■活動タイトル	徳島ヴォルティスユース タイ遠征 (「U-17 TOKUSHIMA VORTIS BANGKOK CAMP2025」参加)
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	タイ/バンコク
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-16、U-17
■活動期間	8月20日～25日

【活動報告詳細】

■活動目的

アジアの舞台で本気の戦いをする中で、課題を抽出し、日常の基準を再構築する。
また、非日常の中でオン・ザ・ピッチ、オフ・ザ・ピッチともにより遅くなるきっかけとする。

■活動概要

現地で大会に参加し海外で真剣勝負をするとともにトレーニングマッチも組み、参加メンバー全員に海外選手との対戦経験を積ませる。また、企業訪問を通じ、選手とクラブをつなぐものをより強固にし、クラブ力向上につなげる。

参加大会: JSE INTERNATIONAL FOOTBALL FESTIVAL 2025 (12チームが参加。2グループに分けたグループステージと決勝トーナメント)

■実施報告・成果

【成果】

普段なかなか公式戦等に主力として戦えていない選手たちがチームの中心として、ピッチ内外ともに主体的な言動が多くあり、新たな一面の発見となった。日常では気がつきにくい課題の抽出もでき、有意義な時間を過ごせた。また、スポンサー様の協力を得る中で実施した遠征ということで、選手たちがスポンサー様をより身近に感じるとともに、改めて様々なサポートの上で自分たちが活動できているという教育的な部分でも気づきが多い遠征となった。

【課題】

異国のサッカーへの対応、適応力に欠けた。自分たちの目指すプレースタイル、ゲーム展開になりにくい相手が多く(プレーの連続性がない)、ストレスを溜めてしまい試合をうまくコントロールすることができなかった。選手たちが自分たちのスタイルを貫くということにこだわりを感じた一方、柔軟性に欠けていた部分もあった。

●アカデミーダイレクターの総評

ユースの年代で、オン・ザ・ピッチ、オフ・ザ・ピッチともに、よりたくましくなるきっかけを、ということアカデミーとして新たにチャレンジしたアジア遠征。すべて0からのスタートで着手する。スタッフと準備から熱量持って取り組み、結果とても充実した遠征となった。今回は初めての遠征先ということもあり、ユーススタッフ全員連れていくこともでき、無事故で実施できたことが良かった。

また、スポンサーとの関わりができ、近年のアカデミーの目標の1つであったものが一歩前進できた形になる。選手への教育面でのアプローチも年々深まってきていて、外国人とのコミュニケーションやその国の持つ特徴などを知ることができる良い機会となった。選手だけでなく、スタッフもいろいろと刺激を受ける1つの選択肢(遠征先)と考えられる遠征となった。

最後にこの「Jリーグアカデミー活動助成金」があったからこそ、海外遠征となります。

Jリーグの関係者様に御礼申し上げます。ありがとうございました。

■活動写真





愛媛FC

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	愛媛FC
■活動タイトル	韓国遠征 ソウル市近郊チームとの交流試合
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	韓国/ソウル近郊
■協力先	モッドン中学校、ジェヒョン中学校、ソックアン中学校、チェンドン中学校
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	3月25日～28日

【活動報告詳細】

■活動目的

●選手

国際経験を積む事により、その後の取り組みに対しての刺激を与える機会とする

●指導者

世界との差異を把握し、選手育成システム(環境・指導)に還元する機会とする

■活動概要

愛媛FC U-15 新居浜、3泊4日韓国遠征。チームとして初海外遠征を実施。ソウル近郊に滞在し、現地の同世代のチームと毎日試合を組み、最大4試合の試合を予定している。海外の異文化交流を通じて新しい価値観を学び、視野を広げること。海外の同世代の選手と対戦する経験を積むことで個人、チームの強化につながる機会を目指す。チームとして毎年実施する遠征として展開、発展できるようにしていくことも目的として、日本と韓国の交流を深める。

■実施報告・成果

【成果】

今回の韓国遠征では、同世代のトップレベルの選手たちと対戦する中で、自チームの現在地と足りない部分を選手・指導者ともに肌で感じる事ができました。特に個々の能力においては、テクニック、フィジカル、戦術理解、プレーの再現性など、どれをとっても相手を上回る場面は多くありませんでした。また、中学生年代における育成の取り組み方にも大きな違いがあり、日本とは異なるアプローチが成果として如実に表れていると感じました。

韓国では、低年齢からフィジカル強化にしっかりと取り組んでおり、それが選手の良好な姿勢や、広い視野を持ってプレーする力につながっていました。その結果として、相手選手たちはプレー中に相手をしっかりと観て、判断し、実行するという一連のプロセスを高いレベルで体現しており、「アクションでプレーする」場面を多く生み出していたのが印象的でした。

遠征を通じて、選手のサッカーに対する考え方と取り組み方にも変化が現れ、日々の練習から高い質を追求できるようになりました。選手だけでなく、指導者側もこの遠征で得た経験を現場に反映させていき、より高い基準の中で指導していけるように努めていきたいと思えます。

【課題】

韓国遠征で明らかになった課題は、テクニック・フィジカル・戦術理解・プレーの再現性といった個々の総合的な力の不足と、育成アプローチの違いです。これらを克服するためには、日々のトレーニングの「質」と「基準」を見直すことが必要です。具体的には、低年齢から姿勢づくりや身体の使い方に重点を置いたフィジカルトレーニングプログラムの構築。状況を観て判断し、実行する力を養うトレーニング設計。継続的な基礎技術の反復。個人とチームの戦術的再現性を高めるセッションの導入がより大事だと感じました。

この遠征を通じて指導者の基準、思考が改まるきっかけともなり、選手だけでなく指導者側の成長も選手の成長にはとても重要なものだと感じられました。選手・指導者ともに今回の学びを今後の成長につなげていけるよう取り組んでいきたいと思えます。

●アカデミーダイレクターの総評

選手の大半にとって、初めての海外経験であった。サッカーだけでなく異文化に触れたことは、今後の人生において大きな糧となると考える。遠征先でのマッチメイクにおいて、自チームより身体能力・技術・戦術で上回るチームと試合ができたことは、選手・指導者にとって非常に大きな収穫であった。遠征スケジュールの大部分が試合であったため、サッカー以外での異文化交流の機会も作る事ができれば、なお良かったと考える。ハード面については、日本(特に地方)が著しく遅れをとっていることを再認識させられた。微力ながら、行政・企業を巻き込み、ハード面の充実にも働きかける必要性を感じた遠征でもあった。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	愛媛FC
■活動タイトル	U - 14ASEAN Dream Football Tournament 2025
■活動種別	①海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	タイ/バンコク
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	7月20日～28日

【活動報告詳細】

■活動目的

- 選手： 国際経験を積む事により、その後の取り組みに対するの刺激を与える機会とする
 指導者： 世界との差異を把握し、選手育成システム(環境・指導)に還元する機会とする

■活動概要

この遠征は、海外の異文化交流を通じて新しい価値観を学び、視野を広げることが目的です。また、海外の同世代の選手と対戦する経験を積むことで、個人とチームの強化につながる機会を目指します。さらに、チームとして毎年実施する遠征として展開、発展できるようにしていくことも目的としています。

■実施報告・成果

【成果】

園国際空港(台湾)経由、スワンナブーム国際空港(タイ)に到着し、ホテル到着(日本時間午前3時)が深夜となりました。そういった環境下でサッカーをしていかないといけない状況は海外遠征ならではのことで、選手は良い経験となったと思います。ピッチ内では、相手の球際や目の前の試合に対する情熱の向け方は日本ではなかなか体感できないため、選手も肌感覚で掴めたことで、帰国後のプレーにも反映されています。ピッチ外では大会の中日を利用してタイの寺院に行き、大会後にも台湾の九份を訪れ、異国の文化に触れることができました。約9日間の長期遠征はなかなか経験できるものではなく、選手間の関係性も、学年の隔てなく雪解けしている様子が窺え、プールや食事などコミュニケーションを取る時間が多く取れました。気持ちがオープンになっていく選手も現れ、帰りの空港では異国の方にも積極的にコミュニケーションを取ろうとする選手がいたことは最大の成果です。

【課題】

今回事前学習という形で学ぶ機会があったが、言語という項目に関しては、もっと選手たちが挨拶などの簡単なことをスムーズ使えるように学ばせておく必要はあったかと思います。長旅での移動を経験できたことは良かったですが、大会の初日、2日目に関しては動きが重く、まるで対応できている様子ではなかったため、その状況の中でも対応できるように選手自身の取り組みやスタッフのアプローチの仕方を工夫していく必要がありました。ピッチ内の成果で記載した球際や目の前の試合に対する情熱の向け方に関しては、全然足りていな

い部分だったので、今後どう変わっていくかが楽しみです。スタッフの課題としては言語面でコミュニケーションを取れる人数が1人と少なかったことで、移動の中で不慮なアクシデントにも対応できたり、ピッチ内やピッチ外で容易にコミュニケーションが取れたりするスタッフを配置する必要があると感じました。また、もしそこができていないのであれば、保護者から選手を預かっている身として、きちんと責任が持てるように言語面の習得は必要かと思いました。

●アカデミーダイレクターの総評

約10年ぶりの海外遠征を実施するにあたり、近畿日本ツーリスト様には様々なサポートしていただき海外遠征を実施する事前の準備がスムーズにできたことはとてもありがたかったです。

遠征を行うにあたり、事前学習の実施を行うということも他のクラブの事例から弊クラブでも実施し多くの学びがあったことは良かったことでした。遠征前と遠征後では、選手のコミュニケーション力が上がった事で選手同士のコミュニケーションが増えたことが大きな変化だと感じました。プレー面では、以前より球際の粘り強さなどは以前より意識をしているように感じます。今回の海外での経験がプレーだけではなくパーソナリティの成長にもつながってほしいと思います。

■活動写真





FC今治

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	FC今治
■活動タイトル	U-13 タイ遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	タイ/チェンマイ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-13
■活動期間	12月10～16日

【活動報告詳細】

■活動目的

- 非日常の体験をすることで、フットボーラーとしても、人としても、幅を広げる
- 海外の異文化に触れて、新たな価値観を手に入れる
- 海外で試合をする際に考慮しなければならないことを学ぶ(オン・ザ・ピッチ、オフ・ザ・ピッチ両面)

■活動概要

- JSE INTERNATIONAL FOOTBALL FESTIVAL 2025 in Chiang Mai への参加
- チェンマイ市内観光

■実施報告・成果

【成果】

- 選手たちが、海外の文化に触れることによって、考え方の幅が広がったような発言が出てきた
- フィジカル能力高い相手とプレーすることによって、間合いを工夫したり、球際で強く当たったりできる場面が増えた
- 長時間移動の後の試合を体感して、コンディション管理の重要性を学べた
- 異なる食文化の中でのコンディション管理を学べた→日常から好き嫌いせずに食べることの重要性
- ピッチコンディションも劣悪な状況で、いかにプレーするかを学べた

【課題】

- 結果が出なかった(大会結果は1分4敗)。今回の遠征は招待を受けていたこともあり、大会側から期待されていた中での結果であったため、今後、自クラブの海外研修プロジェクトを推進するに当たっては、ネガティブな要素となってしまった。
- 大会の前日に入ったが(前夜の22:00着)、コンディションが整わなかった。それも含めて経験と思いきスケジュールを組んだが、上記のような結果となってしまったことを考慮すると、前々日入りの方が望ましかった。また、事前に大会のレベルを入念に調査することは必要不可欠であると感じた。

●アカデミーダイレクターの総評

今回のタイ遠征は 2025 からスタートした自クラブの海外研修プロジェクトの初手として実施した。まず、U-13 年代での実施ということは非常に有意義であると感じた。なぜならば、まだ選手たちの価値観が凝り固まっておらず、多様な文化に触れて、吸収できることが多いと感じたからである。出場した大会のレベルも我々のアカデミーにとっては、レベルが高く、サッカーの部分においても得られるものは多かった。また、タイへの移動距離も非常に学びが多い距離感であった。今回は北京でトランジットをしてチェンマイまで移動したが、トランジットで疲弊する選手も多かった。どのように移動時間を過ごして、コンディションを維持するかという観点でも、勉強になった選手が多いと思う。

■活動写真





アビスパ福岡

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	アビスパ福岡
■活動タイトル	アビスパ福岡 U-14 イングランド・ロンドン遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	イングランド/ロンドン
■協力先	アーセナル FC
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	2月16日～25日

【活動報告詳細】

■活動目的

国際経験を通して他国の文化に触れ、様々な価値観を感じながら言語を学び、知識を深め、人間性を高めること。また、他国のサッカーに触れて現地を確認するとともにリスペクトの精神を養い、アビスパ福岡の選手としてアジアでの見本となるべく、堂々とした立ち振舞いを意識し、行動と言葉に責任を持たせるような自己研鑽の場とする。

■活動概要

- アビスパ福岡 U-14 所属選手(23名)、スタッフ(4名)によるイングランド・ロンドン遠征
- アーセナル FC 主催の「The U-14 Hale End Cup 2025」への参加(6チームによる総当たりリーグ戦)
- トレーニングマッチ、プレミアリーグ観戦、ロンドン観光
- コーディネイト:株式会社ファンルーツ

■実施報告・成果

【成果】

- 参加チームは各チームの特徴やフィロソフィがあり、対戦してもフィジカルがある選手、テクニカルな選手、大きい選手や小さい選手の組み合わせなど、クラブとして選手を育成している印象を受けた。
- 全体的に感じたことは、育成に余裕があること、結果に左右されずに先を見据えて余裕を持って育成していると感じた。ポジションごとの役割や特徴を活かすことが明らかに見える。このようなことを感じることはできたのは、非常に大きな学びとなった。
- 海外遠征を行うことで、フィジカルの違いや日本では感じられない経験ができた。
- 最後まで離脱者もなく、やり切って出し切った。
- 言葉が通じない環境でも積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢は良かった。
- ホテルでの食事後にチームで片付けも積極的で、日常の当たり前を継続している成果でもあった。
- 観光のスケジュールも多くあったが、バス移動だけでなく、電車で移動できる環境でもあったので海外の日常を経験できた。
- 主催者のアーセナル FC のホスピタリティも学びが多かった。

【課題】

- ヨーロッパへの海外遠征を行うことで、長時間の飛行機移動からの時差対策(寝坊もあり)が必要だった。コンディションを作るうえでも大切なことを学んだ。
- 昼食をバスの中で食べるが多かったが、降りる時の整理整頓(人任せが多い)ができていない。
- 観光や電車移動の時の集団行動の自覚の低さや、主体性を持った行動にける選手が多かった。

- グラウンドの状況に慣れてなおらず、ぬかるんだ天然芝グラウンドで滑る選手が続出した。取替式のスパイクを持参した選手が0人というも、普段の環境下では考えることができていなかったことが浮き彫りになった。
- オン・ザ・ピッチでは、止める、蹴る、運ぶといった技術や、コントロールや相手を剥がした後の判断など、個人の攻撃の部分が足らなかった。また、守備では個人で奪い切る深いタックルやクロス対応、リクス管理の徹底など、個にフォーカスした個人スキルが不足していた。
- ピッチ内だけでなく、観光やホテル生活などの「日本の常識は世界では非常識」といった実体験を成長につなげていきたい。

●アカデミーダイレクターの総評

アビスパ福岡アカデミーとしては、初めてのイングランド・ロンドン遠征となりました。アビスパ福岡アカデミー出身の冨安健洋選手がアーセナルに所属して以来、ようやく実現することができました。近年はコロナ禍以降、あらゆる消費価格の高騰により、ヨーロッパ遠征を断念していましたが、クラブ全体で資金調達を計画し、多くのスポンサー、サポーターの皆様のご支援を賜り、Jリーグの助成金を活用し、この遠征を実施できたことに関係者の皆様に大変感謝しております。

今回の遠征では、アーセナル主催の Hale End CUP への出場を中心に、その前後の日程で、ヨーロッパの歴史ある強豪クラブと対戦しました。豪華なアカデミー施設を目の当たりにし、強烈なインパクトが心に刻まれたと思います。試合の合間には観光を入れてイングランドの文化に触れ、多くの学びや機会を得たことは、14歳の選手にとって大きな財産になったことでしょう。

選手やスタッフたちは、ワールドクラスの選手が生まれる環境に触れたことで、世界で戦うための道筋を描くことができました。一日でも早く世界で活躍できる選手に成長し、世界最高峰の舞台に立つためにも、日本に戻ってからの一日一日を疎かにせず、日常の基準を引き上げ、一気に成長スピードを上げていかなければなりません。一過性のものにせず、計画的に継続的に活動し、他カテゴリーや他クラブ、地域のクラブに波及するほどの熱量を持って取り組んでまいります。

■活動写真





ギラヴァンツ北九州

【活動 1:基本情報】

■Aaaaaaa クラブ名	ギラヴァンツ北九州
■活動タイトル	ギラヴァンツ北九州 U-12 韓国遠征
■活動種別	①海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	大韓民国/堤川市
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-12、U-11
■活動期間	7月24日～28日

【活動報告詳細】

■活動目的

- (1) 早い年代で自分と世界の同年代選手と比較する機会を作り、選手としての現状の力を感じてもらう
- (2) 海外の異文化を感じ、見聞を広める

■活動概要

- 「2025 堤川市 Summer フェスティバル」への参加 (1日 2～3 試合×3日間)
- 観光及びショッピング

■実施報告・成果

【成果】

韓国遠征では、ピッチ内外で多くの成果が見られた。ピッチ外では様々な人の支えを実感し、感謝の気持ちを持つことができた。また、食事や文化の違いに戸惑いながらも、徐々に適応していく変化が見られた点も大きな成長である。ピッチ内では、ゴールを奪う意識が高まり、シュートへの積極性や味方を追い越す動き、飛び出す意識が強くなった。さらに、試合を重ねるごとに球際での強さや攻守の切り替えの速さ、強度も向上していった。これらの経験は、今後の個人・チームの成長に大きくつながるものであり、遠征を通じて得た成果として非常に価値のあるものとなった。

【課題】

韓国遠征を通じて、いくつかの課題も明確になった。ピッチ外では、周囲に気を配る選手が少なく、自分のことだけで精一杯な様子が見られた。親元を離れての活動で慣れないが多かったと思うが、今後はより自立した準備や行動が求められ、個々の意識の変化が必要だと感じた。ピッチ内では、継続して ON のテクニックの質を向上させていく必要がある。また、動き出しのタイミングやキックの質(インパクト・距離・精度・種類)にも改善の余地がある。さらに、攻撃や守備に移る前の「OFF の準備」として、観る習慣や「何を観るべきか」の理解を深めていきたい。相手の状況を見てポジションを取ったり、駆け引きをしたりする力も今後の重要なテーマとなる。これらの課題に取り組むことで、さらなる成長が期待される。

●アカデミーダイレクターの総評

今回の遠征では、選手たちは慣れない環境の中で果敢に挑戦し、試合を重ねるごとに適応力を高め、たくましさを見せてくれました。国際舞台におけるスピード感や強度を体感したことは、選手たちにとって自身の立ち位置を認識する貴重な機会となり、同時に大きな成長の可能性を感じさせるものでした。ピッチ内外で得られた経験は、サッカー選手としての成長にとどまらず、人間的な成長にもつながる重要な学びであったと評価しております。

アカデミーでは、将来のトップチームを担う選手の育成のみならず、社会で活躍できる人材の育成にも力を注いでおります。今回の遠征で得た経験を日常のトレーニングに還元し、自立心・準備力・周囲への配慮を一層高めながら、さらなるレベルアップを目指して取り組んでまいります。クラブ一丸となり、この経験を次なる成長へと結び付け、アカデミーの発展、クラブ全体の強化につなげていきたいです。

■活動写真





サガン鳥栖

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	サガン鳥栖
■活動タイトル	JSE INTERNATIONAL FOOTBALL FESTIVAL 2025-U15/16
■活動種別	国際大会主催
■実施場所(国/都市)	タイ/バンコク
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-15
●対象者詳細	
■活動期間	8月21日～26日

【活動報告詳細】

■活動目的

海外遠征を行うことで、日本国内では決して体感できない経験をより選手たちに与え、サッカーという手段を利用して選手に経験させることが一番の目的です。また指導者についても国内外の様々な取り組みを肌で感じてもらい指導者としてのスキルアップにつながることを期待する。

■活動概要

●JSE INTERNATIONAL FOOTBALL FESTIVAL 2025 への参加

- 大会対象年代 U-15、U-16(中学3年～高校1年)
- 参加チーム数 8チーム(タイ、中国、日本、香港、マレーシアより参加)
- 大会方式 4チームごとのグループステージおよび決勝トーナメント

■実施報告・成果

【成果】

日本から出ることが初めての選手が多くサッカーだけでなく文化や習慣など異なるものに触れることができたことが選手たちのサッカー選手としても人間としても大きく幅を広げる経験になりました。加えて日本の清潔さ、丁寧さ、現在置かれている環境の素晴らしさに気づききっかけになったと思います。

国際大会では日本と違う環境に適応力が大きく求められました。ピッチ規格、不安定なピッチコンディション、レフリーのジャッジ基準、スケジュール変更への対応など、予測が難しい状況で準備をしなければならない経験ができた事は選手・チームとして肌感覚で海外の価値観を学べました。対戦チームも日本とは異なりチーム全体で協調性を持ってプレーをするよりは、それぞれの個性を活かしながら前に速く突破してくるチームが多かったです。対戦チームがU16で一つ上の学年のチームと真剣勝負ができたことはチームの強化や個人の強化にいい刺激になりました。フィジカルやパワー、スピードで上回る相手チームに対して、その部分でも引かないでぶつかることや、それ以外の駆け引きや準備、予測で上回るところを要求し体現してくれたと思います。

【課題】

初めての海外遠征になる選手が多い中で、準備をもっと徹底することが必要でした。ピッチコンディションや食事や水など慣れない環境への対応力が求められます。ピッチコンディションが悪い中で足を取られて滑る選手が続出する中、選手全員がポイント固定のスパイクしか持ってきておらずピッチへの対応ができませんでした。

また、食事や水は十分に整っていましたが、選手たちの体重をキープすることができませんでした。試合に勝つためのコンディションを考えると体重はわかりやすい指標の一つです。まずは、現地の食事の中でコンディショニングを維持するための最低の食事量の確保、補食の活用で、日本からふりかけやインスタントの味噌汁などを持ち込む工夫も必要だったと思います。

グループリーグは得失点差で2位になり決勝に進めませんでした。不戦勝のレギュレーションの問題もありますが、勝たなければいけない3戦目に勝ちきれなかったことが大きな要因でした。サッカーの中で決定力は永遠の課題になりますが、そこをいかに伸ばしていくか大きな課題と感じました。ただ、勝利を最後まで目指しプレーはいい知り続けた選手、チームの姿勢は表現できました。

●アカデミーダイレクターの総評

選手、チーム、サッカー選手、人間としても新たな発見、感覚を得ることができる貴重な海外遠征となりました。サッカーという素晴らしいスポーツで世界が通じ、つながることができることを体感させていただいたことをクラブ、ご協力いただいた方々に感謝申し上げます。また、日本だけの視点でなく、アジアの視点で自分の将来を想像することが今後できるようになるでしょう。現在のサガン鳥栖 U-15 唐津からアンダーカテゴリーの代表に選出されている選手はいませんが、これからそのレベルでプレーできる選手に成長してくれることを期待したいと思います。その時に今回の遠征の経験が生きてくることと思います。そして、世界やアジアが遠いものでなく、自分の可能性や選択肢を広めることできるものだと知り、日本で収まることのない視野の広い世界を見据えた人材になってくれることを期待しています。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	サガン鳥栖
■活動タイトル	サガン鳥栖 U-14 合同 スペイン遠征
■活動種別	①海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	スペイン/バルセロナ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14、U-13
●対象者詳細	U-14:22名、U-13:1名
■活動期間	11月26日～12月2日

【活動報告詳細】

■活動目的

海外遠征を行うことで、日本国内では決して体感できない経験をより選手たちに与え、サッカーという手段を利用して選手に経験させることが一番の目的です。また指導者についても国内外の様々な取り組みを肌で感じてもらい指導者としてのスキルアップにつながることを期待する。

■活動概要

SURF CUP INTERNATIONAL SALOU 2025 への参加

ビジャレアル FC U-14 など、30 か国以上が参加。エリートレベル-世界最高峰のアカデミーが参加しており、同世代のトップクラスの選手たちと対戦を実現可能な大会で予選ラウンド、決勝ラウンド、決勝で争われる。

■実施報告・成果

【成果】

今回の遠征に参加している選手たちの多くが、初めての海外経験でした。サッカーだけでなく海外の文化・価値観、食べ物に触れることでサッカー面だけではなく人としての幅や視野を広げる経験ができました。宿舎には様々な国のチーム、カテゴリーの選手たちがいました。選手たちは空き時間に慣れない英語で積極的にコミュニケーションをとろうとする姿を観る事もできました。大会全4試合、TRM1 試合のすべてのチームに対して「俊敏性」の部分では、常に通用する部分だった。ゴール前での仕かけるドリブルからの得点、細かいパスワークからの得点など海外の選手には通用する攻撃になっていた。また、素早いカウンターでは良い守備から良い攻撃が目立つ場面が多かった。引いて守るのではなく、チームとして狙いを持ち意図的にボールを奪えた瞬間での素早いカウンターからのゴールなど通用する場面があった。

【課題】

今大会を通じて海外の選手とサガン鳥栖の選手の違いを感じた部分として、表現力が感じられた。1試合の中でも局面の部分やゴールを決めた後、など喜びや悔しさを表現されていて、常に勝負にこだわりを持ってプレーする選手が多かった。選手だけではなくスタッフ・家族も同時に喜びや悔しさを共有していた。サガン鳥栖の選手は発信できる選手とそうでない選手がいます。ユース・トップチーム、そして海外で活躍するためには必要な要素だと感じた。海外の選手は日本の選手に比べると体格が大きい選手が多い。ボールを受ける前の

駆け引きや守備ではポジショニング・予測が重要だと感じた。その中でクロス守備では相手の駆け引きや予測が重要。R16での失点では相手のセットプレーでマークを外してしまい失点してしまった。ボールが来る前に相手と駆け引きをして大きい体格の選手に対して優位に立てるポジショニングで相手選手の自由を奪うこと。予測し少しでも早く反応すること。攻撃ではボールを受ける前に接触を避けるための優位なポジショニング、マークを外す動きタイミングが必要だと感じた。こうした駆け引きや予測を選手たちに伝えて指導していきたい。

●アカデミーダイレクターの総評

今大会を通じU-14世代の世界強豪クラブと対戦することで海外との基準を体感できたことはスタッフ・選手ともに大きな経験を積み重ねることができました。また、世界と日本のサッカー文化・価値観の違いを体感させていただいたことをクラブ、ご協力いただいた方々に感謝申し上げます。この海外遠征で選手たちの交流を現地で観させてもらい普段、交流しない選手同士が1つのチームとして活動する中で刺激を受けた選手たちが変化する過程を視察できたことはクラブにとって大きな成果と感じています。

今後クラブとして合同での遠征、活動を増やし選手、スタッフの成長を促すチャレンジを検討したいと考えています。選手たちには世界やアジアが遠いものでなく、自分の可能性や選択肢を広めることできるものだと知り、日本で収まることのない視野の広い世界を見据えた人材になってくれることを、大きく期待したい。

■活動写真





V・ファーレン長崎

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	V・ファーレン長崎
■活動タイトル	2025 V・VAREN Nagasaki Fes U-15
■活動種別	国内大会主催
■実施場所(国/都市)	長崎県
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-14
■活動期間	2月7日～9日

【活動報告詳細】

■活動目的

日常にないレベルが高い相手との試合を行うことで、選手の成長につなげる。県内のU-15の強化と県外のチームとの試合機会を増やすし長崎県全体のレベルを上げる。

■活動概要

V・ファーレン長崎が中心となり、Jリーグアカデミー組織、長崎県内のクラブ計16チームによる対戦。長崎、九州地域のレベル向上を図り、地域交流の架け橋となる場所を長崎で提供する。

■実施報告・成果

【成果】

Jクラブ中心に実施している。全体的なレベル向上を目指し、サッカーの本質をもっと感じられるような大会を目指したい。選手たちは日常にない相手との試合の中で闘うたびに成長を感じさせてくれた。

【課題】

もっと長崎県内の指導者や各カテゴリー別選手、保護者など他地域のクラブを観られるような環境を設定することに課題があがる。育成年代での海外クラブ対戦の重要性を考え、グローバルな視野で育成できるようにアプローチしていきたい！国際大会実施で国内クラブは、学校への配慮も考えることができる。移動や大会スケジュール自体も変更でき、有意義な時間を過ごすことができると思う。

●アカデミーダイレクターの総評

プレ大会を含め3回目となる島原フェスティバルでした。今回の参加チームもJクラブを中心に参加いただきました。グランド環境では天然芝3面、人工芝2面と環境も充実していた。ただ昨年とは違い2日間の実施となり試合数などバタバタ感がありました。今後、海外チームの招聘などグローバルな大会としていきたい。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	V・ファーレン長崎
■活動タイトル	V・ファーレン長崎 U-12 韓国遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	韓国/釜山市、昌原市
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-12
■活動期間	3月28日～4月2日

【活動報告詳細】

■活動目的

日韓交流を深める事とともに、スポーツ交流を通じて人としての成長を目標とする世界で活躍できる選手を育成することを目的とします。即座の習得が著しい年代で、日常にはない異国の文化と習慣を体感し、人としてサッカー選手として、世界を意識した選手育成につなげていく。

■活動概要

- 日程:2025/3/28(金)～4/2(水) 現地 4泊5日 ※フェリー1泊
- 会場・宿泊:昌原サッカーセンター
- 参加:釜山アイパーク、海雲台 FC
 - ⑩ 1日目 カメリアフェリー移動 博多港→釜山港 夜 18:30 着
 - ⑩ 2日目 AM 試合 20×3～4本/PM 試合 20×3～4本
 - ⑩ 3日目 AM 試合 20×3～4本/PM 試合 20×3～4本
 - ⑩ 4日目 AM 試合 20×3～4本/PM 試合 20×3～4本
 - ⑩ 5日目 AM 試合 20×3～4本/PM 観光&フェリー移動

■実施報告・成果

【成果】

●守備

- 【前線から】意図的な前線からの守備連動は今後上げていきたい。1stDF のスピードとそれに連動させる
- 【オーガナイズ】ボールを中心に逆サイドの連動の意識は低い。
- 【ゴール前】ゴール前の1対1粘りつよく

【課題】

韓国チームは躊躇なくダイレクトプレーの早さと精度があり多くの失点をした。攻撃ではボールは持てたがゴール前のシーンが少ない。個人技術ではプレッシャーの中での向上させていく。ボールの置き所で次にプレッシャーを受ける。

●攻撃

- 【ダイレクトプレー】今回の遠征では相手が上回っていた。ゴールに直結する。動きの速さとそこを狙えるキックの精度を学べた
- 【ハーフコート】ボールは持てた。突破、前進のために運ぶ。相手を動かすことを向上させる
- 【崩し、決定機】シュートを打つ。そのためにプレッシャーの中で狙ったところに蹴れるキックとそのコントロール向上。突破力をつける

●アカデミーダイレクターの総評

U-12 韓国釜山遠征実施にあたり、ご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございました。昨年に続き韓国遠征を継続でき感謝申し上げます。異国の文化や習慣、同年代選手との試合を経験させていただき、世界を見据えた今後の子どもたちの成長に、大きな影響を与えてくれたと感じました。

■活動写真



【活動 3:基本情報】

■クラブ名	V・ファーレン長崎
■活動タイトル	U-18 日韓親善交流大会
■活動種別	①海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	大韓民国/蔚山市
■協力先	釜山アイパーク、光州 FC、蔚山 HD FC
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-18
■活動期間	8月10日～15日

【活動報告詳細】

■活動目的

- 世界で活躍できる選手を育成するために、ピッチ内外において世界を体感する
- 九州プリンスリーグを勝ち抜き、プレミア昇格に向けて、日常にはない、インテンシティとデュエルの高い韓国Kリーグチームとの対戦で、個人・チーム強化を図る
- プレミア昇格戦では3日間で2試合予定。その試合を勝ち抜くために3日間連続の試合で技術、フィジカル、メンタルも含め、20名の選手のさらなる強化の場としたい

■活動概要

- 【遠征日程】 2025年8月10日～15日
- 【宿泊】蔚山シイラスティホテル@蔚山市
- 【対戦】釜山アイパーク、光州 FC、蔚山現代 FC@蔚山市内人工芝

■実施報告・成果

【成果】

体格やスピードを持った選手に対しての対戦するごとに強度に慣れてきた。攻撃では得点でき、得点に至るまでのつなぎや突破も出せた。守備ではボールの寄せなどの甘さがあったが判断とスピードを持ちチーム、個人として意図的に奪えるようになった。

【課題】

サッカーの本質に沿ってすべての強度を上げ、連動、連続を継続させる。積極的に得点を奪いにいく。相手を自由にさせない距離感での守備。攻守のスピードと強度をあげる。

●アカデミーダイレクターの総評

今回の韓国遠征においてJリーグのアカデミー活動助成金を活用させていただき誠にありがとうございます。世界で活躍できる選手を育成するために、ピッチ内外において世界を体感することができ、選手個人の成長が伺える遠征となりました。日常にはない、インテンシティとデュエルの高い韓国チームとの対戦でスピードとパ

ワーがある相手に対して課題が多く出ました。今回のこの経験を日常のトレーニングに活かせるように活動していきます。ありがとうございました。

■活動写真



【活動 4:基本情報】

■クラブ名	V・ファーレン長崎
■活動タイトル	V・ファーレン長崎 欧州視察
■活動種別	②海外活動(選手、指導者の個人、小グループ単位)
■協力先	シント＝トロイデン VV/Vfb シュツットガルト
■対象者	
●対象チーム・主な年代	指導者
●対象者詳細	アカデミーダイレクター:松波正信、トップチーム強化担当:千葉雅俊
■活動期間	10月30～11月9日

【活動報告詳細】

■活動目的

長崎から世界で活躍できる選手を育成するため、海外チームとの関係性構築を図り、選手育成法、環境を学びアカデミー選手、ポストユースの短期留学など、選手が成長できる施策を進める。

■活動概要

【日程:10月31日～11月9日】

- ① 10/31～11/4 ベルギーシント＝トロイデン VV
- ② 11/6～11/9 ドイツ・VfB シュツットガルト

【トップ・ポストユース(U-21)・アカデミーの視察】

- スタッフとの連携強化
- トレーニング施設の視察

■実施報告・成果

【成果】

- シント＝トロイデン VV 視察の要点
アカデミーからトップチームまで一貫したプレーモデルを設定し、個人戦術理解を段階的に育成。外国人選手への教育・生活支援体制が充実しており、クラブとして“人を育てる文化”が根づいている。
V・ファーレン長崎との人材交流や選手留学に対しても、積極的な意見交換がなされた。
- VfB シュツットガルト視察の要点
教育担当部門が明確に設置され、選手の学校・生活・人格形成を重視する体制が整っている。指導者間の情報共有が体系化され、アカデミーダイレクターを中心に各カテゴリーが有機的に連動。選手教育だけでなく、スタッフ育成における研修制度も充実している。

【課題】

長崎としても、アカデミー内での情報共有体制強化や、指導者研修制度の構築を進める必要性を再確認した。

両クラブに共通して、「人材育成=クラブ価値の向上」という考え方が根底にある。今後は、提携クラブとの定期的な情報交換。選手、コーチ留学制度の実現に向けた協議を進めたい。今回の視察は、単なる施設・環境視察にとどまらず、クラブ文化と育成思想を学ぶ貴重な機会となった。得られた知見をクラブ全体で共有し、長期的な育成ビジョン実現に活かしていく。

●アカデミーダイレクターの総評

今回のヨーロッパ視察では、日頃よりアカデミー事業への深いご理解と温かいご支援をいただき、ありがとうございます。シント＝トロイデン VV、Vfb シュツットガルトという欧州の育成現場を直接訪れることができたことは、私にとって大きな学びであり、V・ファーレン長崎アカデミーの今後を考えるうえで多くの示唆を得る貴重な機会となりました。今回の経験で得た気づきや視点をクラブの成長と選手育成のさらなる向上につなげていけるよう、今後も全力で取り組んでまいります。

■活動写真



【活動 5:基本情報】

■クラブ名	V・ファーレン長崎
■活動タイトル	U-18 韓国遠征 K League Asian Youth Championship
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	大韓民国/済州島
■協力先	釜山アイパーク、光州 FC、蔚山 HD FC
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-15、U-16、U-17
■活動期間	11月18日～22日

【活動報告詳細】

■活動目的

- 世界で活躍できる選手を育成するために、ピッチ内外において世界を体感する
- 日本では経験できないインテンシティとデュエルの高い世界の選手たちと対戦し、個人の成長とチーム強化を図る

■活動概要

- 【対象選手】 U-17(2008年1月1日以降生まれ)
- 【期間】 11月18日～22日(前後プラス1日がステイ期間)
- 【場所】 韓国、済州島
- 【参加チーム】 8チーム(韓国4、海外4)
- 【派遣人数】 23名(例:選手18名、スタッフ5名)
- 【ゲーム】 4試合、70分ゲーム

■実施報告・成果

【成果】

技術、フィニッシュの精度、得点へのこだわりを徹底することで変化が見られた。戦術、対戦相手の違いからフォーメーションを観て対応ができた。フィジカル、体格の差などはすぐには変わらないが選手自身を感じられた。メンタル/社会性、自分の行動に責任を持ち、チームでの役割もできた。国際線の乗り換え、外国人選手とのコミュニケーションも取ることができた。

【課題】

- 技術、フィニッシュの精度向上: 目的に応じたコントロールとキック。戦術、試合状況でのプレーの共有と選択
- フィジカル、体格の差: 日常の食生活と筋トレ
- 瞬発の差: ~5mのダッシュ力をつける
- メンタル/社会性、フロー: 今やるべきことに気づくこと、劣勢になった時の建設的な会話

●アカデミーダイレクターの総評

世界で活躍できる選手を育成するために、ピッチ内外において世界を体感することを目的とした今回の韓国遠征。日本では経験できないインテンシティとデュエルの高い選手たちと対戦し、個人の成長とチーム強化を図ることはできた。U-17年代では日常にはない、インテンシティとデュエルの中で技術、戦術、フィジカル、メンタルや社会性など明確な課題が観え今後に活かしたい。

■活動写真





ロアッソ熊本

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	ロアッソ熊本
■活動タイトル	ロアッソ熊本ユース タイ遠征
■活動種別	①海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	タイ/バンコク
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-17
■活動期間	10月15～21日

【活動報告詳細】

■活動目的

アカデミー所属選手の個々のレベルアップとチーム強化

■活動概要

ユース選手 17 名とスタッフ 3 名で 10 月 17 日～19 日にタイ国で開催される JSE INTERNATIONAL FESTIVAL 2025 に参加し、チームおよび個人(選手とスタッフ)の成長を促します。今回は EPG ユーロプラスに仲介していただき、現地でのサポートを依頼。また、10 月 15 日に福岡で前泊し、翌 16 日に福岡空港からバンコク入り。大会終了後 20 日の深夜便で日本時間 21 日朝に福岡空港に到着、最終日(20 日)に文化体験の時間も確保する。

■実施報告・成果

【成果】

●海外でのプレー経験

今回タイに行った多くの選手(7 割)が海外遠征を初めて経験する選手たちでした。ピッチ内外で自分たちの思い通りにいかない環境下でサッカーをすることは、遠征の前半では多少のストレスがあったと思いますが、遠征の後半では自発的に動ける選手が増えたことやある意味で割り切って生活する順応力、適応力を見ることができました。

●ゲームコントロール

日本で行われていたリーグ戦での課題、大会のレギュレーションや気候などを考慮して、ゲームをどのように進めていくかという部分で一定の成果をあげられることができました。攻守両面で相手コートでのプレー時間を増やし、立ち上がりの失点を減らすことができました。全 5 試合中、1 試合のみが立ち上がりに失点をしてしまいましたが、その他 4 試合は狙い通りの試合運びをすることができました。また、帰国後のゲームでも継続してその部分にアプローチしながら進めることができたのは、遠征での取り組みがあったからだと考えています。

【課題】

●テクニク

グラウンド状況が日本とは違って、ボールが想像以上に跳ねたり、止まったりすること。また、ハーフウェイラインの頭上にはワイヤーがあり、浮いたボールが当たる可能性があるという、難しい状況でした。どんなグラウンド状況でも適応できるテクニクレベルではないということが改めて明確になりました。今後、個々人が個人技術をレベルアップする事でチームとして更に高い水準、基準でプレーできるのではないかと感じました。

●相手を観ながらプレー

相手の状況を観ること、感じながらプレーすることができないことが多かったです。相手がどのように攻撃を仕掛けてくるか、守備ではどのエリアからプレッシャーをかけてくるのか。それを踏まえてどう闘うかを全体で共有することが十分ではなかったため、日常でのトレーニングやゲームで改善していく必要はあったと感じました。

●アカデミーダイレクターの総評

10月15日から20日まで、ユース(高校1、2年生)のメンバーにてタイ遠征を実施。いわゆるユースの2ndチーム的なメンバーで初めての海外に行く選手も多く、様々な経験を積むことができ、大変有意義な遠征となりました。TR及び試合環境では、タイトかつレギュラーなことがおこっても、そのことに対する対応力。また、暑熱環境でのコンディショニング調整、飲料水、食事面についても、メディカル、トレーナーからのアドバイスも受け、体重測定も毎日、実施し体調管理に努めるなど、日々のセルフコンディションの重要性も認識することができました。そのような中でも、予選ラウンドで敗退していたチームと決勝戦で再戦し、そのチームに対して勝利し、優勝することができたことは、選手、スタッフにとって大変、喜ばしく、メンタリティ面においても成長を感じ取ることができました。今回の遠征目的は、オン、オフともに選手自らがオーナーシップをとって行動する。自立していくために必要なことを感じて今後につなげていくということでした。その目的については、個人差はあるものの、達成することができました。また、今回の遠征では、ジュニアのスタッフを帯同させ、カテゴリー間をこえての学びもできたことは、スタッフ、クラブにとっても貴重な経験となりました。今後も引き続き、クラブ予算との兼ね合いもありますが、海外活動助成金を有効に活用して、選手、スタッフの成長につなげていきます。

■活動写真





大分トリニータ

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	大分トリニータ
■活動タイトル	大分トリニータU-17 韓国強化遠征
■活動種別	海外遠征(チーム単位)
■実施場所(国/都市)	大韓民国/ソウル
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-17、U-16、指導者
■活動期間	8月2日～7日

【活動報告詳細】

■活動目的

早い年代で異文化に触れることでサッカー選手として一人の人間としての成長に刺激を与えること(食事、言葉、生活など)。

※初海外遠征選手が多い。

■活動概要

5泊6日でソウル近郊の強豪チーム(Jinwee FC/FC ソウル/水原三星ブルーウィングス)との親善試合。異文化での対応能力、チームのフィロソフィである一体感、ハードワーク、アグレッシブ、諦めないを体現できる韓国で湧き上がるようなゲームを行い、今後に向けての成長につなげることが狙い。

■実施報告・成果

【成果】

スタッフが初海外引率、選手が初海外遠征の中で1、2年生の底上げ、個を成長させることをメインに企画、実行。強豪チームとマッチメイクしてもらい自分たちの現状がどうなのかを確認。フィジカル、スピードに勝る相手に対し果敢にチャレンジできたことは今後の大きな自信になったと思う。夏までの課題であった1対1の守備、ラインコントロールはまだまだやらなきゃいけないが、体も張って声を出して対応できたことは良かった。1年生が活躍してくれたので、後期の戦力として計算がたったことはチームとしても大きい。

【課題】

前から積極的にボールを奪いに行っても簡単に奪えない時にチームがバタバタして失点することが多かった。チャレンジはしているが、周りの選手のポジショニング、予測、駆け引きが甘く、簡単にやられてしまうことが多かった。試合毎に修正はできていたが、もっと高い意識と集中力、声かけでまとまって対応しないと日本でも簡単にやられてしまうので、はっきり課題が出たことは逆に良かったと思う。

●アカデミーダイレクターの総評

コロナ以来 U-18 の海外遠征が実現できて良かった。大分は田舎で真面目な選手が多く、自分の殻を破るためにも今回の海外遠征は有意義なものとなった。異文化で対応できない選手、できる選手で明らかにパフォーマンスが違ったり、細かな選手の部分が見えたりしたことは、今後の指導にも役立つと思う。帰国してからも選手の意識も変わりポジティブな選手が増えたので、まずは結果云々もあるが選手の変化が見えたことには手応えがあった。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	大分トリニータ
■活動タイトル	ベルギーシント＝トロイデン研修
■活動種別	海外活動(個人単位)
■実施場所(国/都市)	ベルギー/シント＝トロイデン
■協力先	シント＝トロイデン VV
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-15、指導者
●対象者詳細	AD:高田哲也/大分 U-15:大庭圭人/宇佐 U-15:西尾基希
■活動期間	8月26日～9月4日

【活動報告詳細】

■活動目的

早い年代で異文化に触れることでサッカー選手として一人の人間としての成長に刺激を与えること(食事、言葉、生活など)。ポテンシャルのある選手にヨーロッパのサッカーを体感させ、将来のトリニータにつなげたい。

■活動概要

7泊9日でベルギーのシント＝トロイデンにてU-16/U-18のTRに参加。異文化での対応能力、チームのフィロソフィである一体感、ハードワーク、アグレッシブ、諦めないことを体現しつつ、ベルギーで湧き上がるような経験をつみ、今後に向けての成長につなげることが狙い。

■実施報告・成果

【成果】

彼らがこの研修でどう成長するか？刺激を受けるか？非常に楽しみだった。二人ともどちらからというシャイで前に出るタイプではないがこの研修でひとまわり成長することに期待した。今二人とも伸びている最中でこの刺激をどう捉えるかで今後変わってくると思えるくらい良いタイミングだった。

● 大庭圭人(大分 U-15)FW

英語がわからずトレーニングの流れをうまく掴めなかったが、パスコン、ポゼッションではミスが少なくシンプルにプレーできていた。本来はドリブルが得意な選手だが、判断を速くして仲間の動きを見ながら判断できていた。もっと強引にドリブルしても良かったと思う。

● 西尾基希(宇佐 U-15)V0

シンプルなプレーが特徴でレフティーなので、トレーニングではベルギーの選手より目立つ機会は多かった。ゴールを意識してプレーできるので、スモールゲームでは常にゴールを狙うので、彼の良さは常に出ていたと思う。シントのコーチの評価も良かった。

【課題】

日本での二人の課題は守備で切り替えは速くなっているが、ボールダッシュ能力はまだ甘くその辺を盗んで帰って欲しかった。

- 大庭圭人(大分 U-15)FW

苦手な守備は積極的にチャレンジしていた。逆に攻撃での仕かけの部分でもっとチャレンジできたのに、やりきれなかったのが残念。こういう状況で状況判断して自分の良さをかせげなかったのはもったいない。

- 西尾基希(宇佐 U-15)V0

ボールに関わっているときは良いが、スペースへ飛び出しや運動量が少し少ないのが顕著に現れた。技術は高いが今後上のカテゴリーに行くとなると通用しなくなるので、帰国後アプローチして改善したい。

●アカデミーダイレクターの総評

2人とも初の海外ということでもかなり緊張していた。そういう中でどう取り組めるか、チャレンジできるかを見極める良い機会となった。自分は一昨年に続いて2回目となるので、ある程度要領もわかっており、彼らの一つ一つの行動、言動が楽しみだった。到着して5時間後にはトレーニングに合流したので、緊張する暇もなく参加できたことは逆に良かったかもしれない。シントの選手は日本人に慣れているので、とてもフレンドリーだったし、初日からトレーニング中にも笑顔が見えたり助けてもらえたりした。能力的には U-16 の中に入っても普通にできるくらいのレベルだが、体の使い方、球際の強さには戸惑っていた。日本とのぶつかり合いとは間合いが違ったり、大きさが違ったり。最初是对応できなかったが、徐々に自分の力は発揮できてきた。U-18 でも力的には通用するが OFF の動きや準備ができてないと潰されるケースが多かった。ヨーロッパの選手は 18 歳くらいから体ができてくるので、抜けそうでも足が伸びたりしてきて簡単には行かなかった。ゲームになるとトレーニングでは見られなかった闘争心や戦う姿勢が強固になりスイッチが入ると持っている力以上のものを発揮する力をまじまじと見せつけられた。なかなか日本人には見られない様子は彼らにとって大きな刺激になったと思う。シントには U-15 年代で毎年行かせてもらっているが、改めてこの年代で刺激を入れることがベストであると感じた。

■活動写真



【活動 3:基本情報】

■クラブ名	大分トリニータ
■活動タイトル	大分トリニータ U-17 ブラジル(ヴィラ・ノヴァ)研修
■活動種別	海外活動(個人単位)
■実施場所(国/都市)	ブラジル/ゴイアス州
■協力先	ヴィラ・ノヴァ
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-17、U-16、指導者
●対象者詳細	AD: 高田哲也/大分 U-18:佐藤隼人、増永大生獅
■活動期間	10月12～25日

【活動報告詳細】

■活動目的

早い年代で異文化に触れることでサッカー選手として一人の人間としての成長に刺激を与えること(食事、言葉、生活など)。ポテンシャルのある選手にブラジルのサッカーを体感させ、将来のトリニータにつなげたい。

■活動概要

ブラジルのヴィラ・ノヴァでU-17,U-20のTRに参加。異文化での対応能力、チームのフィロソフィである一体感、ハードワーク、アグレッシブ、諦めないことを体現しつつブラジルで湧き上がるような経験をつみ、今後に向けての成長につなげることが狙い。

■実施報告・成果

【成果】

九州ではそれなりにできる2選手だが、自分の特徴がどこまで通用するか検証したかった。二人とも帰国して球際や力強さが少しずつ出てきたし、周りもそれに引っ張られて良くなったかと思う。

● 増永大生獅

ゴール前の得点力は彼の魅力だが、そこに関しては思った以上に通用していた。向こうのチーム関係者も評価してくれていたし、何よりもシュートに向かう姿勢を評してくれていた。オフの動き、相手DFとの駆け引きをもっと覚えたり、背後への飛び出しができるようになったりすればもっと教師を与えられる選手になるのでそこをもっとアプローチしていきたい。相手を背負っていてもある程度ボールキープできる自信も持てたと思う。良い選手になるために90分ハードワークしながら勝負を決められる選手になってほしい。

● 佐藤隼人

ビルドアップに関してはJY時代から能力は高かったがLCBをやるようになり、さらに質は上がってきた中でブラジルの芝でも普通にやれていたため、そこはかなり通用していた。サイドチェンジも精度が高く自信は持てたのではないかな。加えて、コーチングができるようになればインターセプトももっとできると思う。

【課題】

日本人特有のシャイな部分が最初はあったが徐々になくなっていた。彼らもコミュニケーションをとってきてくれて2日目ではなじめたと思う。二人とも日本での課題と同じではあったが、よりブラジルに来て克服する重要性は感じてくれたと思う。実際帰国してからは変わったとみんなが評価してくれているので、継続して成長してほしい。

● 増永大生獅

昨年 U-15 日本代表に選出されてから少し伸び悩んでいたため、ちょうど良いタイミングでのブラジル研修だった。日本ではプレーの連続性、運動量の少なさが課題であったが、ここでは積極的に克服しようとチャレンジしていた。体力のベースが低いので徐々に落ちてはきたがチャレンジしていた姿勢は評価したい。だがまだまだだし苦しくなるとプレーの精度、判断が遅くなる傾向があるので改善したい。攻撃では彼のゴールの意識、シュート力はブラジルの選手と引けを取らない。ゴール前で良いプレーはかなりできていた。攻守両面で存在感があるプレーができるようにアプローチしていきたい。

● 佐藤隼人

球際の弱さをブラジルに行きすぐ露呈してしまった。みんなに笑われてスイッチが入り、かなりボールに強く行けるようにはなった。まだ足先で行くことが多く、簡単に入れ替わることが多かったが、日に日によくなった。

●アカデミーダイレクターの総評

到着まで時間かかり、とてもしんどい旅だったが、ちょうどその日に日本との親善試合があり、ブラジルが勝っているときは機嫌が良かったものの、日本が逆転してからは機嫌が悪くなった。ただ彼らのホスピタリティが素晴らしく暖かく迎えてくれた。U-17 の TR 参加をメインに U-20 やトップの TR にも参加させてもらった。ブラジル 2 部のチームで正直上手い選手は少なかったが、球際、スピリット、強引性は日本にはないたくましさがあった。二人は、最初こそおとなしかったが、徐々に自分の力を発揮し始めると、評価も日々上がっていった。彼らが生活を懸けてプレーしていることが二人に火をつけてくれたし、今のままではダメだと感じてくれたのが何よりも今回の財産になったと思う。DF 佐藤は初回の TR で相手に吹っ飛ばされスイッチが入ったし、FW 増永はシュートの積極性が評価され自信を持ってプレーし始めた。U-20、トップに入った方が周りのサポートが早く、二人はやりやすそうだった。今回提携して初めての試みだったが、ブラジルに来て本当に良かったと思う。ハード面は日本の方が整備してあるが、サッカーの歴史がクラブ全体でオーラを解き放ち、良い緊張感で2週間できたことは彼らにとって大きかった。伸び悩んでいたが、少し吹っ切れてチャレンジすること、仕かけること、ボールを奪いこくこと。当たり前だがやり通すことが成長させてくれると感じてくれたと思う。ヴィア・ノヴァのスタッフも日本語を覚えてくれたり、食事に連れて行ってくれたり、充実した期間を過ごせた。チームで遠征できるに越したことはないが少人数で異国の地で、環境も違う中で旅をさせることが強くなる早道でもあった気がする。彼らが今後大きく羽ばたいていけるよう、この経験を活かして大きくなってほしい。

■活動写真





テゲバジャーロ宮崎

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	テゲバジャーロ宮崎
■活動タイトル	IDP 導入・推進プロジェクト
■活動種別	その他
■対象者	
●対象チーム・主な年代	指導者(U-10~U-18)
■活動期間	3月26日~4月1日

【活動報告詳細】

■活動目的

本活動は、テゲバジャーロ宮崎の指導者および地域指導者に IDP の理解と活用を促進することを目的としています。今回、イングランドで実績のある専門家テリー氏とアダム氏を招聘し、指導者向けの講習会やワークショップを実施。選手育成の質を向上させ、個別指導の具体的な実践法を学ぶ機会を提供します。本活動を通じて、テゲバジャーロ宮崎のアカデミー強化を図るとともに、地域全体の指導力向上とサッカー文化の発展に貢献していきます。

■活動概要

主な内容として CPD イベントを実施し、IDP の方法論やチームセッションでの活用、試合日の目標設定について指導者向け研修を行います。また、メンターミーティングでは指導者とともに IDP の目標設定や行動計画を策定し、選手との個別ミーティングを通じて各選手の IDP を具体的に設定。その後、コーチングセッションを実施し、選手の成長を支援します。

■実施報告・成果

【成果】

本プロジェクトでは、イングランドの専門家であるテリー氏らを招聘し、IDP の概念・構造・運用について体系的に学ぶ機会を設けた。これまでクラブでは IDP に関する座学的な学びを重ねてきたが、今回のプロジェクトではピッチセッションや実際のトレーニング視察を通じて、現場に即した実践的な理解が深まった点が大きな成果である。理論だけでなく、実際の指導現場でどのように IDP を落とし込むのかを具体的に学ぶことで、スタッフ一人ひとりの IDP 活用に対する解像度が格段に高まった。また、選手に対しては、IDP を「自分の成長のためのツール」として主体的に捉える姿勢が芽生え始めている。個別面談や実践的なフィードバックを通じて、選手自身が自らの課題や目標を意識し、それに向けた行動の質を高めようとする動きが見られたことは、育成文化の進化を示す重要な兆しである。さらに、技術・戦術・フィジカル・メンタルの 4 要素に基づく選手像の明確化と、それに即した指導の一貫性確保という観点でも、クラブの育成方針にさらなる軸が生まれた。「IDP No.1 クラブを目指す」という明確なビジョンが共有されたことにより、今後の育成戦略における中長期的な方向性がより具体的に定まった。

【課題】

今回の取り組みを通じて、いくつかの課題も明らかになりました。最も顕著だったのは、選手たちの目的意識の薄さです。研修初日、トレーニングの目的を問われた際に答えに詰まる場面が多く見られ、普段から「なぜこ

の練習を行っているのか」「自分にとって何が課題か」といった問いを自らに投げかける習慣が不足していることが浮き彫りとなりました。IDP を活用し、選手が日常的に目的意識を持って取り組めるような指導の継続が求められます。また、日々のトレーニングにおいても、個々の選手の課題に即した状況設定やコーチングの工夫が十分とは言えず、より個別最適化された練習メニューの構築が今後の課題です。全体練習の中でも、選手ごとの育成に応じたアプローチを意識的に組み込むなど、現場レベルでの指導の精度向上が求められます。さらに、研修を通じてスタッフの意識は高まったものの、IDP の実践を現場に定着させるには、継続的に支える体制や評価の仕組みづくりが必要だと感じます。ただし、この点については、テリー氏による定期的なフォローアップの継続が見込まれており、その支援を活用しながら、日常への定着と実践の質の向上を図っていく予定です。

●アカデミーダイレクターの総評

今回、IDP のスペシャリストであるテリー氏から、概念・構築・運用に至るまで多くの学びを得た。これまでアプリを活用して IDP を運用してきたが、本研修を通じてその本質を深く理解し、実践に即した改善のヒントを多数得ることができた。

クラブのフィロソフィと選手像を結びつけ、目的を持ったトレーニングを日常的に設計・運用する重要性を再認識したとともに、ピッチセッションでは、実際の指導現場での落とし込み方にも触れる貴重な機会となった。スタッフへの IDP 導入や育成支援はすでに進めているが、今回の学びを通じてその質をさらに深め、育成文化をより高い次元へと進化させていく。

また、テリー氏から提案のあった「IDP No.1 クラブ」というビジョンは、我々自身も目指すべき方向として強く共感しており、その実現に向けて、スタッフの質の向上を鍵と捉え、日々の実践を積み重ねていきます。

■活動写真



【活動 2:基本情報】

■クラブ名	テゲバジャーロ宮崎
■活動タイトル	宮崎国際サッカーフェスティバル 2025
■活動種別	③国際大会主催
■実施場所(国/都市)	
■協力先	
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-18、U-17
●対象者詳細	
■活動期間	7月28日～8月1日

【活動報告詳細】

■活動目的

国外、県外からサッカーチームを招き、国際交流や県内サッカーの競技力を向上させるとともに、大会を通じて地域振興と「スポーツランドみやざき」の情報発信及び推進を図ることを目的とします。

■活動概要

海外 2 チームを含む計 10 チームが宮崎県に集まる「宮崎国際サッカーフェスティバル 2025」を主催

- 大会名称 宮崎国際サッカーフェスティバル2025
- 開催日程 2025年7月28日(月)～8月1日(金)
- 開催場所 アミノバイタルトレーニングセンター宮崎、県総合運動公園ひなた陸上競技場、県総合運動公園サッカー場、清武総合運動公園 多目的広場、綾町小田爪運動公園、いちご宮崎新富サッカー場
- 参加チーム(順位順) 光州 FC U-18 錦湖高等学校(韓国)、宮崎日本大学高等学校、V・ファーレン長崎 U-18(長崎県)、宮崎工業高等学校、国見高等学校(長崎県)、テゲバジャーロ宮崎 U-18、宮崎県選抜、鵬翔高等学校、国立北門高級中学(高等学校)サッカー部(台湾)、宮崎第一高等学校
- 主催 宮崎国際サッカーフェスティバル実行委員会
(構成団体:宮崎県、宮崎市、公益財団法人宮崎県観光協会、公益社団法人宮崎市観光協会、株式会社テゲバジャーロ宮崎)
一般社団法人宮崎県サッカー協会

■実施報告・成果

【成果】

宮崎県から 1 チームおよびJクラブのアカデミーから 1 チーム新しく参加チームを迎え、参加チーム数は昨年より 2 チーム増加し、10 チームでの開催となりました。

大会期間中は、季節的な気候や選手のコンディションを考慮し、すべての試合のキックオフを基本的に 17 時以降に設定することができました。

また、安全面においても万全の体制を整えた結果、大きな事故やトラブルもなく、全日程を無事に終了することができました。

さらに、フェスティバル期間中には指導者交流会を開催し、オン・ザ・ピッチだけでなく、海外チームの指導者との情報交換の場も設けました。これにより、指導理念や育成方針など、多角的な視点からの知見を得る貴重な機会となりました。

【課題】

より良い大会を目指すため、大会開催時期の再検討、レギュレーションの見直し、チーム数の適正化、交流機会のさらなる充実などは、今後の検討材料になりました。

●アカデミーダイレクターの総評

昨年よりチーム数が2つ増え、全10チームによる大会開催となりました。最終日を除き、すべての試合を17:00以降のキックオフに設定したことで、選手のコンディション管理や試合の質の向上にもつながったと感じています。

予選リーグはイレギュラーな組み合わせではありましたが、拮抗した試合が多く、各チームのレベルアップを促す非常に有意義な大会となりました。

2年連続で韓国の光州FCが優勝を果たしましたが、宮崎のチームにとっても大きな刺激となり、今後のさらなる成長につながる機会になったと感じております。

■活動写真





鹿児島ユナイテッドFC

【活動 1:基本情報】

■クラブ名	鹿児島ユナイテッドFC
■活動タイトル	第1回 鹿児島国際ユース(U-20)サッカーフェスティバル
■活動種別	国内大会主催(年間を通じたリーグ戦)
■実施場所(国/都市)	鹿児島県指宿市
■対象者	
●対象チーム・主な年代	U-18
■活動期間	3月28日～30日

【活動報告詳細】

■活動目的

1. 育成強化と選手発掘

全国のJリーグアカデミー所属選手が高いレベルで競い合うことで、技術・戦術・フィジカル・メンタルの成長を促進する。

各クラブのスカウトや指導者が将来のトップチームや代表チームで活躍できる有望な選手を発掘する機会とする。

2. 指導者・審判の育成と交流

指導者同士の情報共有や研修を通じて、育成プログラムの質を向上させる。

審判の実践経験を増やし、レフェリングのレベル向上を図る。

3. Jリーグアカデミーの発展と地域貢献

Jリーグアカデミー全体の強化と発展を目的とし、各クラブの育成方針の統一性や競争力を高める。

開催地の地域住民や子どもたちにサッカーの魅力を伝え、競技人口の拡大や地域スポーツの活性化に貢献する。

■活動概要

- 大会名称: 2025 鹿児島国際(U-20)サッカーフェスティバル
- 主催: 鹿児島ユナイテッドFC
- 共催・協力: 各開催地域の自治体・サッカー協会、スポンサー企業
- 開催日程: 2025年3月28日(金)～3月30日(日)
- 開催会場: 鹿児島県指宿市フットボールパーク など(複数会場を使用)
- 参加チーム: Jリーグ各クラブのアカデミー(U-18)/九州内大学チーム (海外チーム招待は実現せず)
- 競技方式: 4チーム総当たり グループリーグ+順位決定戦、試合時間:90分(ハーフタイム15分)
- ルール: JFA 競技規則に準ずる
- 表彰: 優勝、準優勝、第3位
- 参加費: 20,000円(各クラブ負担)

■実施報告・成果

【成果】

競技面では、Jクラブ、大学生との対戦を通して、プレッシャーの速さ・球際の強さを高いレベルで体感することができた。チームが目指すプレー・基準に向けて取り組んできたことが一定程度実践できていた。

また、フェスティバルという大会形式上、1日に複数チームと試合を行うことができ、多くの選手がプレーする機会を得て、チーム内での競争を促すことができた。また、3日間試合を行うことで、身体的な疲労はあったものの、前日の課題を翌日に修正できるといった利点を感じ、活かすことができていた。運営面でも、大きな怪我なく安全にかつ、Jクラブがキャンプを実施する環境でプレーすることができ、全体的に良い環境で大会を実施することができていた。また、審判も協会からの派遣という形で実施したことで、トレーニングマッチの様相ではなく、可能な限り公式戦、真剣勝負の環境を整えることができた。

【課題】

Jクラブ、大学生からの高いレベルでのプレッシャーの速さ・球際の強さに対して、正確な技術とポジショニング、体格の大きな相手、速い相手に対して負けないフィジカルの面は、一定程度は成果としてあったものの、当たり負けする部分や技術的なミスも多く出たので、さらなる向上が必要であると感じた。運営面では、直前まで大会出場チームが決定しないなど、明確になっていない部分があったため、次回に向けて早めの行動と意思確認、運営準備が必要だと感じた。また、対戦相手においてもより質の高いチーム(技術レベル、強度)、海外チームに参加してもらえるような準備と環境を整えていきたい。

●アカデミーダイレクターの総評

Jクラブに大学生を加えたフェスティバルとなった。当初、韓国・中国からチームを加えた国際大会を計画したが諸般の事情で国内チームのみの大会となった。チーム数は少ないものの、一つひとつの試合が強度と質を保ちながら開催できた点は評価できる。ピッチコンディションもすべての試合を天然芝の良い状態で試合ができた。今後、Jクラブ・高体連からも、より質の高いチームを加え、海外チームも招きチーム数を限定しながら、より質の高い全国の基準となる機会を作り選手の成長を促すように働きかけたい。

■活動写真

